

43019

教科書文庫

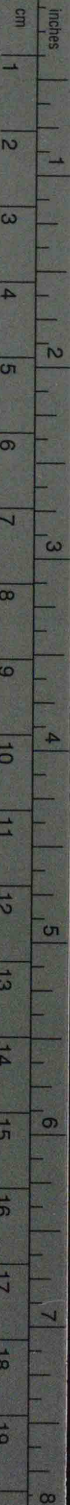
| |
|----------------|
| 4 |
| Z10 |
| 42-1912 |
| 20000 80139 |

Kodak Gray Scale



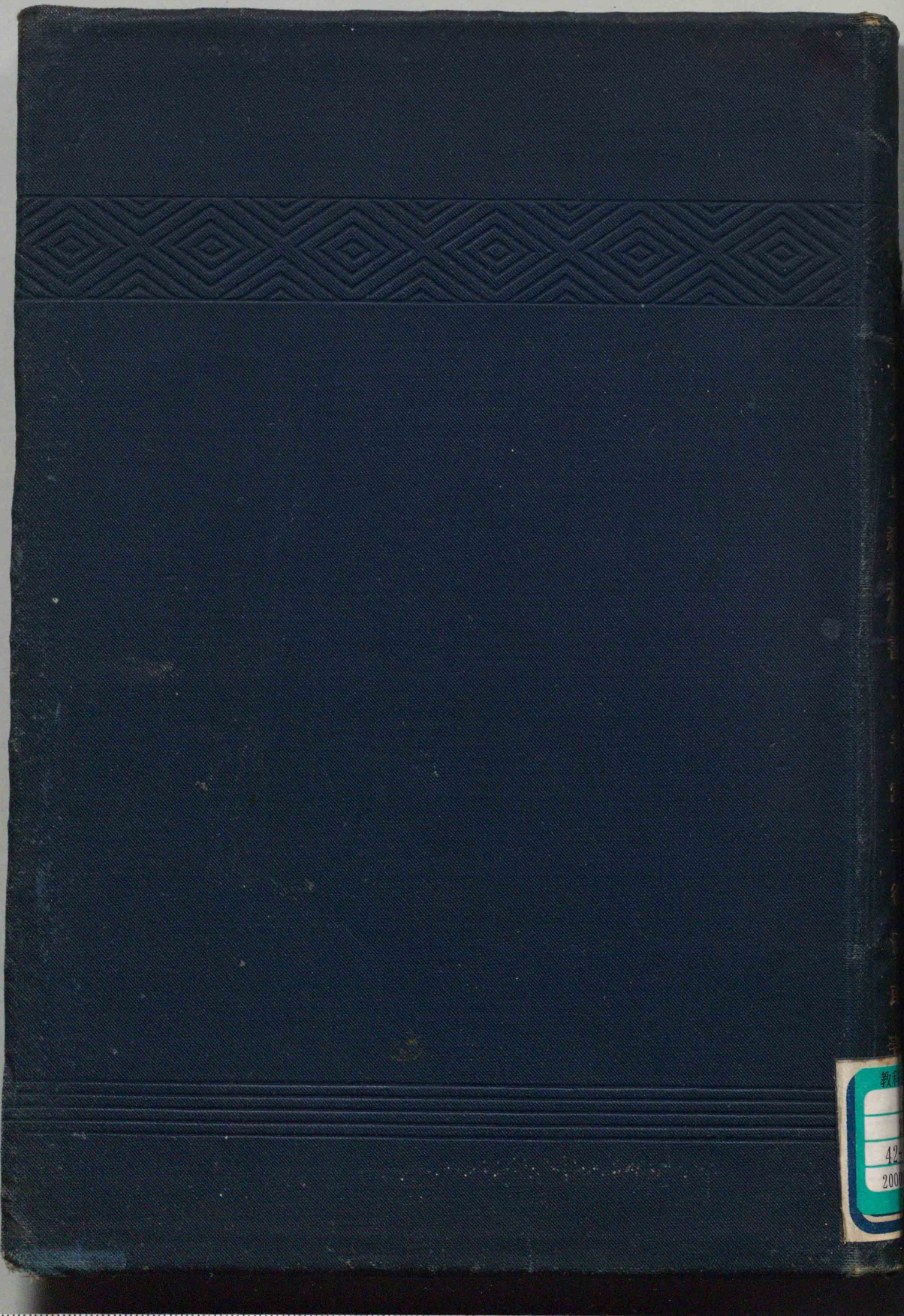
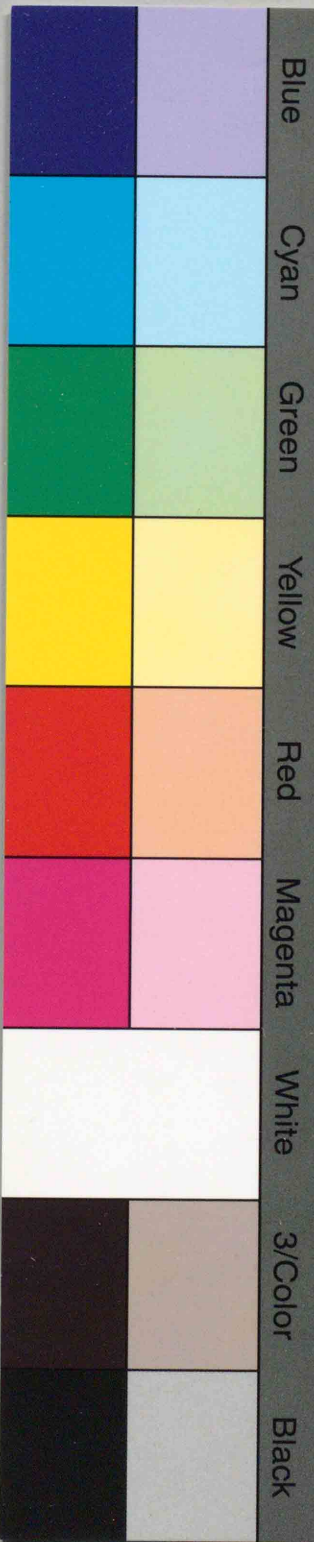
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科
42-
2000



資料室

教科書文庫
4
210
42-1912
2000080139

4b
210
大3



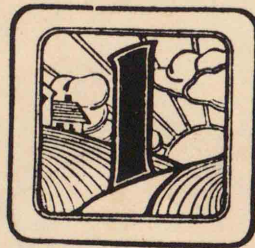
子女
書科教史本日

卷 下

論教校學範師等高子女京東

郎 治 德 士 富

著



霞成起

広島大学図書

2000080139



子女
日本史教科書 下卷 目次

第四編 近古

| | | |
|------|---------------|----|
| 第一章 | 源頼朝 鎌倉幕府 | 一 |
| 第二章 | 鎌倉幕府 | 二 |
| 第三章 | 鎌倉幕府 | 三 |
| 第四章 | 鎌倉時代の佛教・文物 | 一三 |
| 第五章 | 蒙古と高麗 元寇 | 一九 |
| 第六章 | 朝廷と幕府 | 二三 |
| 第七章 | 北條氏の滅亡 | 二八 |
| 第八章 | 建武中興 足利尊氏の反 | 三二 |
| 第九章 | 楠木正成・新田義貞等の勤王 | 三六 |
| 第十章 | 吉野の朝廷 | 四〇 |
| 第十一章 | 室町幕府 | 四五 |

日本史教科書 下卷



第五編 近世

| | | |
|-------|-------------|-----|
| 第十二章 | 關東管領 | 四九 |
| 第十三章 | 應仁の亂 | 五三 |
| 第十四章 | 室町時代の佛教文物 | 五六 |
| 第十五章 | 群雄割據 一 | 六一 |
| 第十六章 | 群雄割據 二 | 六八 |
| 第十七章 | 明との交通 高麗と朝鮮 | |
| 第十八章 | 歐羅巴人の來航 | 七二 |
| 第十九章 | 織田信長 | 七六 |
| 第二十章 | 豊臣秀吉 | 八二 |
| 第二十一章 | 朝鮮征伐 | 八六 |
| | 徳川家康 關原の戰 | 九二 |
| | 近古の概括 | 九七 |
| | | 一〇三 |

| | | |
|------|-------------------|-----|
| 第一章 | 豊臣氏の滅亡 | 一〇三 |
| 第二章 | 徳川家光 江戸幕府 一 | 一〇六 |
| 第三章 | 江戸幕府 二 | 一一〇 |
| 第四章 | 海外諸國との交通 | 一一二 |
| 第五章 | 天主教の禁 島原の亂 | 一一六 |
| 第六章 | 徳川綱吉 | 一二〇 |
| 第七章 | 徳川吉宗 | 一二四 |
| 第八章 | 江戸時代の佛教及び文物 一 | 一二九 |
| 第九章 | 江戸時代の佛教及び文物 二 | 一三四 |
| 第十章 | 寛政の治 諸藩の治 西洋學術の傳來 | 一三七 |
| 第十一章 | 國史古典の研究 尊王論 | 一四三 |
| 第十二章 | 露國人の來航 海防論 蝦夷 | |

| | | |
|------|-------------|-----|
| 第十三章 | 地の開拓 | 一四八 |
| 第十四章 | 北米合衆國使節の來朝 | 一五二 |
| 第十五章 | 開港攘夷の論 和親條約 | 一五六 |
| 第十六章 | 安政の大獄 幕府の衰頹 | 一六〇 |
| 第十七章 | 長州征伐 | 一六四 |
| 第十八章 | 大政奉還 | 一六九 |
| 第十九章 | 鳥羽・伏見の戰 | 一七三 |
| | 明治戊辰の役 | 一七六 |
| | 近世の概括 | 一八一 |
| | 現代の一般 | 一八六 |

子女
日本史教科書 下卷

富士徳治郎著

第四編 近古

第一章 源頼朝 鎌倉幕府 一

幕府の組織
を設け、和田義盛をその別當に任じて、軍事警察の事を掌らしめぬ。その後義仲の滅ぶるに及び、更に公文所（後、政所に稱を置き、）大江廣元を別當として、政務を統べしめ、つぎて又、問注所（モウシュウ）を開き、三善康信（ヤスノブ）を執事として、訴訟の裁判を掌らしめき。大江・三善の兩家は、文學・明法を以て、世々朝廷に仕へしが、廣元・康信等は、頼朝の招に應じて、鎌倉に下り、朝臣の輔佐

頼朝義經不和の理由

義經の出奔

守護地頭設置の理由

守護地頭の設置 (一八四五)

大いにこれを輔けたり。

頼朝・義經の不和

源頼朝 源義經

頼朝及義經の花押

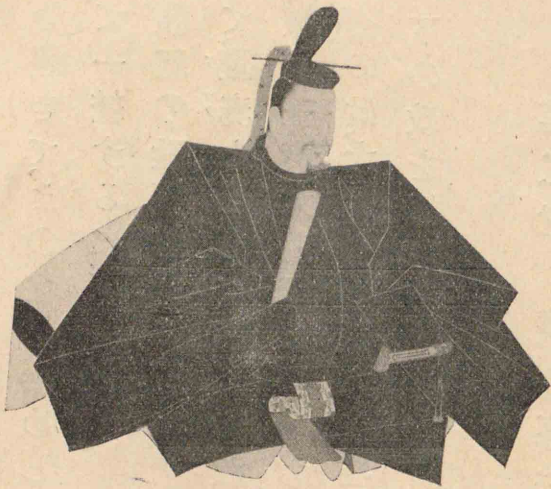
義經平家を滅ぼして、威名高く、專恣なる所行ありし上に、梶原景時の讒言さへありければ、頼朝悪みて、義經を殺さんとせり。義經これを憤り、叔父行家と共に、頼朝を討たんとせしが、果さずして、京都を出奔したり。

守護地頭の設置

當時平氏の殘黨

なほ各地に出没し、且義經等の事起りて、天下穩ならざりき。頼朝深くこれを憂へ、大江廣元の議により、後鳥羽天皇の文治元年、奏請して、諸國に守護・莊園・郷保に地頭を置き、守護には、専ら軍事・警察を掌らしめ、地頭には兵糧米の

義經の死



源頼朝の像(本圖は東京皇宮本館蔵) 山本國大蔵版 高城雄神護寺蔵

取り立てに當らしめ、何れも家人を以てこれに任じたり。これより、國司・領主の權は、漸く守護地頭に移り、天下の實權は遂に武家に歸するに至れり。

頼朝の奥州征伐 行

家は、都を逃れて後、ほどなく捕斬せられしが、義經は陸奥に落ち行きて、藤原秀衡に頼りぬ。秀衡厚くこれを遇したりしが、秀衡卒し、子泰衡繼ぐに及び、頼朝の命

奥州征伐
(一八四九)

を受けて、義經を殺せり。義經の妾静は歌舞に長じ、貞女の名あり。頼朝は、泰衡が早く義經を討たざりしを責め、文治五年、自ら大軍を率ゐて、これを攻め滅ぼし、奥州總奉行を置きて、その地を治めしめたり。是に於いて、海内始めて一統するに至れり。

議奏

頼朝征夷大將軍に拜せらる
(一八五二)

頼朝の政權掌握 頼朝、また己に親しき公卿十人を選びて、議奏となして朝廷の改革を行へり。建久三年に至り、頼朝征夷大將軍に拜せらる。これより、武家の棟梁たるものは、大抵この職に任ぜられて、明治維新に至るまで、天下の政を握れり。

第二章 鎌倉幕府 一一

頼朝の善政

頼朝の人物

頼朝の薨去
(一八五九)

時政の威權

頼朝の政治と人物 頼朝は、前代の奢侈文弱に鑑み、勤儉尙武の美風を奨励し、政令は簡易にして、よくゆきとどきければ天下皆これに悦服せり。頼朝、性また沈毅、宏量にして、よく人を用ひたり。されど、猜疑の心深く、一族に對すること冷酷にして、温順なる範頼すら、その終りをよくせざるほどなりしかば、遂に家門の衰滅を早からしめたり。

北條氏の專恣 土御門天皇の正治元年、頼朝薨じ、長子頼家これにつきぬ。しかるに頼家は年尙若くして、遊樂に耽りしかば、その母政子、實權を握り、北條時政等庶政を裁決せり。時政は政子の父にして、源家創業の功臣なれば、威權甚だ盛なりき。

比企氏の滅亡

既にして、頼家病あり。政子、時政と謀り、頼家の弟千幡と、

頼家の遭害



源頼家の像(京都建仁寺藏)及び其の筆蹟
本圖は東京帝國大學藏版の模寫

二位源朝臣頼家

頼家の子一幡とに天下を二分して與へんとせり。一幡の外祖比企能員大に憤り、頼家と謀り北條氏を滅ぼさんとせしが、事露はれて能員及び一幡は殺され、頼家は伊豆の修善寺に幽せられ、ついで害せられたり。

畠山氏の族滅

義時の執權

和田氏の滅亡

實朝の人物と境遇

實朝の遭難(一八七九)

山は裂け海はなれ
あせなれ
ん世なれ
りとも
君に二
心吾れ
あらめ
やも
(實朝)

千幡、將軍職をつぎ、實朝といふ。時政執權となり、威權益盛なりき。既にして、時政は源氏の忠臣畠山重忠を誣ひて、その一族を滅ぼし、遂に實朝を廢せんと企てしが、事露れて退隱し、その子義時代りて執權となりぬ。義時、奸謀父に過ぎ、和田義盛の功多くして、一族強大なるを忌み、之を怒らせて兵を擧げしめ、遂に攻めて、その族を滅ぼし、自ら侍所別當を兼ね、文武の權を一身に集めたり。源氏正統の絶滅 實朝は有爲の才ありしも、北條氏に制せられて、如何ともすること能はず、専ら和歌風流の遊を事とせり。承久元年、實朝、右大臣拜賀の禮を、鶴岡八幡宮に行ひしが、頼家の子、僧公曉に害せられ、ついで公曉も、また義時に殺され、源氏の正統全く絶えたり。頼朝が將

我れは新に
そは守りよ
島守の
隱岐の
海荒の
浪風
吹き
心して
後鳥羽
皇

戦後の處分

義時の悪逆

六波羅府の設置

途を分ちて、京都に攻め上らしめたり。官軍これを美濃に防ぎて利なく、宇治勢多の守も亦破れたり。泰時等遂に京都に進み、義時の命により、天皇に迫りて、位を後堀河天皇に傳へしめ、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐阿波に遷し奉り、この事に與れる人々をも處刑せり。後鳥羽上皇は、浪風荒き島々にて、見るもあさましきあばら屋に、僅に雨露を凌ぎておはせしが遂にその處に崩御ありければ、聞く者涙を落さざるはなかりき。義時が悪逆實に極まれりといふべし。この亂後、泰時、時房は京都の六波羅に留りて、近畿西國の事を掌り、且、暗に朝廷に備ふ。これ即ち六波羅探題の始めなり。北條氏の一族、相つぎて、これに當り、幕府の權勢

愈盛なり。

泰時の仁政と評定衆

貞永式目

皇位の繼承及び將軍執權の交代

三浦氏の滅亡



泰時筆及花押

政務に參せしめ、また貞永式目五十一條を定めたり。後世武家法制の模範とす。

將軍の廢立 さて皇位は、後堀河天皇の後、四條天皇、後嵯峨天皇を経て、後深草天皇に傳はり、鎌倉にては泰時卒し、孫經時、時賴相つぎて執權となりぬ。また將軍賴經廢せられて、その幼子賴嗣立り。時賴は北條氏を滅ぼさんとせる強族三浦氏を滅ぼし、つぎて、また將軍賴嗣を廢

親王將軍

時頼の勤儉
公正

松下禪尼

し、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を申し下して、これに代へ奉れり。これを親王將軍の始とす。

時頼の良政 時頼深く心を政治に用ひ、勤儉公正にし

て、恩威並

び行はれ

たり。有

名なる松

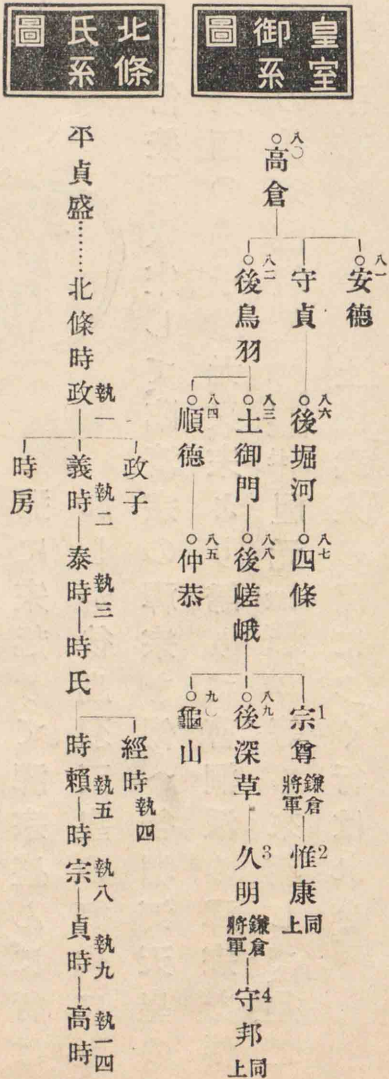
下禪尼は、

すなはち

時頼の母

なり。

北條時頼の像(原本は東京帝國大學藏) 松下禪尼の寫(萬壽寺藏)



第四章 鎌倉時代の佛教文物

新宗派と禪宗

これまで、佛教はその教義煩雜に過ぎ、また僧徒の腐敗甚だしかりしかば、新宗派を唱ふるもの出で來れり。高倉天皇の御代に、僧源空、浄土宗を創め、つぎて、その弟子親鸞は、浄土眞宗を起し、肉食、妻帯を

新宗派の起
れる理由

浄土宗

浄土眞宗

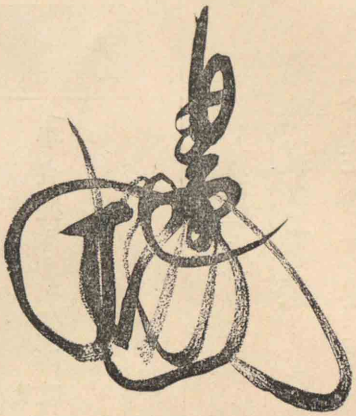
時宗
日蓮宗

新宗派の特
徴

禪宗の傳來

宋僧の來朝

愚承凡親



日蓮花押

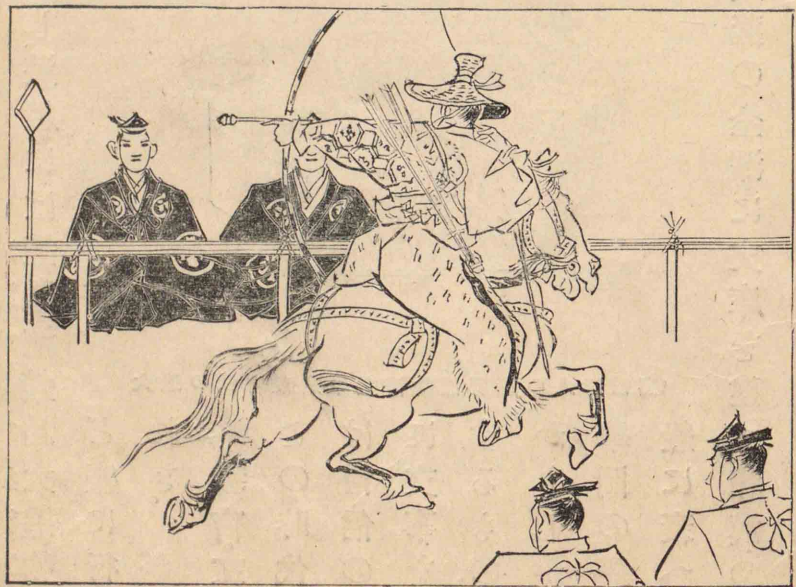
親鸞筆

許し、多くの信徒を得たり。その後、僧一遍は時宗を開き、僧日蓮は法華宗を唱へたり。此等の新宗派は、皆所説卑近にして、修行容易なりしかば、廣く民間に行はれたり。村上天皇頃支那に宋起りて、禪宗盛んに行はれしが、後鳥羽天皇の御代に至りて、僧榮西、入宋して、臨濟宗の禪宗を傳へ、後堀河天皇の御時、榮西の弟子道元、又、宋より歸りて、曹洞派の禪宗を傳へ、その後、宋僧道隆鎌倉建長寺開山、祖元鎌倉圓覺寺開山等も來朝して、益、これ弘布をはかり、上流武人の間に多く行はれき。

武士道

武家の風俗

鎌倉武士 鎌倉にては頼朝以來、常に京都公卿の華奢、文弱の弊風を斥け、質素を守り、武勇を尙び、恩義を重んじ、禮儀を慎むを武士の本分としたり。されば武家の女子も節義を勵み、質素剛健の風ありき。武家の衣服には狩衣、水干、直垂、素襖等ありて、大凡前代に同じけれども、

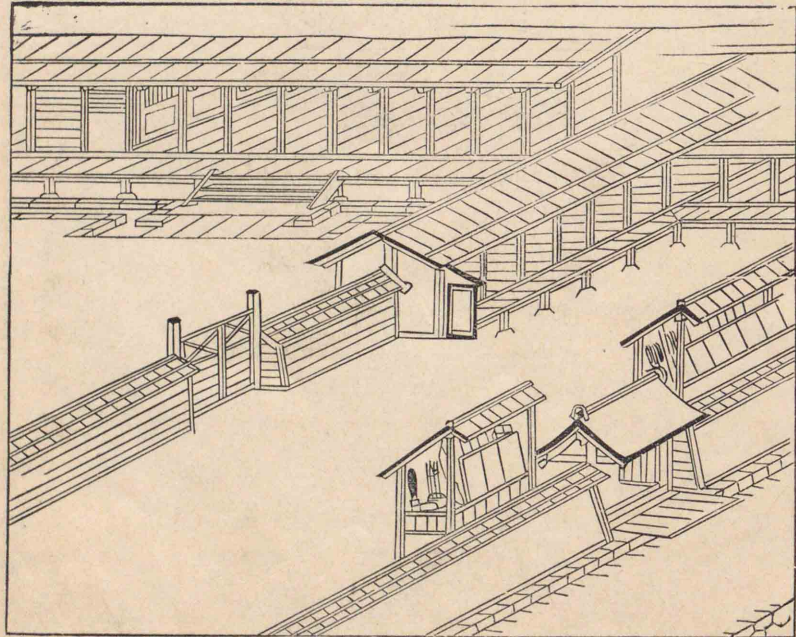
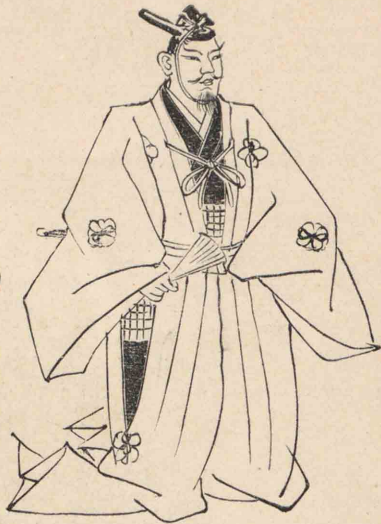


流鏑馬

武家水干



素襖



鎌倉時代武士の邸宅

學問の衰微

邸宅と共に簡易を旨とし、遊戯には笠懸・流鏑馬・大追物な



り。北條實時の義時孫が武藏の金澤に文庫を建て、和漢の書

大鑑の武士將東京室博物館所蔵の形模寫

ど盛に行はれき。教育文學この時代に僧侶の外に文事を志するもの少かりしかば、學問の道一般に衰へた

國文の新體

籍を集め、子弟をも教育したるは、類ひ稀なることなりき。

和歌の流行

漢學は甚だしく衰へたりしも、國文は和漢混交の一新體を開き、尙武の時勢につれて、保元物語・平治物語・源平盛衰記などの軍記體のもの出でたり。和歌は尙盛にして、藤原俊成・定家・僧西行などの名高き歌人輩出



鎌倉時代風俗



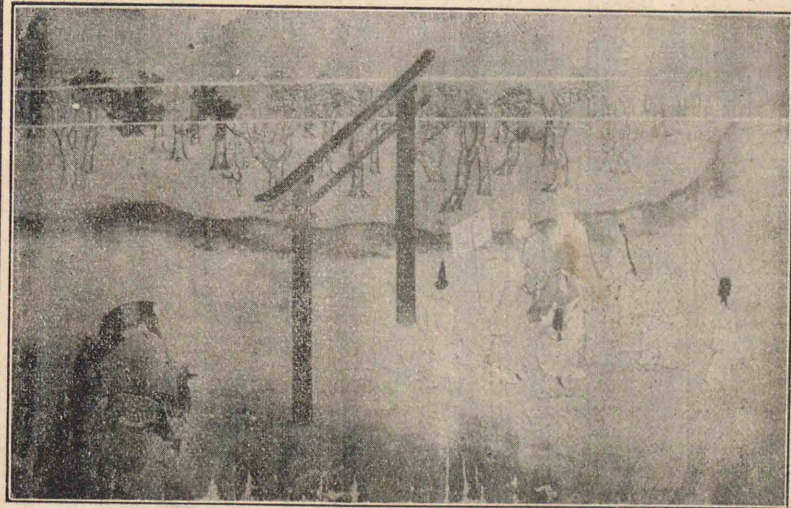
(作慶運傳)(置安門大南寺大東和大)像王仁

彫刻

建築

し、後鳥羽天皇及び將軍實朝もまたこの道の名人と稱せられ、定家の子爲家の妻を阿佛尼といひ、また和歌に巧なりき。その生子が、相傳の莊園を庶兄に奪はれしを、執權時宗に訴へんため、はるばる鎌倉に下りし時の紀行は、有名なる十六夜日記なり。

美術・工藝 頼朝、篤く神佛を崇めしより、寺塔の建造諸處に起り、佛工には運慶の如



(筆兼隆階高)卷繪記驗權日春物御室帝

繪畫

刀劍

陶工

蒙古の勃興

き名人出でぬ。繪畫には佛畫の外に繪卷物流行し、その名手も多かりき。武を尙ぶ世なれば、刀劍の製作大いに進み、粟田口吉光、岡崎正宗等世に名あり。また陶器には、加藤景正出で、後堀河天皇の御代に、入宋して陶器の製法を學び、歸りて後、尾張の瀬戸村に陶業を始め、大いにその進歩を助けたり。

第五章 蒙古と高麗 元寇

蒙古と高麗 初土御門天皇の御代、支那の北方の蒙古に鐵木眞といふ英雄起り、連りに四方を征伐せり。その後蒙古の勢益強く、遂にヨーロッパにまで侵入し、忽必烈の時に至りては國號を立てて元といひ、悉く支那をも併

高麗と我が國及び蒙古との關係



(寫模牌銅)像の烈必忽

せたり。これより先、高麗は朝鮮半島を一統してより、時々我が國に交通せしが、蒙古の勃興するに及び、遂にこれに降り。

蒙古の國書來る (一九二八) 我が國の防備 文永十一年の入寇 (一九三四)

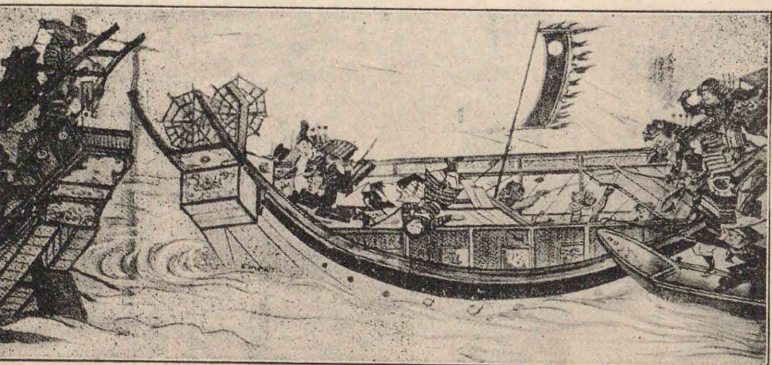
時宗の戦備 我が國にては、龜山天皇の文永五年時宗執權となる。この年忽必烈は我が國をも臣服せんと欲し、高麗王を介して、國書を贈り來れり。その書辭甚だ無禮なりしかば、時宗奏してこれを斥け、西國の將士に命じて、邊防を嚴にせしめたり。この後、蒙古の使數、來りけりけれども、我が國は毎にこれに答へざりき。文永の役 文永十一年、天皇位を後宇多天皇に譲りた

時宗



(寫模の像畫藏寺願滿後肥)像の宗時條北と蹟筆

まふ。この年、元は二萬餘の軍を發して、對馬壹岐に寇し、進みて筑前に逼りぬ。鎮西の豪族等、力をつくして、これを防ぎしが、敵軍火器を用ひて、大いに我が軍を苦しめたり。會、暴風雨起りて、賊船多く破れしかば、夜に紛れて、逃げ去りぬ。



(るよに物巻繪るためしか描の長季時竹の後肥)圖の來蒙古蒙

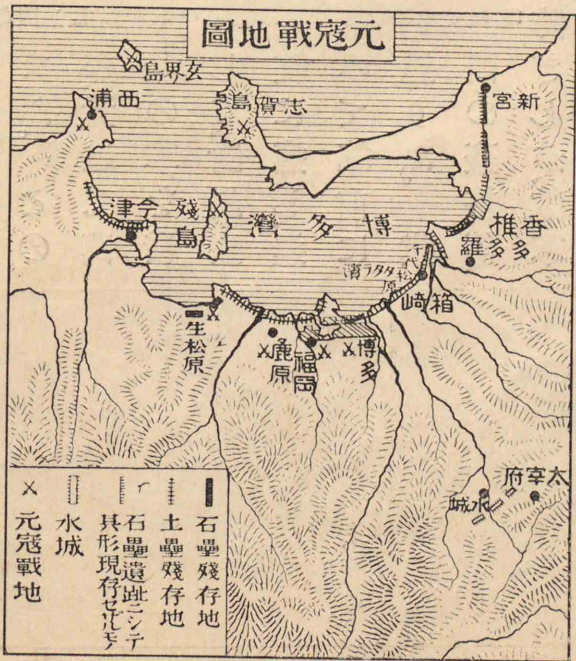
元軍の失敗

我が國の決心と防備

弘安四年の
入寇
(一九四一)

これを文永の役といふ。かくて後、元は使を遣はすこと再度に及びしが、時宗、みなこれを斬り、益、防備をつとめき。

弘安の役 弘安四年、元軍十餘萬、海を蔽うて來り侵せり。その一軍は先、壹岐を侵し、博多に迫る。我が軍よく防ぎしが、敵の一軍また來れり。龜山上皇深くこれを憂へ、身を以て國難に



元軍の大敗
戦捷の原因
元寇の影響

代らんことを祈り給ふ。會、七月晦日より、暴風俄に起りて、敵艦概ね覆没し、溺死するもの數を知らず、我が軍これに乗じて殘兵を討ち、殆どこれをつくしたり。これを弘安の役といふ。かくの如く、我が國人は義勇奉公の精神を以て、上下一致して國難に當り、大いに國威を揚るを得たり。されどもこれより幕府の財政、漸く困難となり、北條氏は次第に人心を失ふに至れり。

後嵯峨上皇の
叡旨

第六章 朝廷と幕府
兩皇統の爭端 龜山天皇は、後深草天皇の御弟にして、共に後嵯峨上皇の皇子におはせり。然るに、上皇は龜山天皇の英明なるを愛し、その御後をして、永く皇位を繼承

後深草上皇の御失意の時、伏見天皇の御即位の時、宗御即位の時、後伏見天皇の御即位の時、貞時後宇多上皇の御不滿の兩統交立の議

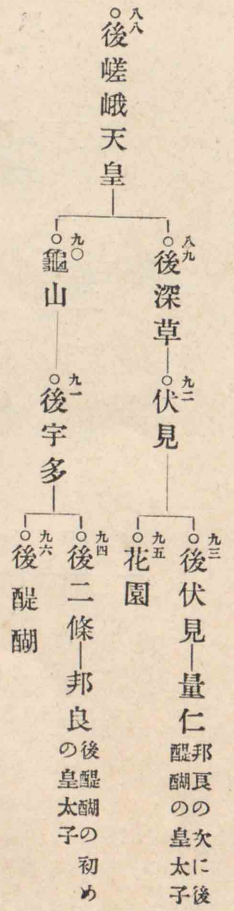
せしめたまわんと、御思召にて、天皇の御子を皇太子に定めたまひ、後深草天皇には多くの莊園を與へて、これを御子孫に傳へしめたまひき。

兩皇統と幕府 かくて、龜山天皇につぎて、その皇子後宇多天皇立ちたまふや、龜山上皇院政を聽きたまふ。然るに北條氏は奏請して、後宇多天皇の次に、後深草上皇の御子伏見天皇を立てたまへり。時宗卒し、子貞時執權となるに及び、伏見天皇はまた貞時に諭して、位を御子後伏見天皇に譲りたまひき。

兩統の交立 されば、後宇多上皇の御不滿甚だしく、使を鎌倉に遣はして、後嵯峨上皇の遺詔に違ふを責めしめたまふ。貞時よりて、後深草、龜山の兩統、十年毎に更る更

る立ちたまふべきことを定め、まづ後伏見天皇をして、後宇多上皇の皇子後二條天皇に位を譲らせ奉りぬ。後深草天皇の御後を、持明院統といひ、龜山天皇の御後を、大覺寺統と稱す。これより兩皇統の御間柄は益、悪しくなりゆきぬ。

兩皇統



五攝家

これより先、頼朝の時、攝家は近衛・九條の兩家に分れしが、北條氏に及びて、更に鷹司・二條・一條の三家も攝關たるものを出すこととなりぬ。これを五攝家とい

近衛九條鷹司二條一條

兩皇統と攝家

ふ。かくて、朝臣等も兩皇統に分屬して、互に相争ふに至れり。

五攝家



第七章 北條氏の滅亡

後醍醐天皇の御即位の政記録所

後醍醐天皇 後二條天皇崩じ、持明院統の花園天皇を経て、大覺寺統の後醍醐天皇立ちたまふ。天皇、英武にして、夙に朝權恢復の御志あり。記録所をおきて、政を勵み、以て人心を收めたまへり。

高時の失政

幕府征討の御企



後醍醐天皇の像(原本は京都大本山東本願寺藏) 京都大本願寺藏の模寫

討幕の企圖 この時

鎌倉にては、貞時の子高時、執權たりしが、暗愚にして、遊樂に耽り、長崎高資等の小人を用ひ、幕政日に亂れ、大いに人心を失へり。

天皇、この機に乗じ、王政を復せんと思召したまひ、藤原資朝、同俊基等と謀り、諸國の武士に結ばせて、密に幕府征討の事を計りたまへり。然るに、謀泄れて、果したまはず、俊基は捕へられ

諸國勤王の士

名和長年と船上山行在

押花び及筆年長

押花び及筆貞義

押花び及筆成正

押花び及筆氏尊

を陥れ、千早城を圍みし
かど、正成智勇を奮ひて、
賊兵を艱ませり。かか
るほどに、人々これに勵
まされ、播磨の赤松則村、
伊豫の土居通増及び得
能通綱等、勤王の士多く
諸國に起れり。天皇こ
れを聞き、潛に隱岐を逃
れて伯耆に移りたまひ
しに、豪族名和長年は義
兵をあげて、天皇を船上

六波羅の陥落
義貞の鎌倉討入
北條氏の滅亡
(一九九三)

山に奉じ、官軍の勢益盛になれり。

北條氏の滅亡

ほどなく足利高氏歸順し、則村等と兵

を合せて六波羅を陥れき。これより先、新田義貞、護良親王の令旨を奉じて、義兵を上野に擧げ、進みて鎌倉に攻め入りしかば、京師恢復後十數日にして、高時は遂に一族と共に自殺せり。時に元弘三年五月なり。ここに於て、北條氏亡び、鎌倉幕府は百四十餘年にして絶え、政權再び朝廷に復せり。

義貞の鎌倉に迫るや、高時諸將を分ちて要害の地を固めしむ。義貞の軍、山の内に進みて敵將赤橋守時を敗死せしめ、また義貞自ら精兵を率ゐて稻村崎に至り、海水の退きたるに乘じ奮戦して鎌倉に討入り、これを焼けり、高時その第を出でて東勝寺に逃れ、遂に一族と共に自殺せり。

正成の先驅
 記録所及び
 雑訴決斷所
 護良親王の
 征夷大將軍
 奥羽及び關
 東の經營

後醍醐天皇の還幸 六波羅陥りて後、間もなく後醍醐天皇は伯耆の行宮を出でて、都に向ひたまふ。楠木正成兵庫に奉迎し、勅によりて還幸の先驅を承る。また鎌倉の捷報至りしかば、上下歡呼のうち、天皇はめでたく京都に還りたまへり。

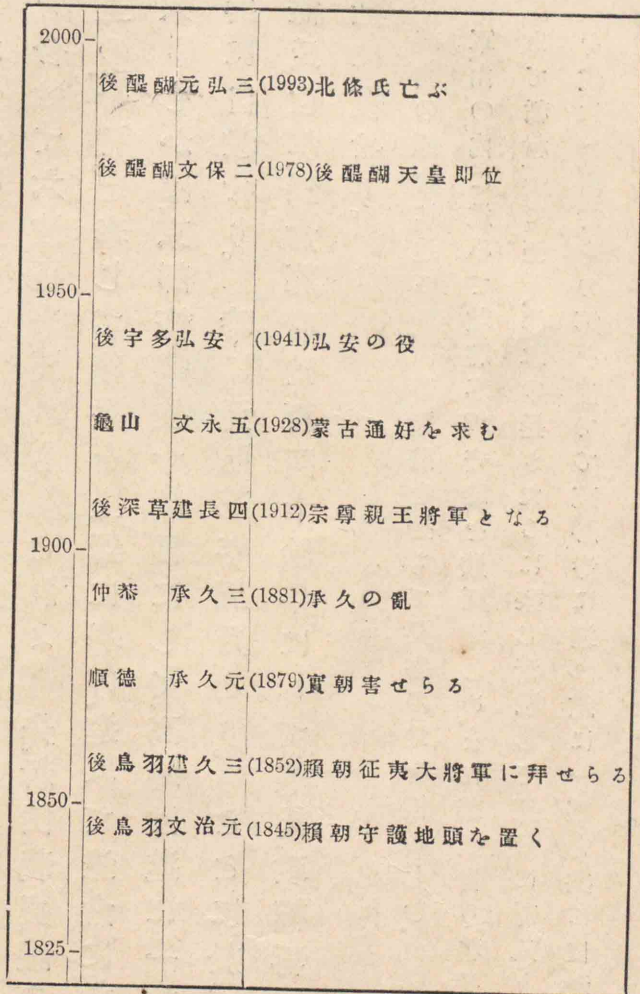
一統の政治 天皇乃ち記録所を復して、萬機を親らし給ひ、雑訴決斷所を設け、所領に關する訴訟を決せしめられき。また、護良親王を征夷大將軍とし、次いで、尊氏の弟

後醍醐天皇

直義をして、皇子成良親王を奉じて關東を治めしめ、北畠顯家をして、皇子義良親王を奉じて奥羽を鎮せしめ、足利・新田・楠木・名和及びその他の公卿將

北畠顯家筆

第八章 建武中興 足利尊氏の反



鎌倉幕政時代の年表

論功行賞

朝臣政務に
馴れず
公武不一致
恩賞不公平
財政窮乏

足利氏の家
系

尊氏の大望

士各功に従ひて賞したまひき。かくて天下一統して、政
權再び朝廷に歸れり。これを建武の中興といふ。

中興政治の失敗 さて、王政は復古したれど、朝臣は政
務に馴れず、心徒らに驕りて、武人を軽んじ、内奏切りに行
はれて、恩賞は公平を失ひ、更に内裏造營の費用さへ諸國
に課したまひしかば、天下漸く新政を喜ばず、密に武家の
政治を慕ふに至れり。藤原藤房、これを憂へ、屢、諫め奉り
しも、用ひられざりしかば、遂に官を棄てて、世を遁れぬ。

尊氏の異志 足利氏は、新田氏と共に、源義家の子義國
の後にして、屢、北條氏の姻戚となり、頗る勢望ありき。尊
氏夙に幕府再興の大望を抱き、人々新政を悦ばざるに乗
じ、巧みに私恩を施して、武士の心を收めたり。護良親王、

護良親王の
幽閉
尊氏義貞の
反目

北條時行の
亂
(一九九五)

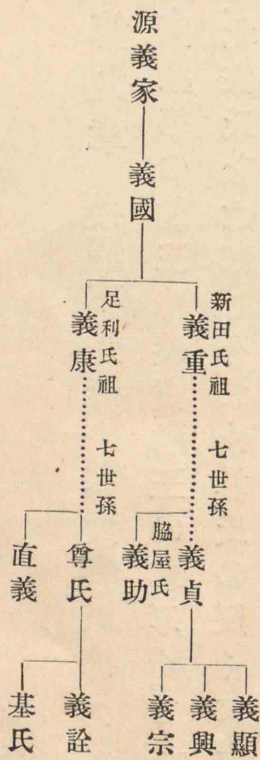
護良親王筆及び花押

護良親王

流されたまひ、義貞もまた尊氏に悪まれ、反目日に甚だし
かりき。

その異圖あるを察し、これを
除かんとしたまひしに、反り
て尊氏の讒にあひて、鎌倉に

足利
新田
両氏
系圖



尊氏の反 建武二年、北條高時の子時行、信濃に起り、進
みて鎌倉を攻む。直義敗れ、遂に護良親王を弑し奉りて、
西走せり。尊氏これに乗じ、勅許を待たず、東下して時行

尊氏の反

を破り、遂に鎌倉に據りて反し、自ら征夷將軍と稱し、義貞を除くを名として、兵を集む。諸國の武士これに應じ、その勢頗る盛んとなれり。

第九章 楠木正成・新田義貞等の勤王

義貞の東征
軍失敗
北畠顯家の
來援

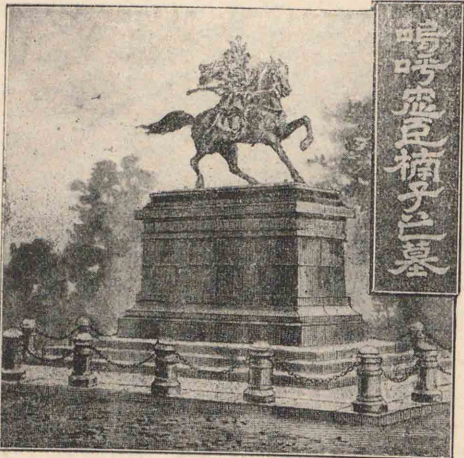
義貞・顯家等の勤王 義貞勤王の志厚く、さきに、鎌倉を攻めて、北條氏を亡ぼし、今また、尊氏の反くに及び、詔を奉じて、これが討手に向ひしが、足柄箱根の戦に利を失ひて退きぬ。尊氏直義勝に乗じて、都に攻め上り、天皇は叡山に幸したまひき。ほどなく北畠顯家義良親王を奉じ、陸奥より大軍を率ゐて西上し、官軍の勢また振ひ、義貞長年等の勇戦、正成の謀略よくその功を奏し、遂に尊氏の軍を

尊氏の西奔
多多良濱の
戦

破れり。尊氏九州に走り、西國の武士を従へ、その勢また盛なり。菊池武時の子武敏、これと筑前の多多良濱に戦

尊氏の東上
(一九九六)

正成の遺訓



楠木正成の銅像及び湊川の碑の面題

鳴鶴堂植子之墓

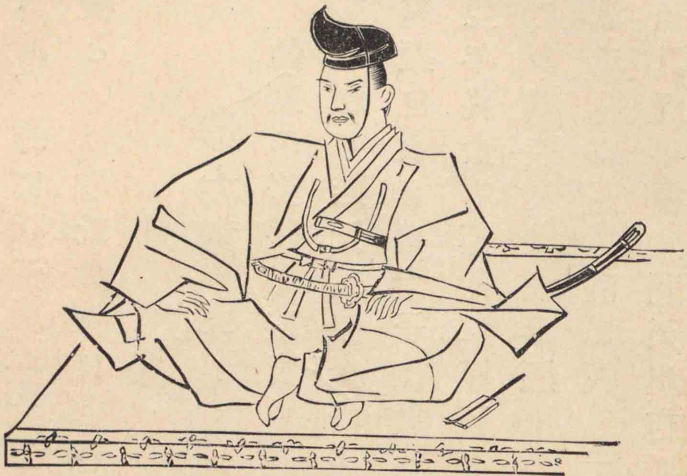
ひしも利なかりき。

正成長年の戦死 延元元

年五月、尊氏兄弟は水陸の大軍を率ゐて西國より東上せり。義貞兵庫に陣してこれを防がんとす。朝廷、更に、正成に命じて、義貞を助けしめたまへり。正成櫻井驛に至り、長子正行に遺訓し、我死して、世は尊氏の世になりぬとも、敵に降参して、父が忠義を汚すべからず。一族郎黨一

北陸神社
 (新田義貞)
 福井市足羽公園
 の中に有り

長年の戦死



新田義貞の像(東京皇宮博物館蔵の模写)

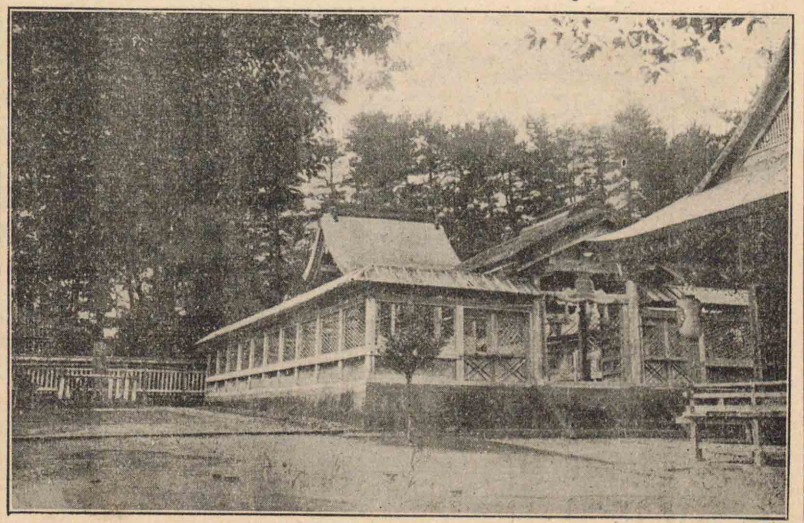
氏の請を許して、京都に還御ありしに、尊氏天皇を幽し奉

り官軍屢利を失ひ、多年王事に勤勞せる長年等の諸將、相つぎて戦没せり。

吉野遷幸 かくて、尊氏は光嚴院の御弟光明院を擁立し、使を叡山に遣はして天皇に還幸を請ひたてまつれり。後醍醐天皇乃ち義貞に命じて、皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて、北陸を經略せしめ、御親らは、かりに尊

正成の戦死
 義貞の敗北

人なりとも生き残りてあらんには、金剛山の城に立て籠りて、君の御世になし奉れ、とて故郷へ返しけり。正成兵庫に至り、寡兵を以て直義が大軍に當り奮戦せしも、衆寡敵せず、遂に弟正季等と共に湊川に戦死し、義貞も遂に敗れて京師に還りしかば、天皇また叡山に幸したまひ、尊氏進みて京都に入れり。これよ



名和神社

延元元年
(千九百零六年)
吉野遷幸

れり。天皇乃ち神器を奉じて、潛かに吉野に遷幸したまひぬ。時に延元元年十二月なり。世に吉野の朝廷を南朝といひ、尊氏の擅に京都に立てたるを北朝といへり。

第十章 吉野の朝廷

勤王の諸將 義貞の越前に赴くや、北陸の官軍一時振ひけれど、延元二年金崎城陥りて、尊良親王及び義貞の子義顯自殺し、皇太子は執へられて、後に弑せられたまひぬ。翌年義貞も藤島に戦死して、北國の官軍衰へたり。この頃、陸奥の北畠顯家は、義良親王を奉じて、西上せしが、尊氏の將高師直と戦ひて、和泉に敗死せり。延元四年、後醍醐天皇、吉野の行宮に崩じたまひ、皇太子義

金崎落城

義貞の戦死

顯家の敗北

恒良親王
(金殺せし)

顯家子顯信

北畠顯家
(雷山)

後村上天皇
御即位頃の
官軍



四條嘯神社及び正行筆及び花押

良親王

良親王立ちたまひぬ。これを後村上天皇とす。この時に當り、懷良親王は九州、宗良親王は東國の軍事を總べ、北畠親房は常陸に、楠木氏の一族は畿内に、菊池氏は肥後に、新田氏の一族は東國に在りて、勤王の諸軍稍振へり。

かへて思
じとから
へば梓
弓無き
數に入
る名を
ぞ留む
る(楠木
正行)

楠木正行の
戦死
二〇〇八

北畠親房の
病死



北畠親房の像(東京帝室博物館蔵)及び其の花押

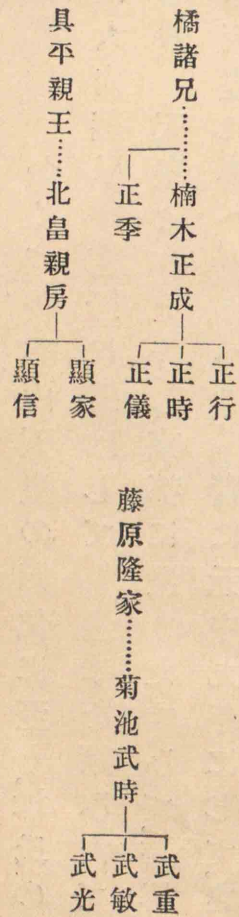
吉野朝廷の衰微 此の時
吉野の行宮を守りて重きを
なせるは楠木氏の一族なり。
正行その母に勵まされて、よ
く父の遺訓を守り、寡兵を以
て、屢賊の大軍を破れり。然
るに正平三年、高師直の大軍
と四條畷に戦ひ討死にせり。
つぎて、朝廷の柱石たりし北
畠親房も薨じぬ。親房學深
く、終始誠忠を以て王事に勤
め、また陣中に在りて神皇正

新田氏の衰
滅
菊池氏の勤
王

京都の形勢

統記^{トウキ}を著し、王政の變遷を説き、皇統の正閏を明かにせり。
 この後に、義貞の遺子義興及び義宗もまた東國に卒し、新
 田氏衰へぬ。ひとり九州の菊池武光等は一族心を合せ、
 懷良親王を奉じて、少貳大友等と戦ひ、少しも屈せざりき。
 されど官軍の勢は次第に振はずなりぬ。
 京都にては、尊氏は弟直義と和せずして相戦ひ、諸將また
 徒黨を立てて相争ひ、内訌絶えざりき。されば、官軍のた
 めに京都を攻め取られしことさへあるに至れり。

楠木 北畠 菊池 氏系 圖



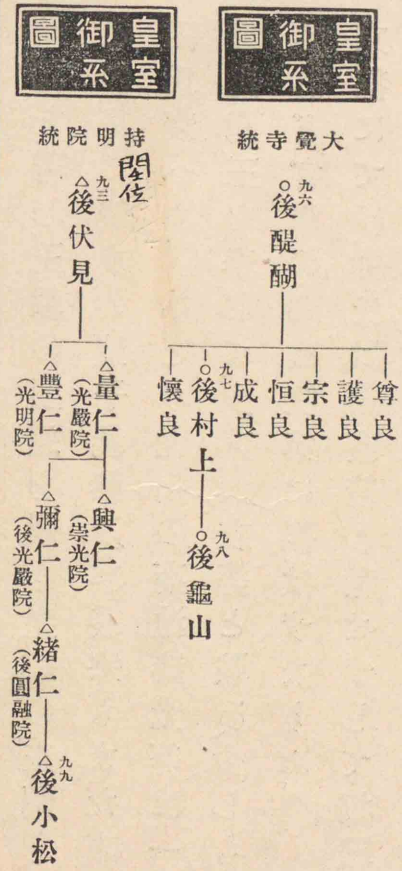
第十一章 室町幕府

| | | |
|------|--------|-------------------|
| 2050 | 後龜山元中九 | (2052)後龜山天皇の京都還幸 |
| 2040 | | |
| 2030 | | |
| 2020 | | |
| 2010 | 後村上正平九 | (2014)北畠親房薨す |
| 2000 | 後村上正平三 | (2008)楠木正行戦死す |
| 1990 | 後醍醐延元三 | (1998)顯家義貞戦死す |
| | 後醍醐延元元 | (1996)楠木正成戦死。吉野還幸 |
| | 後醍醐建武二 | (1995)足利尊氏反す |
| | 後醍醐元弘三 | (1993)後醍醐天皇還幸 |

吉野朝廷時代の年表

還幸の奏請
天皇の還幸
(三) 4033 1333年

京都還幸 かくて、後龜山天皇の御代に至り、尊氏の孫義満は、大内義弘を吉野に遣はして、御還幸を請ひたてまつらしむ。天皇これを許し、京都に還りたまひて、神器を後小松天皇に傳へたまへり。實に元中九年にして、さきに後醍醐天皇の吉野に遷幸したまひしより五十七年を経たり。



足利幕府の創設

義満の政治と室町幕府

一、足利代の驕慢なる
二、臣下の権力の強し
三、制する

鎌倉幕府との異同

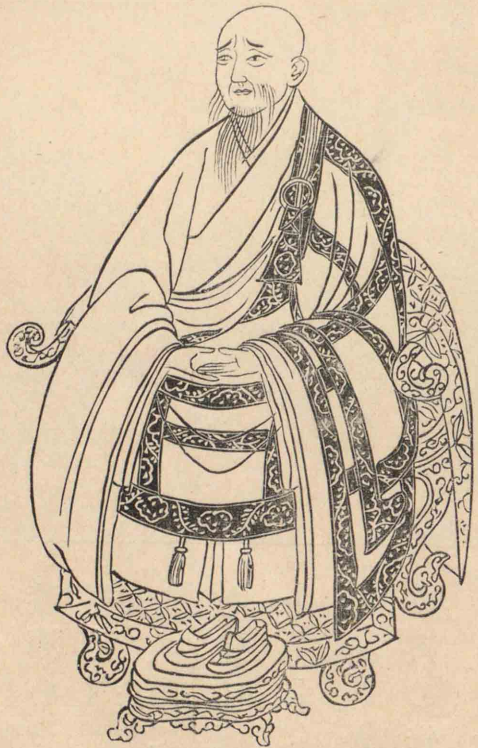
四職

室町幕府の設置 これよりさき尊氏は擅に征夷大將軍となりて、幕府を京師に開けり。されど尊氏及びその子義詮ヨシアキ二代の間は、内外紛亂の間にうち過ぎ、第三代義満に及びぬ。義満文武の材略あり、新邸花御所を室町に營みて、幕府の地と定め、名臣細川頼之を用ひて、嚴肅なる政策を執り、山名氏清の如き強臣を挫きてより、とかくに驕慢なりし將士も、漸くこれに服し、幕府の威令次第に行はれ、諸制度もまたこの時に整ひたり。

室町幕府の組織 室町幕府の組織は、概ね鎌倉幕府に倣ひたるものにて、政所・問註所・侍所の名はもとに同じ。侍所の所司は権力頗る高く、山名一色イチキ・京極キョウキョク・赤松の四氏の中より任ぜられ、これを四職といへり。執權をやめて管

三管領

地方の諸職



足利義満の像 本圖は東京皇宮大藏館蔵

斯波・細川・畠山 三家を三管領と稱せり。また鎌倉に關東管領をおき、奥羽九州には探題を設け、諸國に守護・地頭を配置して、各その地方の政務を掌らしめたり。

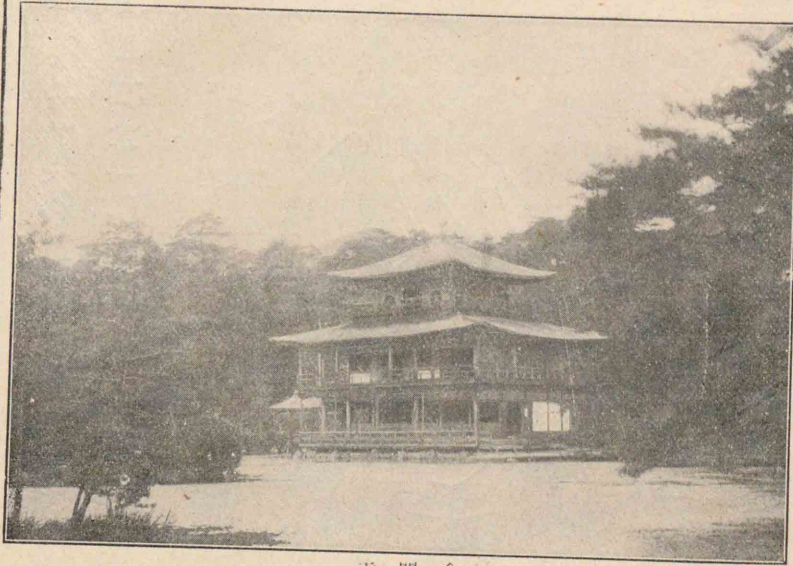
義満の驕借

義満は、後小松天皇の御代に、將軍職を子

太政大臣

義満の華奢
と金閣

義満の僭上



金閣寺

義持に譲り、つぎて、その身は太政大臣に拜せられぬ。義満、心やうやく驕りて、大堂巨刹を建立しまた、別荘を北山に設け、三層の金閣を建てて、華奢をきはめた。世にこれを公方ボウと稱せり。かくて、遂に、おのが出入の儀衛を上皇になぞらふるなど、その驕奢と僭上とは、道長・清盛にも過ぎたりき。

第十二章 關東管領

關東管領の變遷

基氏の威望
氏満滿兼の
驕傲

應永の亂
(二〇五九)

初、足利尊氏はその子基氏を關東管領とせり。基氏、よく東國の鎮撫に當り威望盛なりしが、子氏満、孫滿兼、つぐに及び、漸く驕傲となり、自ら關東公方と稱し、將軍の命に従はざるに至れり。

この頃、大内義弘は功によりて、周防・長門等六國の守護に任ぜられ、勢甚だ盛なりしが、密に不臣の志を懷き、後小松天皇の應永六年、滿兼と謀を通じ、兵を集めて、堺浦に據りぬ。義満これを征して、義弘を誅し、滿兼と和睦せり。これを應永の亂といふ。

次代稱光天皇の御代に、義持職を子義量ヨシヒカに譲りしが、義量

義教の剛毅

早く卒して嗣なかりしかば、義持の弟僧義圓、迎へられ、やがて將軍となり、名を義教と改む。義教性剛毅にして、大

持氏の不平



憲實諫むれども聽かず、却つてこれを殺さんとせり。義

足利義教の像 本圖は東京大藏院藏
尾張中島郡妙興寺藏
模寫の版

いに幕政を張り、強臣の跋扈を抑へんと圖れり。時に鎌倉にては、滿兼の子持氏、管領たりしが、自ら入りて、宗家を嗣がんとを望みけるに、義教の世となりければ、大いに憤りて、多くその命にさからひぬ。執事上杉

永享の亂
(二〇九九)

嘉吉の亂の
原因

赤松滿祐の
叛
(二一〇二)

教乃ち憲實を助けて、持氏を討ち滅ぼせり。時に後花園天皇の永享十一年なり。これを永享の亂といふ。基氏より四代約九十年にして、足利氏の鎌倉管領遂に亡びぬ。嘉吉の亂 義教は、既に鎌倉を滅ぼして、心漸く驕り、頻りに強族の勢を殺がんとせり。赤松則村の曾孫滿祐、かねてより義教を怨みけるに、また、その領地を奪はれんとするを聞き、嘉吉元年、義教をその邸に饗して、これを弑せり。是に於て管領細川持之、義教の子義勝を立てて家をつがしめ、山名持豊等は滿祐を播磨に討ちて、これを殺しき。これを嘉吉の亂といふ。ほどなく、義勝卒して、幼弟義政つぎて立ちぬ。

關東の分裂 鎌倉にては持氏亡びて後、上杉氏は關東

上杉憲忠
山内家

古河堀越の両方
あつて相争つ
(二十七年)

持朝
扇谷家(正正)

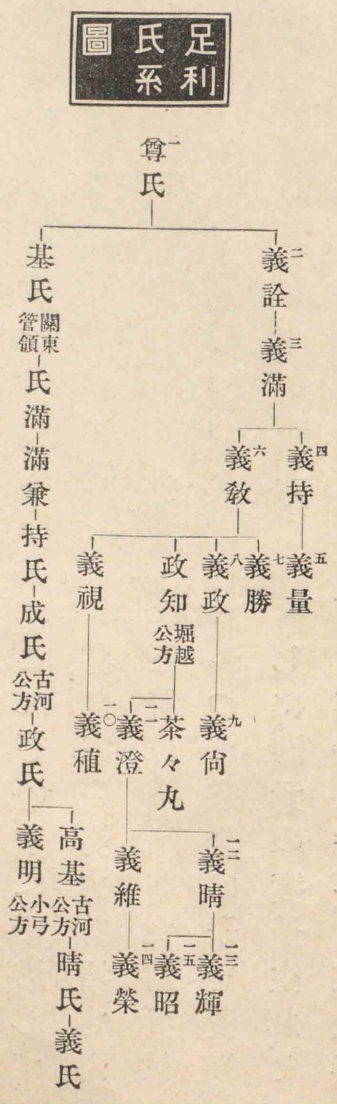
は松原
遠く海
近し富
士の高
根を軒
端にぞ
見る
(太田
道灌)

古河堀河
公方の對立
兩上杉氏
の
争亂
太田道灌

管領に任じ、政を行ひぬ。されど人心服せざりしかば、諸將、義政に請うて、持氏の遺子、成氏を鎌倉の主とせり。然るに、成氏、父の仇なりとて、上杉氏を怨み、執事上杉憲忠を殺し、遂に追はれて、下總の古河に奔りぬ。是に於て上杉氏は、義政の弟、政知を迎へて、伊豆の堀越に居らしめ、以て古河に對抗せり。又上杉氏も山内扇谷の兩家互に相争ひければ、關東益亂れ、全く統一を失ふに至れり。扇谷の賢臣太田持資が、江戸城を築きたる



はこの頃なりき。



第十三章 應仁の亂

大亂の諸原因 義勝義政年少にして、相つぎて將軍となるや、管領の威權甚だ盛んとなりぬ。義政は長じて後、政治を顧みずして、奢侈遊樂を事とせしかば、幕府の財政は困難を極め、民は重税に苦しみ、強臣は互に權勢を争

幼主と權臣
義政の弊政

畠山氏の家
督争
斯波家の家
督争

宗全と勝元
の争抗

ひ、幕政大いに亂れたり。

この時、畠山氏にては、持國の養子政長、實子義就と家督を



足利義政の像(原本は東京帝國大學藏室博覧會所藏) 寫

の養子を廢するに及びかねて、密に權勢を争へる宗全勝

争ひ、斯波氏にも、また兩
養子義敏、義廉の間に相
續の争起れり。細川勝
元及び山名宗全は互に
これ等の争に干涉して、
各自家の勢力を増さん
と計れり。また勝元は
かつて宗全の子を養ひ
しに、勝元の實子生れ、そ

將軍家の家
督争

兩黨の對抗

戰亂の破裂
(二一三七)

宗全勝元の
病死
(二一三三)

元は益、相敵視するに至りぬ。會、將軍義政も子なかりければ、弟義視を強ひて、養嗣とし、勝元をこれが執事に任じたり。然るに寛正六年義政の夫人富子義尙を生み、切りにこれを家督に立てんことを望み、密に義尙を宗全に託しぬ。宗全これを諾し、畠山義就、斯波義廉等を己が黨となし、勝元は義視を奉じ、畠山政長、斯波義敏等を引きて、援とし、以て宗全に當らんとせり。

十一年間の戰亂 後土御門天皇の應仁元年、義就、政長各、その兵を以て京都に戰ふや、宗全密に義就を援けて、政長を破るに及び、兩黨遂に破裂せり。勝元、宗全は各自黨の大兵を集め、幕府の東西に陣して相戰ひ、勝敗久しく決せず、文明五年、宗全、勝元、相つぎて卒し、義政も將軍職を義

なれる都や
知る夕雲
のあが
雀を落見
るも涙
つるる
はつる
飯彦
左衛門

戦亂の終結
(二一三七)

京都の荒廢

地方の分裂

尙に譲りたれども、兩黨の兵猶解けざりき。されど同九年に至りては、諸將もはじめて兵を收め、各その國に歸れり。これを應仁の亂といふ。

應仁の亂の影響 十一年間の大亂に、京都の社殿・寺堂・民屋多く兵火にかかり、累代の寶器・文書等大抵灰燼に歸し、都は荒れて、野原の如くなりはてたり。これより諸將は、幕府の命を奉ぜず、各その地に據りて相争ひ、遂に全國の騷亂となるに至れり。

第十五章 室町時代の佛教文物

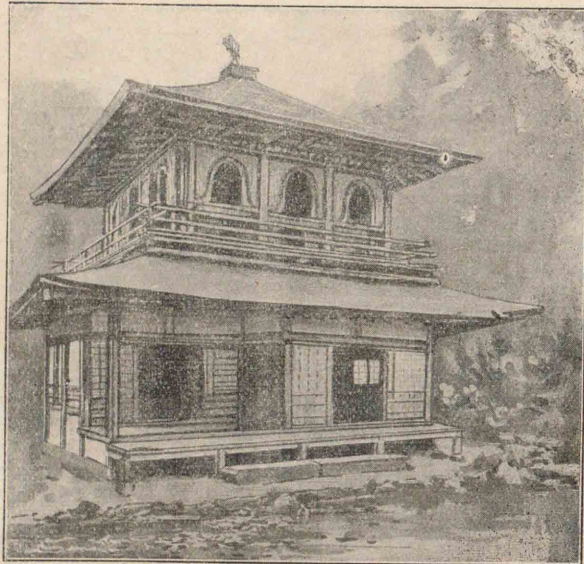
佛教 室町時代の佛教は、概ね鎌倉時代に似たり。民間には一向宗浄土真宗、法華宗盛に行はれ、禪宗は主として、上

藝術發達の
原因

流社會に歸依せられたり。尊氏は特に禪宗を喜び、僧疎石夢窓國師を尊み、京都に天龍寺を建て、義滿は相國寺を創めたり。かくて、鎌倉に行はれし禪宗京都に廣まるに至れり。

美術工藝の進歩

足利將軍は代々文藝を好み、藝術の發達を助けたり。中にも義政は奢侈風流を極め、東山に別莊を營み、その内に銀閣を建て、名畫・古器を集め、茶の湯の遊



銀閣寺

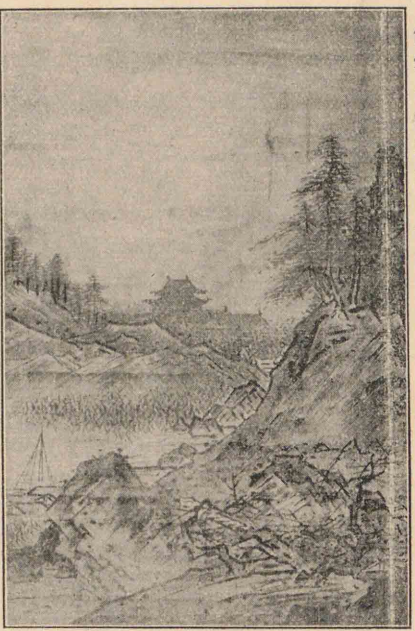
繪畫

びに耽りぬ。されば禪宗の興隆と相待ちて、美術工藝の
進歩は著しく、所謂東山時代の大發達を見るに至れり。
繪畫は鎌倉時代より宋・元の畫法傳はり、雅趣に當める墨



雪舟の像は東京原本は周防大學常盤寺の藏所
雪舟の像は東京原本は周防大學常盤寺の藏所
義政の頃、僧雪舟出で、
山水畫に長じ、古今獨
歩の稱あり。狩野元
信古法は和漢畫法の
粹を融合して、狩野畫
の一派を開き、その妻
の父なる土佐光信は、
大和繪を中興し、古今

僧雪舟筆夏景山水圖(京都曼珠院藏)



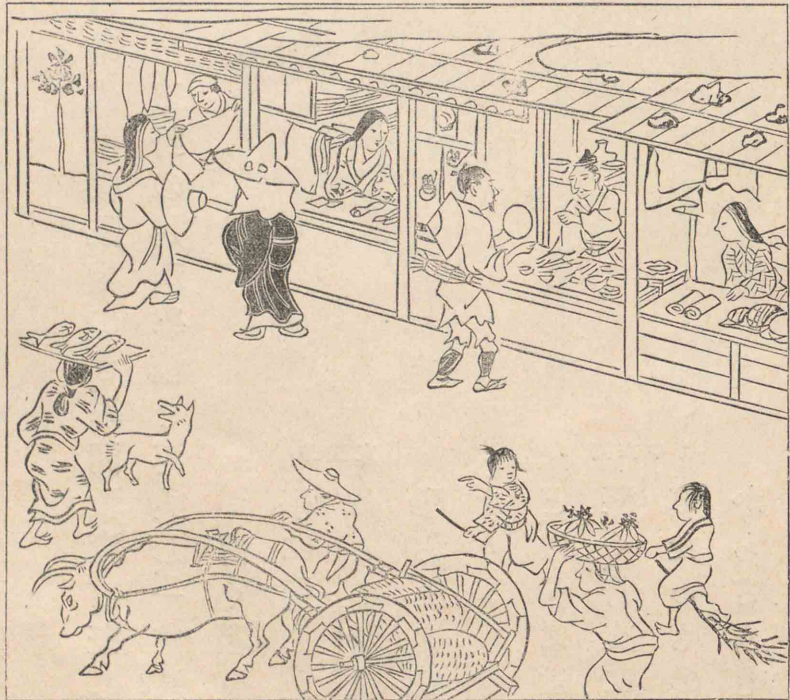
狩野元信筆花鳥圖



陶器漆器

金屬彫刻

の妙手と呼ばれ
たり。茶の湯の
流行と共に、茶器
は世人に愛玩せ
られ、陶器漆器の
製法も大いに進
み、義政の頃、蒔繪
は殊に精巧を極
めたり。金屬彫
刻も頗る發達し、
義政に仕へたる
後藤祐乘イロノコは、その



室町時代京都街市圖

學問の衰微
足利學校
一條兼良

僧侶と學問

名家たり。

學問教育 室町時代は、戰亂相つき、學問教育は概して盛ならず、上杉憲實が下野の足利學校を再興し、一條兼良



狩裝束



肩衣半袴

が博く和漢の學に通じたるは、この時代に珍らしきほどなりき。されど、僧侶には學深く、詩文に長じたるもの少からざりき。

和歌謠曲連歌

和歌は稍、盛に行はれ、太田道灌の如きは、その道にすぐれたり。特殊の文學なる謠曲も、この頃より始まり、連歌も大いに流行せり。

風俗 武士の衣服は、大凡鎌倉時代に同じく、初めは、素襖袴を著けたりしが、後には、多く肩衣半袴を用ひたり。上下はこれより起れり。家屋には、立關床、間等を設け、所謂書院造となりぬ。能樂は義滿の頃より廣まり、義政以後、點茶、插花、聞香等の遊藝も盛に行はれたり。

第十六章 群雄割據 一

群雄蜂起

戰國時代 應仁の亂の後、およそ百年の間は、幕府の勢威益衰へて、その命令は全く行はれず、諸將各、その領地に

戰國時代

割據して、攻略を事とし、天下麻の如く亂れたり。これを戰國時代といふ。實に後土御門、後柏原、後奈良、正親町四天皇の御代に互れり。

北條早雲の伊豆攻略 (二一五)

北條氏の興起 關東には堀越、古河の兩公方及び兩上杉等は益衰へしが、後土御門天皇の延徳三年堀越公方政知病歿せり。この頃駿河の今川氏の客將に、伊勢長氏といふものありしが兵を起して、伊豆を攻略し、堀越御所を滅ぼせり。長氏豪邁にして才略あり。兩上杉の不和なるに乗じて、切りにその地を侵略し、相模の小田原に據りて勢漸く振へり。長氏は姓を北條と改め、入道して早雲といふ。

氏綱の人物及び戦勝

早雲の子氏綱勇武にして才略あり。古河御所の分れな

氏康の武略

川越の役 (二一〇六)



北條早雲の像 (東京帝國大學相模版模) 藏所 (雲寺) 寫模

る小弓公方明義と里見氏の兵を鴻臺に破りて、兩總を定む。その子氏康深沈にしてまた父祖に劣らざる名將なり。後奈良天皇の天文十五年に及び、兩上杉氏は古河公方晴氏と連合し、北條氏を伐たんとして、川越城を攻めしが、氏康これを破りて扇谷家を滅ぼし、後には最後の管領上杉憲政内山の平井城野上を陥れ、つぎて古河御所を攻め落しぬ。此に於て、關東地方の大半は北條氏の

山内家と長尾氏との關係
謙信の威勢

手に歸せり。

謙信・信玄の攻戰 平井城の陥るや、上杉憲政は、越後に奔りて舊臣長尾景虎カゲトウと改む後に輝虎と改むに依り、その氏と管領の職と



上杉謙信の像は東京帝國大學藏版の寫
本圖は東京帝國大學藏版の寫

を讓れり。景虎膽勇ありて兵を用ふること神の如し。髪を削りて謙信と號せり。次第に四隣を攻め從へて、威を北陸に振ひ、また屢兵を關東に出して、氏康と争へり。
この時甲斐に武田晴信テモトあり。信玄また智勇の名

信玄の信濃經略

將にして、よく兵を用ひ、しきりに信濃の諸族を攻めければ、村上義清等、越後に奔りて、謙信に援を求めたり。謙信

川中島の戰

これよりまた信玄を敵として、屢、信濃の川中島に戰へり。

信玄・謙信の戰法

この兩將は兵士の訓練に力を用ひ、陣法善く整ひて當時これに及ぶものなかりき。

信玄・謙信の領地

後に信玄は駿河の今川氏を亡ぼしてその地を合せ、謙信は加賀より莊

信玄・謙信・氏康の對立

内に互る北國地方を從へ、東國に於て北條氏と鼎立し、ま



武田信玄の像は東京帝國大學藏版の寫
本圖は東京帝國大學藏版の寫

遂に信玄のために滅ぼされたり。

第十六章 群雄割據 二

大内氏の盛衰

毛利氏の興起 初め大内義興は、安藝・周防・豊前等を領



毛利元就の義舉 (二二一五)

有し、石見の銀山を興し、また、明國と貿易して、富強天下に冠たりき。然るにその子義隆漸く華奢文弱に流れて、政治を顧みず、遂に家臣陶晴賢に弑せられぬ。義隆の部將毛利元就、義兵を舉

毛利元就の像は、東京帝國大學出版、雲鰐寺藏の模寫

元就卒後
毛利氏

元就卒後の
毛利氏

九州の諸族

四國の長曾
我部氏

將軍義滿及
び義種

げ、後奈良天皇の弘治元年晴賢を嚴島に誅しぬ。これより大内氏の舊領は毛利氏に歸し、遂に山陰道の尼子氏をも滅ぼし、中國の大部を領するに至れり。元就卒して、嫡孫輝元その後を嗣ぎしが、叔父吉川元春、小早川隆景よくこれを輔け、毛利氏の勢威衰へざりき。

九州及び四國の諸族 九州にては、豊後の大友氏、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏、漸く勢を得て鼎立の勢を成せり。四國はもと細川氏の一族が、その大部分を分領したりしが、その亂るるに及び、長曾我部元親、土佐に起りて、隣國を攻略し、四國に雄たりき。

足利氏の末路 さて、京都に於ては、將軍義尚文武の業を修め、幕府の威權を回復せんと志ししも、不幸にして早

細川政元の
専權

細川家の家
督争
大内義國の
入京

細川高國の
専權

三好氏の専
横

松永氏の専
横

く薨じ、義視の子義植ヨシウヱ嗣ぎぬ。時に細川勝元の子政元、威權を専らにせり。義植、これと合はずして、周防に奔り、大内義興に依りぬ。政元は義澄ヨシキハ堀河公方の子を迎へて將軍となし、權勢を振ひしが、家督の争起り、政元は家臣に殺され、細川家も大いに亂れぬ。大内義興、この變を聞き、義植を奉じて京に入り、再びこれを將軍職に就かしめぬ。然るに義興、歸國の後、細川高國、權を専らにし、遂に義植を逐ひ、義澄の子義晴を迎へて將軍となせり。既にして、細川氏の家臣三好氏、次第に權勢を振ひ、義晴の子義輝將軍となるに及び、三好長慶、幕府の全權を握れり。長慶の死後は、その家臣松永久秀、また事を專にし、遂に將軍義輝を弑し、つぎて義澄の孫義榮を立てたり。かくて

近畿の諸族

皇室衰微の
狀況

後奈良天皇
御代の御有
様

政權次第に下に移り、幕威全く衰へ、近畿にも諸將の争亂絶えず、美濃の齋藤氏、近江の淺井氏、越前の朝倉氏等、漸く顯はれぬ。

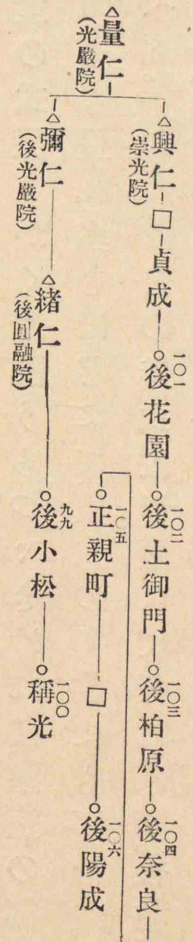
皇室の式微

かく騷亂うちつゞきければ、皇室の御衰微は申すも畏れ多きほどにて、朝夕の御物にも事を缺きたまへり。されば公の儀式は皆廢れて行はれず、後柏原後奈良正親町三天皇の御即位の大禮も、本願寺の僧光兼大内義隆、毛利元就等の獻金によりて、辛うじて、行はせたまひき。後奈良天皇は、かしこくも、御自筆の色紙短冊を賜ひ、その奉謝料を納めて御用度を補はせたまひしほどにて、内裏の御垣くづれて、燈火、遠くもれ、紫宸殿の前には、市人茶店を開きて、客を待つものありきとぞ。誠に痛ま

後奈良天皇
の御高德

しき極みと謂ふべし。かくも皇室は御疲弊甚だしき時
なれど、民を愛撫したまふ御仁慈の厚きこと、終始かはら
せたまふことはなかりき。後奈良天皇は、饑饉及び疫病
のために民の苦めるを、御不徳のいたすところなりとて
痛く親ら歎かせたまひ、かつ、民の病苦を救はんため、僧を
召して祈らせたまひき。

皇室
御系



第十七章

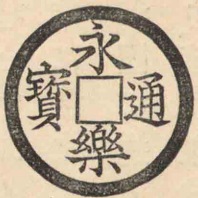
明との交通 高麗と朝鮮 歐羅巴人の來航

元寇後の支
那との交通

明との交通

吉野朝廷時
代と倭寇

倭寇の強勢



明との交通 弘安の役後、ほどなく、我が商人、僧徒の私
に支那に交通するものありしが、尊氏天龍寺を建つるや
不足の什器と寺觀造營の資とを得んため、毎年船二艘を
元に遣せり。後村上天皇正平二十三年、元亡びて明これ
に代れり。義満よりて使を明に遣はして、好
を修め、貿易を營みしが、遂に明主より日本國
王の稱號を受けて、自ら臣と稱するの不法を
行ふに至れり。將軍義教及び義政等も、また
明と交通して、錢貨を求め、名畫珍器を輸入したり。

倭寇 これより先、吉野朝廷時代の頃より、西南諸國浮
浪の徒相率ゐて、高麗及び元の沿海を犯したり。明朝に
及び、邦人の攻掠は依然として衰へず。應仁の亂後、國內

永享
三〇六年
徳山松平
義教王
義政王
(義海)

天保六年
(三十八年)
日本史教科書 下巻

| | | | |
|------|-------------------|----------------------|---|
| 2230 | 正親町 後奈良 | 永祿 3 弘治 元 | (2220)桶狭間の戦 (2215)嚴島の戦 |
| 2210 | 後奈良 後奈良 | 天文 12 天文 7 | (2203)ポルトガル人鐵砲を傳ふ (2198)鴻臺の役 |
| 2190 | | | |
| 2170 | | | |
| 2150 | 後土御門 | 延徳 3 | (2151)伊勢長氏伊豆を取る |
| 2130 | 後土御門 後花園 | 應仁 元 康正 元 | (2127)應仁の亂始る (2115)足利成氏古河に走る |
| 2110 | 後花園 後花園 | 嘉吉 元 永享 11 | (2101)嘉吉の亂 (2099)永享の亂 |
| 2090 | | | |
| 2070 | 後小松 後小松 後龜山 | 應永 8 應永 6 應永 9 | (2061)義満明國と通ず (2059)應永の亂 (2052)後小松天皇の京都遷幸 李成桂の建國 |
| 2050 | | | |

室町時代年表

び傳はるや、直ちに各地に傳播し、我が武器・戰術・築城法等に大なる變化を與へたり。この後イスパニア人もまた來航し、九州に於て絶えず貿易を行へり。

大いに亂るるに乗じ、流民の明に寇するもの益、多くなりぬ。明人これを倭寇と稱し、恐るること甚だしかりき。

高麗と朝鮮 高麗は元と共に我が國に敗られてより、國力漸く疲弊し、また倭寇の侵害に苦しみぬ。時に李成桂といふものあり、倭寇を撃ちて人望を得、我が元中九年遂に自立して王となり、國號を朝鮮と改め、この年、使を我が國に送りて、修交を請へり。この後、彼我の交易また起り、義政以後は、對馬の宗氏これを管掌したり。

歐羅巴人の來航 この頃、歐羅巴にても、ポルトガル・イスパニアの二國は、しきりに殖民・貿易をつとめ、盛に東洋諸國に來航せり。後奈良天皇の天文十二年、ポルトガル人、始めて我が種子島に來り、鐵砲を傳へぬ。この器一た

高麗の衰亡
李成桂の建國
朝鮮との交通
歐洲人の東洋來航
鐵砲の來傳

三五二年
南北二
年

織田氏

第十八章 織田信長
織田氏の勃興

信秀の勤王

信長勅を拜す



織田信長の肖像は東京帝國大學藏
織田信長は東京帝國大學藏
織田信長は東京帝國大學藏
織田信長は東京帝國大學藏

氏の家老なりしが、信長の父信秀の時、尾張を取りて自立せり。信秀勤王の志篤く、後奈良天皇の御代に皇居修理の料を奉りしことありき。
信長の入京 信長の今川義元を桶狭間に破りて武名遠近に聞ゆるや、正親町天皇は、永祿十年に御使を遣はし、

西上の計畫

義昭の依頼

信長の入京
(二二二八)

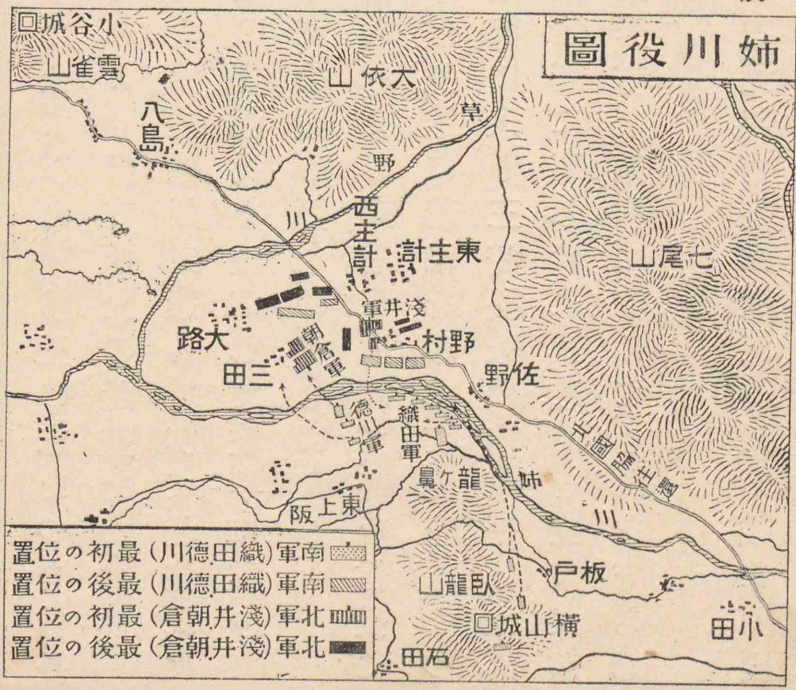
姉川の役
(二二三〇)

朝廷の興復を計らしめたまひぬ。勤王の志あつき信長は謹みて詔を拜し、それより日夜西上の計畫をなせり。信長は、先に參河岡崎の城主、徳川家康と結びて、北條氏に備へけるが、遂に美濃の齋藤氏を滅ぼして、岐阜に移り、また信玄とも和を結びて、後顧の憂をのぞきぬ。
この時、將軍義輝弑せられ、その弟義昭逃れて、身を信長に寄せぬ。永祿十一年、信長遂に義昭を奉じて西上し、まづ近江を定め、進みて京都に入り、三好・松永の黨を平げたり。これより先、將軍義榮は既に卒しければ、義昭を立てて將軍たらしめ、且つ羽柴秀吉を京都に留めて、これを守らしめたり。

諸方面の経略 元龜元年、信長は近江姉川の戦に、同國

足利氏の滅亡
(二二三三)

の浅井長政及び越前の朝倉義景の軍を破り、つぎて二氏を助けたる叡山の僧徒を焼き討ちして、その勢を挫きぬ。然るに將軍義昭は、信長の威名を嫉み、これを除かんと企てしかば、信長急に都に入り、義昭を攻めたり。天正元年、義昭遂に出奔



氏康信玄謙信の卒去

中國征略の著手

武田氏の滅亡

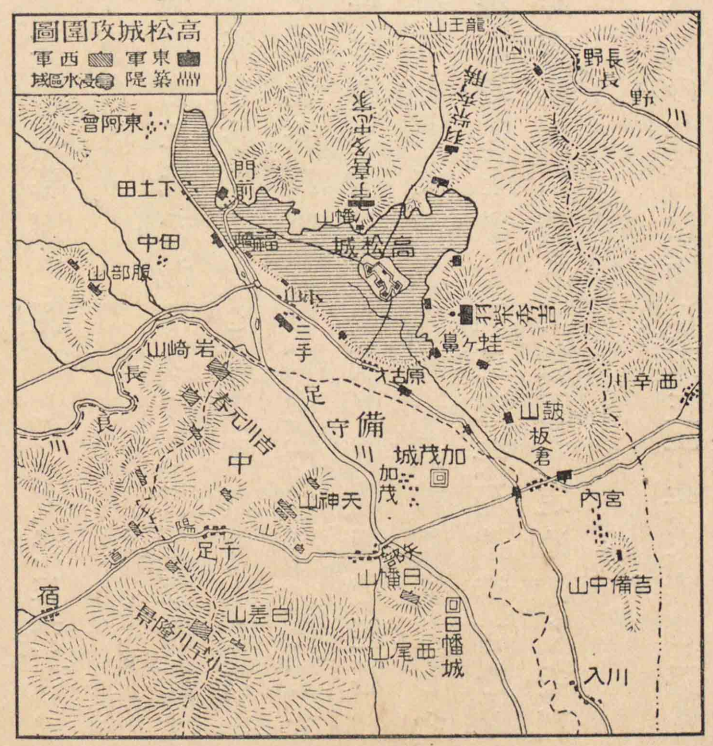
し、足利氏亡びぬ。尊氏が幕府を開きしより、是に至るまで、十五代二百三十五年なり。この年、信長は浅井朝倉二氏を滅ぼし、つぎて近江の安土に、壯大なる居城を築き、岐阜よりこれに移れり。これより先、信長の強敵たる北條氏康、武田信玄既に卒し、ほどなく上杉謙信も亦卒せり。信長は、以前より北國を經略せしめたる、柴田勝家等をして謙信の養子景勝に當らしむ。信長また中國を經略せんと欲し、天正五年、羽柴秀吉をして西征せしむ。秀吉連りに勝ちて數國を定め、漸く毛利氏に迫りぬ。さて信長は、親ら東方の征討に向ひ、天正十年、家康と兵を合せ、信玄の嗣子勝頼を攻めて、これを滅ぼし、瀧川一益を

上野に置きて、東國を鎮めしめたり。

本能寺の變

この時秀吉は、備中の高松城を圍みて、軍威甚だ盛なりしが、毛利輝元大兵を率ゐ來りて、高松城を援けしかば、秀吉もまた急を告げて、信長に後援を請ひぬ。信長乃ち

高松城水攻



明智光秀の叛

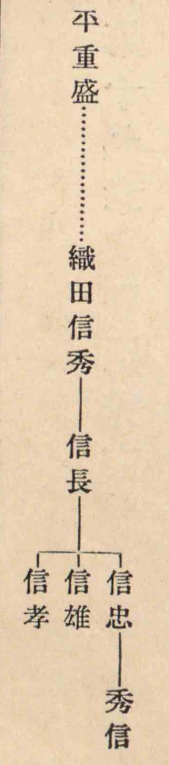
自ら往きて秀吉を援けんと欲し、京師に入れり。然るに、部將明智光秀、俄に叛き、信長を本能寺に襲ひて、これを弑し、信長の長子信忠また害にあへり。これ天正十年六月にして、信長四十九歳の時なりき。

信長の人物
天下治平の基

信長の人物、功業 信長英明果決にして能く人を用ひ、二十餘國を征定して天下治平の基を開けり。その性急に過ぎて、光秀の怨を受け、未だ一統の功を果さずして斃れたれども、入京後は皇居を修治し、供御料を獻じ、朝儀を興し、伊勢神宮御改造を企てんとするなど、勤王の功業實に偉なるものありき。

信長の勤王

織田氏系



第十九章 豊臣秀吉

秀吉の出身

山崎の戦

賤嶽の戦

秀吉の國內一統 秀吉は卑賤より身を起ししが、才略非凡なるを以て、大いに信長の信任を受け、遂に擧げられて西征の大任に當れり。秀吉毛利氏と對陣中京都の變を聞くや、直ちに毛利氏と和して、急に軍をかへし、光秀を山崎に破りて、遂にこれを滅ぼしたり。かくて秀吉は、諸將と議して、信忠の子秀信を迎へ立て、その叔父信雄をしてこれを輔けしめぬ。信長の第三子信孝心平かならず。また織田氏の老將柴田勝家、瀧川一益等は秀吉の威名盛なるを忌み、遂に相結びてこれを除かんとせり。天正十一年、秀吉は大いに勝家の軍を近江の賤岳に破り、進みて

小牧の役

四國の平定

秀吉の關白
太政大臣

北國の平定

越前に入り、遂に勝家を滅ぼせり。つぎて、信孝は自殺し、一益も亦降りぬ。これより秀吉の威勢益盛にして、織田氏の舊業は殆ど全く秀吉の手に歸しぬ。信雄これを忌み、援を徳川家康に求めて、秀吉を除かんと欲せり。家康、舊好を重んじて、これに應じ、天正十二年、小牧山に陣し、秀吉の別軍を長久手に破れり。秀吉容易く勝ち難きを知り、遂に信雄と和を講じぬ。

翌年、秀吉は長曾我部元親を降して、四國を平げ、また關白に任ぜられ、つぎて太政大臣に進み、豊臣の氏を賜はりぬ。秀吉はまた佐佐成政を降し、やがて北陸地方悉く平げり。秀吉は、さきに家康と戦ひてより、その器量すぐれたるを

和家康との媾

知り、心をつくして和睦をはかりしが、天正十四年媾和全

くなりて、海内一統の大勢
定りぬ。

この頃九州にては島津氏
獨り威を振へり。天正十
五年秀吉、島津義久を征し
て、これを降し、九州を定め
たり。天正十八年に至り、
秀吉遂に大軍を發して、小
田原城を攻め落し、全く北
條氏を滅ぼせり。この時、
風を望みて歸服し、應仁の



豐臣秀吉の像は東京皇國大學藏版の定華院所藏

九州征服

小田原征伐

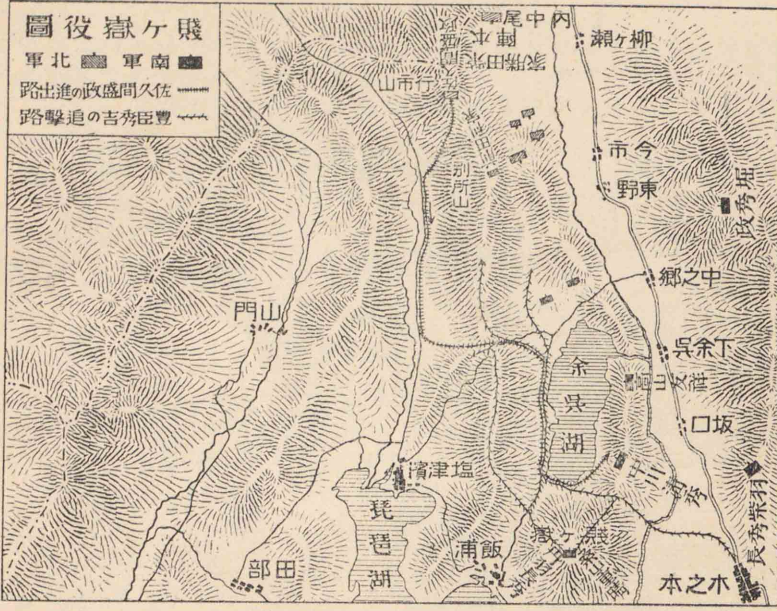
伊達政宗を始め、東北の諸侯も、風を望みて歸服し、應仁の



(畫古の風屏の藏所家尊伯浦松は圖原)圖の港開浦堺
(しへす意注に等品圖外るせ列陳に店び及師教宣教トメリキの姿師法)

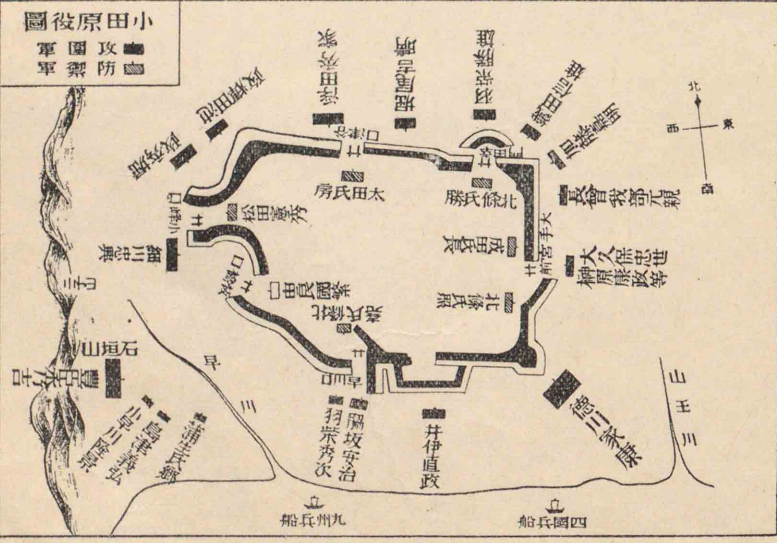
圖役嶽ヶ巖

軍北 軍南
 路出進の政盛間久佐
 路撃追の吉秀臣豊

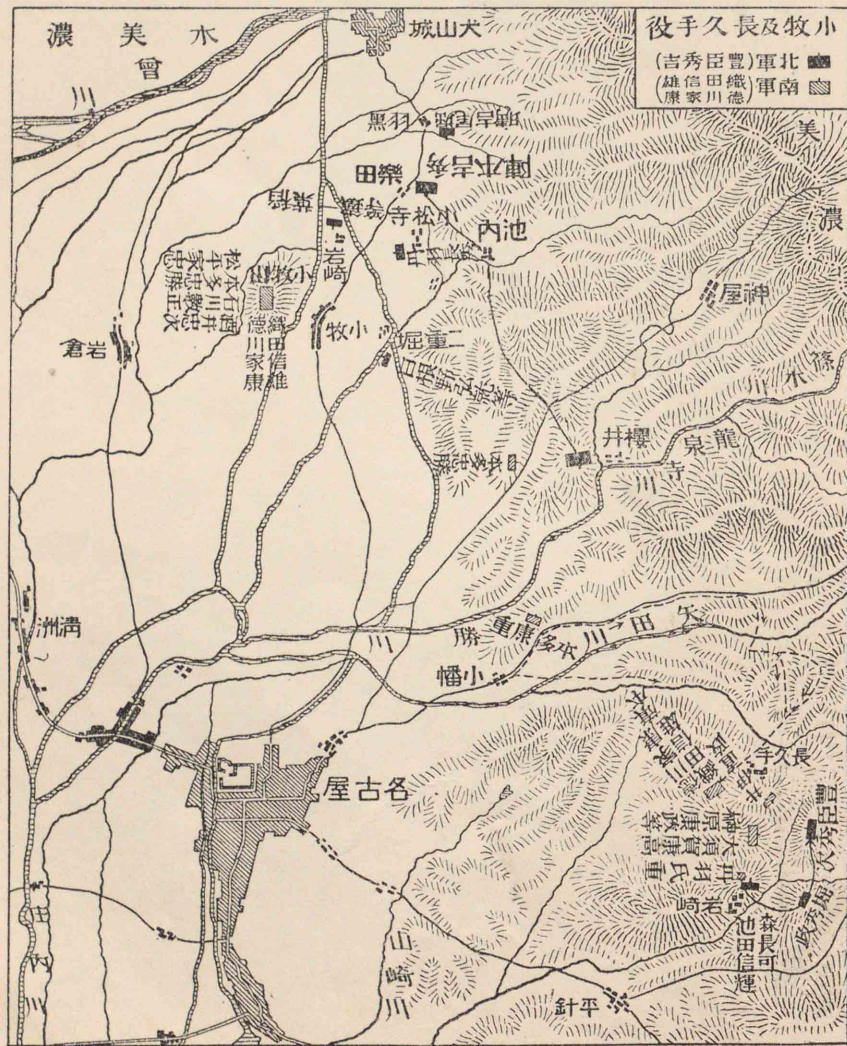


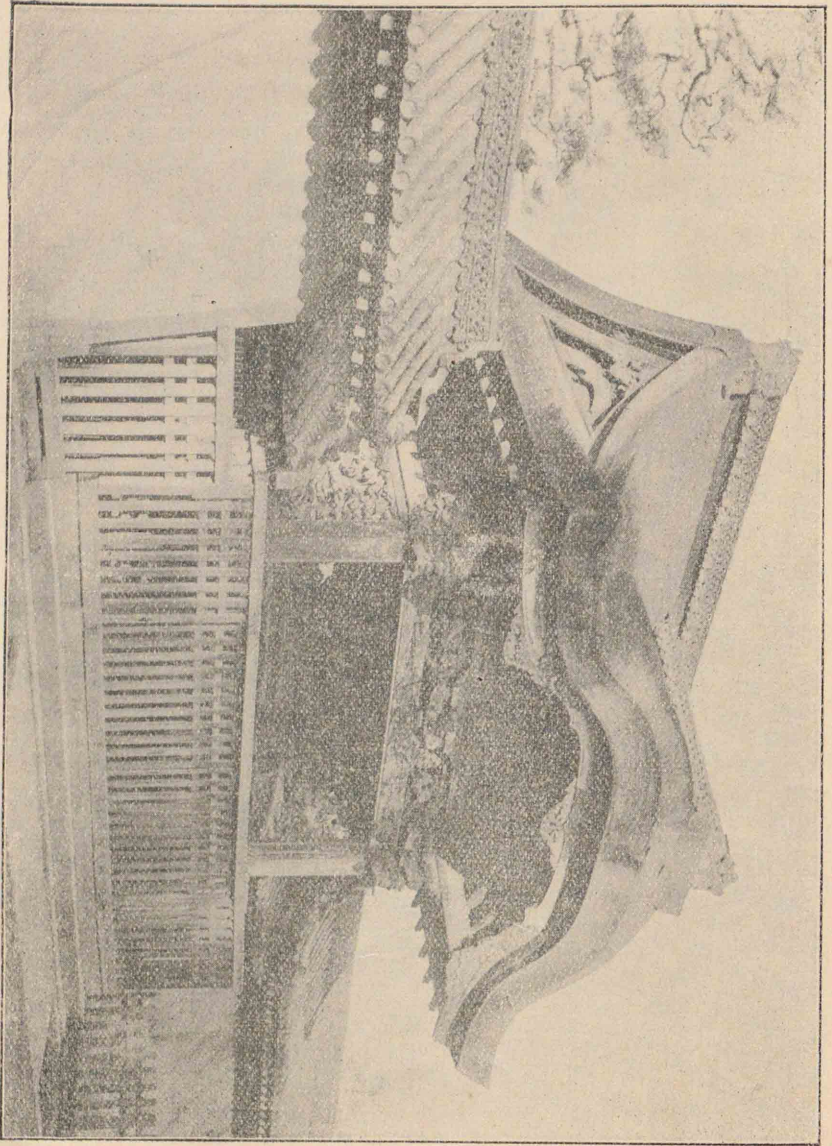
圖役原田小

軍圍攻 軍禦防



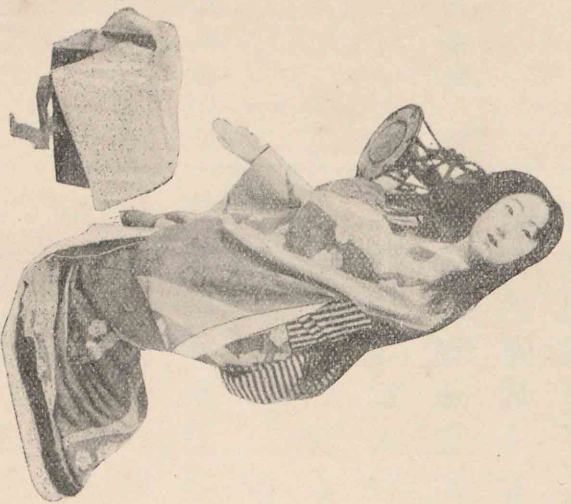
手久長び及陣對のと軍本の氏兩田織川徳と軍本の吉秀臣豊は圖本
 史戰本日の一部本謀參に上圖地の代現てしに圖略るすとんさ示を役
 りなものもるたし入記を柄事の昔往てし照參を圖附役牧小



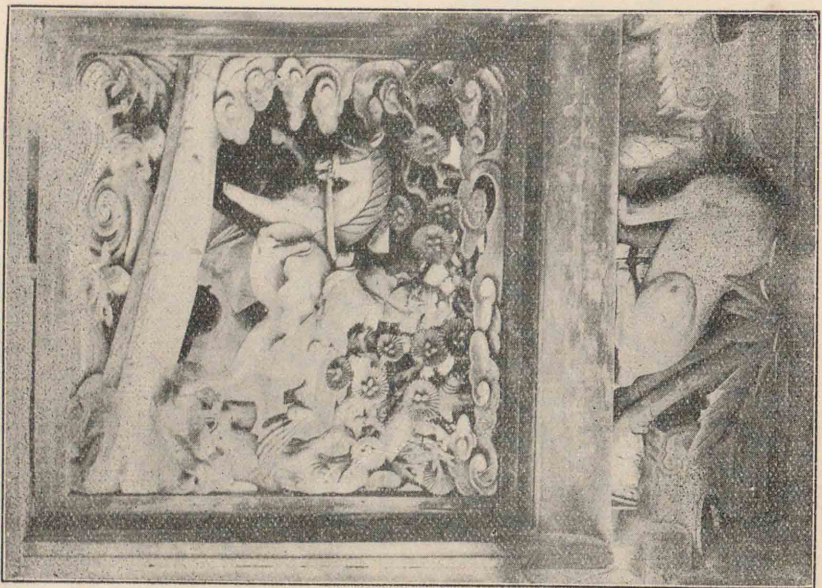


西本願寺の唐門(柳山城の遺物)

袖振の代時臣豊
(寫模形人裝服代歴列陳館物博室帝京東)



(帶板厚著表入子鹿細縮髪下解)



(物遺城山桃)刻彫の門唐寺願本西

全國の一統
(二二五〇)

大阪城

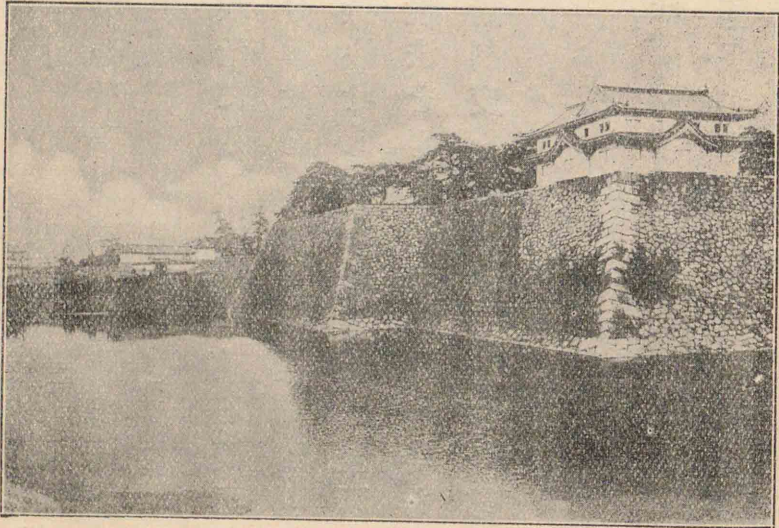
聚樂第

尊王

亂後凡そ百十年にして、日本全國始めて一統せり。

秀吉の豪奢と尊王 秀

吉壯大華麗を好み、賤嶽の戦後大阪城を築けり。その規模の宏大にして營築の堅固なること、天下第一と稱せらる。後、華麗なる聚樂第を京都に營み、盛儀を以て行幸を仰ぎ奉り、諸將をして、皇室を尊ぶべきことを誓はしめ、御料を増



城 阪 大

桃山城

し、公卿の領地を定めなどせり。後、また伏見に桃山城を築きぬ。その遺物によりて今猶華麗なる當時の面影を窺ふを得べし。

五奉行

秀吉の政治 秀吉心を政治に用ひ、淺野長政・石田三成

五大老

等の五奉行をして、政務を分掌せしめ、徳川家康・前田利家等の五大老をして、大事を議決せしめたり。また全國の田地を検して、田制を改め、税法をも定め、大判・小判等を鑄て、貨幣を一定したるなど、諸制度を改善するところ多かりき。

諸制の改定

第二十章 朝鮮征伐

朝鮮征伐の起因 我が國民が海外に雄飛せんとの氣

當時の氣運

運は、室町時代の末より盛なりき。秀吉これに乗じ、夙に

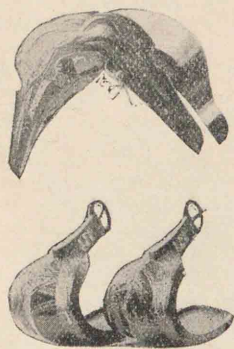
秀吉の雄志

外國を經略せんとの志あり。海内一統の後、明國を征せ

朝鮮出兵の理由

んと欲し、朝鮮王李^リ_暲に諭して、その嚮導たらしめんとせり。然るに李^リ暲は明を恐れて、これに應ぜざりしかば、秀吉は先づ朝鮮を伐たんとて、關白職を養子秀次に譲りて、太閤と稱し、肥前の名護屋に至りて、自ら征韓の指揮をなせり。

豊臣秀吉の鞍と鐙



(列陳館物博室帝京東)

文祿役の出軍 (一一五二)

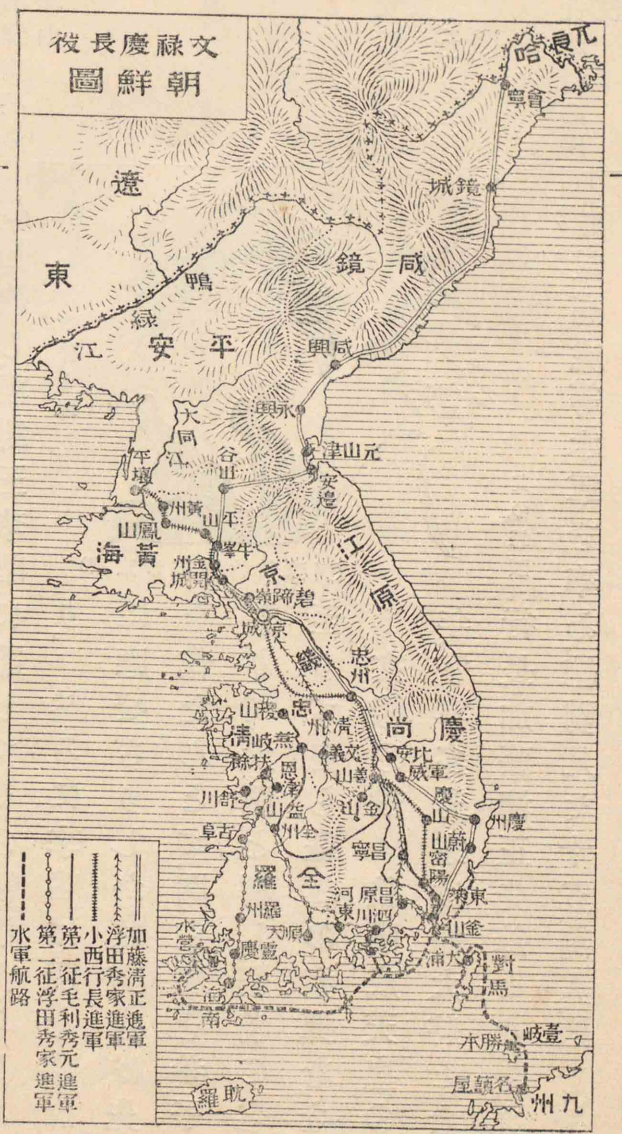
文祿

文祿の役 後陽成天皇の文祿元年、宇喜多秀家は總大將となり、小西

文祿役の戦況

行長・加藤清正先鋒となり、九鬼嘉隆・藤堂高虎等水軍を率ゐ、總勢凡そ十五萬人、道を分ちて攻

其の筆蹟



僅に二十日ばかりにして、京城を占領せり。國王出で奔りて、援を明に求めしが、行長は王を追ひて、平壤を陥れ、清

撃せり。我が軍の向ふ所、殆ど敵なく、小西行長等の釜山に上陸せしより、

和約の議

説きて媾和を求めしむ。

秀吉これを許し、守將を釜山に



南無妙法蓮華經

(藏館物博室帝京東)幟び及(藏院持勤都京)像の正清藤加
るよに版藏學大國帝京東は圖本

正は威鏡道に入りて二王子を擒にせしかば、八道悉く風

靡せり。明王これを聞きて甚だ驚き、大軍を出して來援せしが、行長むかへ撃ちて大いにこれを破りぬ。明の大軍再び來り攻めしも、小早川隆景等、またこれを碧蹄館に破れり。ここに於て、明主頗る恐れ、沈惟敬をして、行長に

和議の破裂



小早川隆景の像(原本は安藝佛通寺所藏) 本圖は東京帝國大學藏版の模寫

置き、諸軍を召し還せり。然るに、惟敬等の約したる條件は實行せられざるのみならず、慶長元年、明の使節來りて國書を呈するや、その文中に「爾を封じて日本國王となす」とありしかば、秀吉大いに怒り、直に再征の令を下せり。

慶長役の出兵

(二二五七)

慶長の役 慶長二年我が軍再び朝鮮に渡れり。このたびは小早川秀秋總大將たるの命を受け、その他の諸將

慶長役の戦況

秀吉の薨去 (二二五八)

戦役の結果



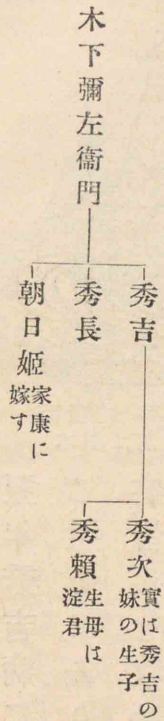
高臺院の像(原本は東京帝國大學藏版の模寫) 本圖は東京帝國大學藏版の模寫

は概ねもとの如し。明軍また來り援ひ、我が軍これと戦へり。清正等が蔚山の籠城、島津義弘の泗川の大捷は、この役中の著しきものなり。翌年秀吉病にかかりて薨じ、遺命によりて、出征の諸將、皆兵を收めて還りぬ。かくて前後七年に互れる外征の大業も、終にその功を果さざりしが、我が國威を發揚し、國民進取の氣風を促したること少からざりき。

秀吉の人物

北政所の貞順

秀吉の人物と家庭 秀吉宏量ありてよく將士を服し、稀世の才略と勤勉とを以て、未曾有の功業を大成せり。性また至孝にして親愛の情頗るあつかりき。その嫡室淺野氏、性貞淑順良にして、家庭を和らげ、微賤の中より、よく秀吉を助けたり。北政所また高臺院といふは即ちこの夫人なり。



徳川氏の家系

第二十一章 徳川家康 關ヶ原の戦

徳川家康の威望 徳川氏は、源義家の孫新田義重の後

家康の經歷

にして、もと三河の一豪族なり。家康は、幼にして今川氏に質たりしが、この頃より既に非凡の才能をあらはしき。

家康の名望

家康の勢力

秀吉薨後の形勢



前田利家の像(原本は加賀山中一衛所蔵) 本圖は東京帝國大學蔵版の模寫

義元敗死の後、信長に結びて、漸く武名を揚げ、小牧の合戦以來名望益高まりぬ。北條氏の滅亡後は、關東の地に封ぜられ、江戸城を築きて、これに移り、士民を愛撫して、密に勢力を養ひき。秀吉薨ずるや、子秀頼なほ幼なりしかば、後事を

家康の位置

諸將に託せしかば、特に家康は伏見にありて政務を執り、利家は大阪に居て秀頼を輔佐せり。ほどなく、利家病みて薨じ、家康の威權獨り盛なりき。



源義家—義國—(新田)義重—(徳川)義季……………(松平)廣忠—(徳川)家康

石田三成等の密謀

會津征伐

石田三成等は、かねて秀吉の信任あつかりしが、家康の威權愈盛なるを見て、豊臣氏に不利とならんことを恐れ、毛利輝元・上杉景勝・宇喜多秀家等と結びて、家康を除かんことを約し、景勝は領地會津に歸りて、軍備を修めたり。
慶長五年、家康は景勝を討たんとて、東國に向へり。三成

三成等の舉兵 事變に對する二烈婦の行爲

その虚に乗じ、小早川・島津・小西等の諸大名をかたらひ、兵を擧げ、先づ伏見城を陥れ、進んで美濃に入りぬ。



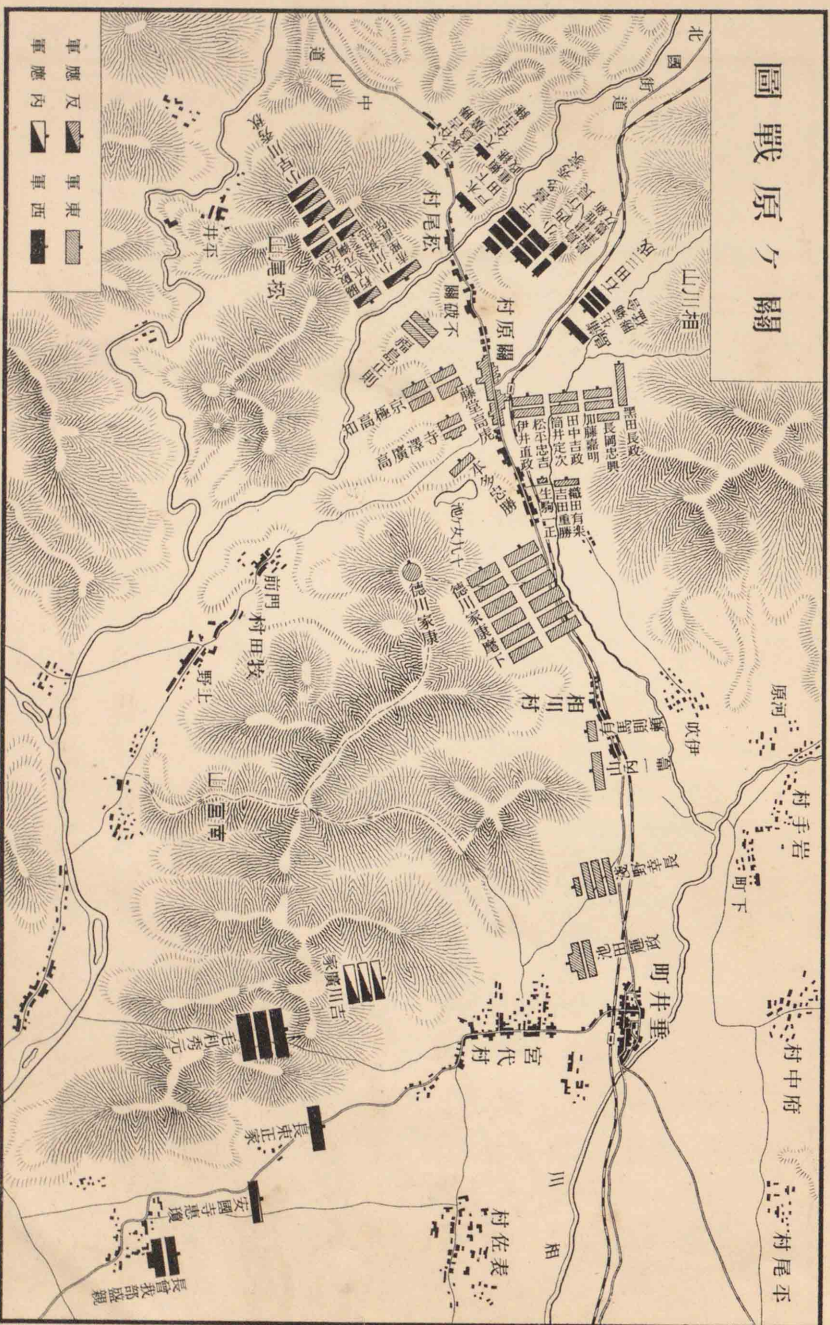
山内一豊の夫人の像(原本) 侯爵山内一豊の所藏(模寫)

山内一豊は家康の軍に従ひ東征せり。その夫人若宮氏は、かねてより内助の効多かりしが、この時も大阪より密使を發して、事變を急報せり。また細川忠興の夫人明智氏は、三成等の爲に人質として、大阪城内に收められんとせしとき、自殺してその節を全うし、遂に敵の計畫を止めしめき。

關原の會戰
 小早川秀秋の叛應
 西軍の敗北
 戦後の處置
 天下の大權
 徳川氏に歸す

關原の會戰 さて家康、下野の小山にて急報に接し、庶長子秀康を留めて、景勝に當らしめ、直ちに軍をかへして西上し、慶長五年九月十五日西軍と關原に會戦せり。戦^{タケム}酣なるとき、小早川秀秋、叛きて東軍に應じければ、西軍遂に大敗し、三成、行長等は捕斬せられ、景勝もつぎて降りぬ。家康は所謂かの天下分け目の戦に大勝を得てより、直に大阪に入りて大いに賞罰を行ひ、秀家を流し、景勝、輝元、その他西軍に屬する諸將の領地を削り、或は收めて、これを有功の諸將に分與し、秀頼には攝津、河内、和泉の六十五萬石を保たしめたり。ここに於て、天下の大權全く家康に歸せり。

關原の戰圖



年代 近古は、第八十二代後鳥羽天皇の文治元年(一八

近古の概括

| | | | |
|------|-----|--------------|-------------------|
| 2260 | 後陽成 | 慶長 5 (2260) | 關ヶ原の戦 |
| | 後陽成 | 慶長 3 (2258) | 秀吉薨す |
| 2255 | | | |
| | 後陽成 | 文祿元 (2252) | 朝鮮征伐の第一役起る |
| 2250 | 後陽成 | 天正 18 (2250) | 小田原征伐 |
| | | | |
| 2245 | 正親町 | 天正 13 (2245) | 四國平定 |
| | 正親町 | 天正 11 (2243) | 賤ヶ嶽の戦 |
| | 正親町 | 天正 10 (2242) | 武田氏滅亡 本能寺の變 山崎の合戦 |
| 2240 | | | |
| | 正親町 | 天正 5 (2237) | 秀吉の中國經略始まる |
| 2235 | | | |
| | 正親町 | 天正元 (2233) | 信玄卒す 足利氏亡ぶ |
| 2230 | 正親町 | 元龜元 (2230) | 姊川の戦 |
| | 正親町 | 永祿 11 (2228) | 信長京都に入る |
| 2225 | | | |

安土桃山時代年表

四五より、第百六代後陽成天皇の慶長七年(二二六二)まで、凡そ四百十七年間に亙れり。

變遷 後鳥羽天皇の御代に、頼朝が幕府を鎌倉に定め、守護地頭を設けてより、天下の實權は京都の朝廷を去りて、武家政治全く確立せり。源氏僅に三代にして絶え、北條氏幕府の實權を握るや、簡易適切なる政を施し、泰時、時頼等またよく父祖の業を守り、勤儉公正の善政を務めき。されば時宗の時に及び、多年養ひ來りし民力及び士氣などによりて、よく元寇の大國難に當り、大いに國威を發揚し得たり。されど、これより財政漸く亂れて、人心次第に北條氏を離れ、また皇位の御繼承に干涉して、大覺寺統の御不平を招き、遂に北條氏は執權一一〇餘年の後、鎌倉幕

府と共に滅びぬ。

後醍醐天皇英明にして、北條氏を滅ぼしたまひ、建武中興の業一たび成りしかど、かねて大志を懷ける足利尊氏は、中興後の政治その當を失ひ、人心の不平あるに乗じ、巧みに武士の心を収めて、遂に叛旗をあげ、皇族を擁立し、擅に幕府を京都に開きぬ。諸國勤王の武士はこれと戦ひて、王事に斃れ、争亂五十餘年の間に多く忠烈の名を止めぬ。足利三代將軍義滿、英毅の資を以て、よく強臣を挫き、諸制度を制定して、室町幕政の基礎を確めたり。されど、鎌倉管領の横暴はいかんともする能はず、將軍義教に至り、始めてこれを抑へたり。ほどなく義教は強臣に弑せられ、幼少なる將軍立つるに及び、權臣また威權を弄し、諸家の

り、鎌倉時代の文學・美術・工藝は、みな雄健の氣風を帯び、風俗は簡略となれり。また佛教には、平易なる新宗派起り、宋より禪宗さへ傳はりて、剛強の氣風を助成したり。室町時代に至り、争亂相つぎて起りしかば、學問教育は概して衰へ、次第に僧徒の手に移れり。されど義滿・義政等が奢侈風流を極めしかば、美術・工藝大いに發達し、氣風すべて、瀟洒となれり。桃山時代に及び、秀吉華麗を好み、宏大なる城郭、壯麗なる邸第を築造せしかば、美術・工藝は、皆豪華雄大の風を帶ぶるに至れり。

第五編 近世

第一章 豊臣氏の滅亡

家康征夷大將に拜せらる
(二二六三)
家康の退隱

江戸幕府の創立 後陽成天皇の慶長八年、徳川家康征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開きぬ。家康天下の政を總ぶること二年にして、職を嫡子秀忠に譲り、駿府に退居して、大御所と稱し、大事はなほ自ら處分せり。大阪役の起因 大阪にては、片桐且元、秀頼の傳となり、心を盡して、これを輔佐し、常に平和を計りしに、秀頼の生母淀君、驕慢なる大野治長を任用して、竊に徳川氏を圖る所ありき。たまたま、秀頼方廣寺を再建せしに、新造の鐘銘に國家安康等の句ありしかば、家康は怒りて、且元等が

豊臣氏舊業
恢復の企圖
方廣寺鐘銘
事件

大阪冬の陣
(二二七四)

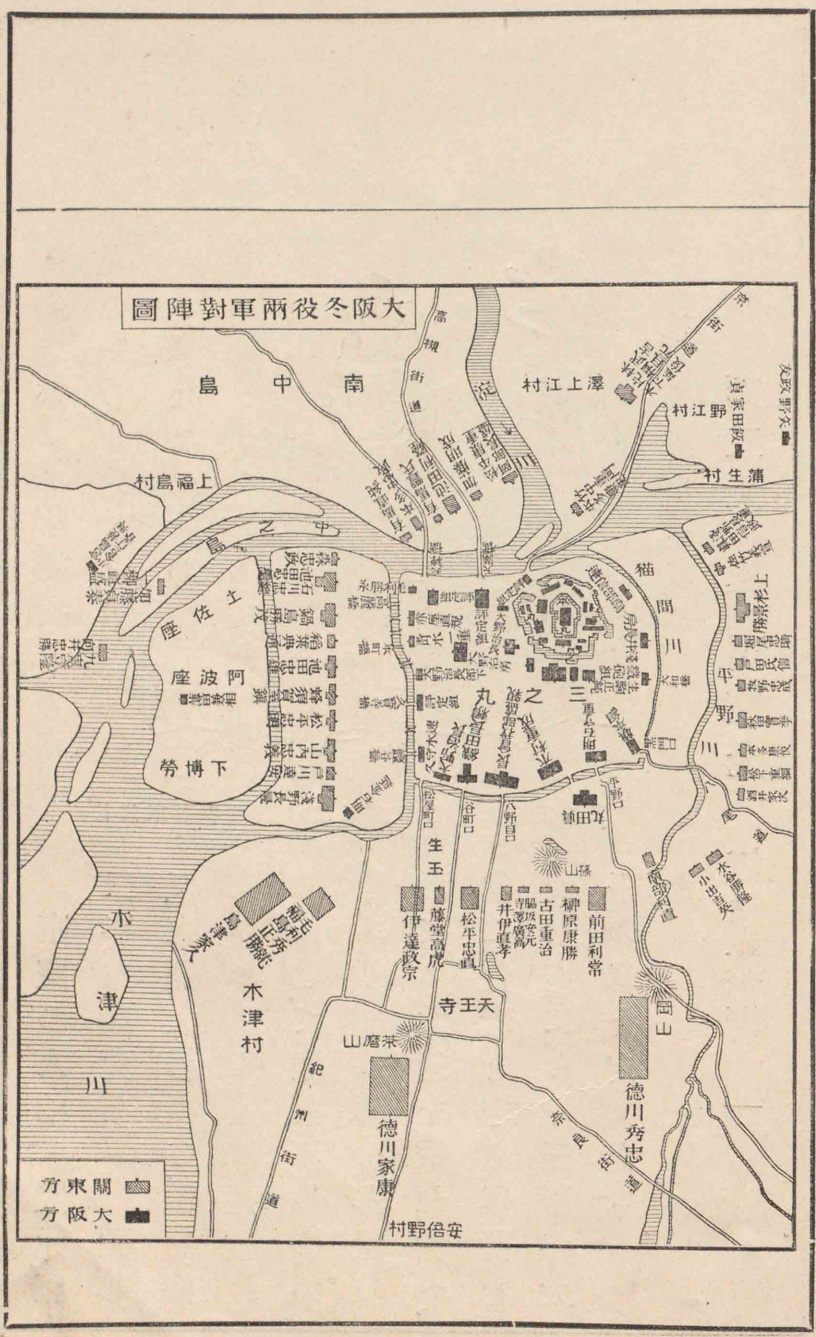
大阪夏の陣

豊臣氏の滅亡
(二二七五)

陳謝の言をもきかざりき。よりて、かねて、家康の處置に不平なる大阪の人々は、秀頼に勧め、遂に兵を挙げしめぬ。大阪冬の陣及び夏の陣。後水尾天皇の慶長十九年、家康秀忠、大兵を率ゐて、大阪城を圍みしが、城將よく防ぎ、十二月一たび和成りぬ。これを大阪冬の陣といふ。然るに講和條件として、城濠を埋むべきことにつき、意見の相違ありしより、豊臣氏の家臣等、大いに怒り、元和元年再び兵を挙げしかば、家康父子また大軍を發して、大阪を攻めぬ。然るに、城中の人心共和を缺き、木村重成、眞田幸村等の諸將相つぎて戦死せしかば、五月、城遂に陥り、豊臣氏全く亡びぬ。これを大阪夏の陣といふ。



豊臣秀頼筆



家康の創業
 秀忠の守成
 家光の豪邁
 春日局の養育
 名臣の輔佐
 寛永の治

徳川家光

初、家康幕府を江戸に開き、その子秀忠、謹厚



徳川家光の像は、原本は備前金山寺蔵
 本圖は東京帝國大學蔵版の模寫

にして、能く父の遺法を守り、つぎて、子家光にその職を傳へたり。

家光は、天性豪邁なるが上に、女丈夫の名高き、乳母春日局の教養を受け、かつ、名臣土井利勝、松平信綱、阿部忠秋等ありて、よくこれを輔けしかば、天下善く治まり、外様大名もその威に服し、幕府の職制も世にこれを寛永

整へられ、幕府の威權大いに定まりき。

幕府の職制
 大老
 老中
 若年寄
 三奉行
 大目付目付
 地方の諸職

の治と稱す。

幕府及び地方の職制 幕府の重職には、大老・老中・若年寄あり。大老は將軍を輔け、政務を總ぶれども常置にあらず。老中は政務を司り、若年寄これに與る。次に寺社奉行・勘定奉行・町奉行の要職あり。また大目付・目付ありて非違を監察せり。地方には、京都に所司代ありて、禁裏を守り、關西を控制し、大阪・駿府には城代を置き、また要地

春日局の像



寫模の版藏學大國帝京東は圖本(藏所院祥麟京東は本原)

江戸幕府諸侯配置圖

慶長末

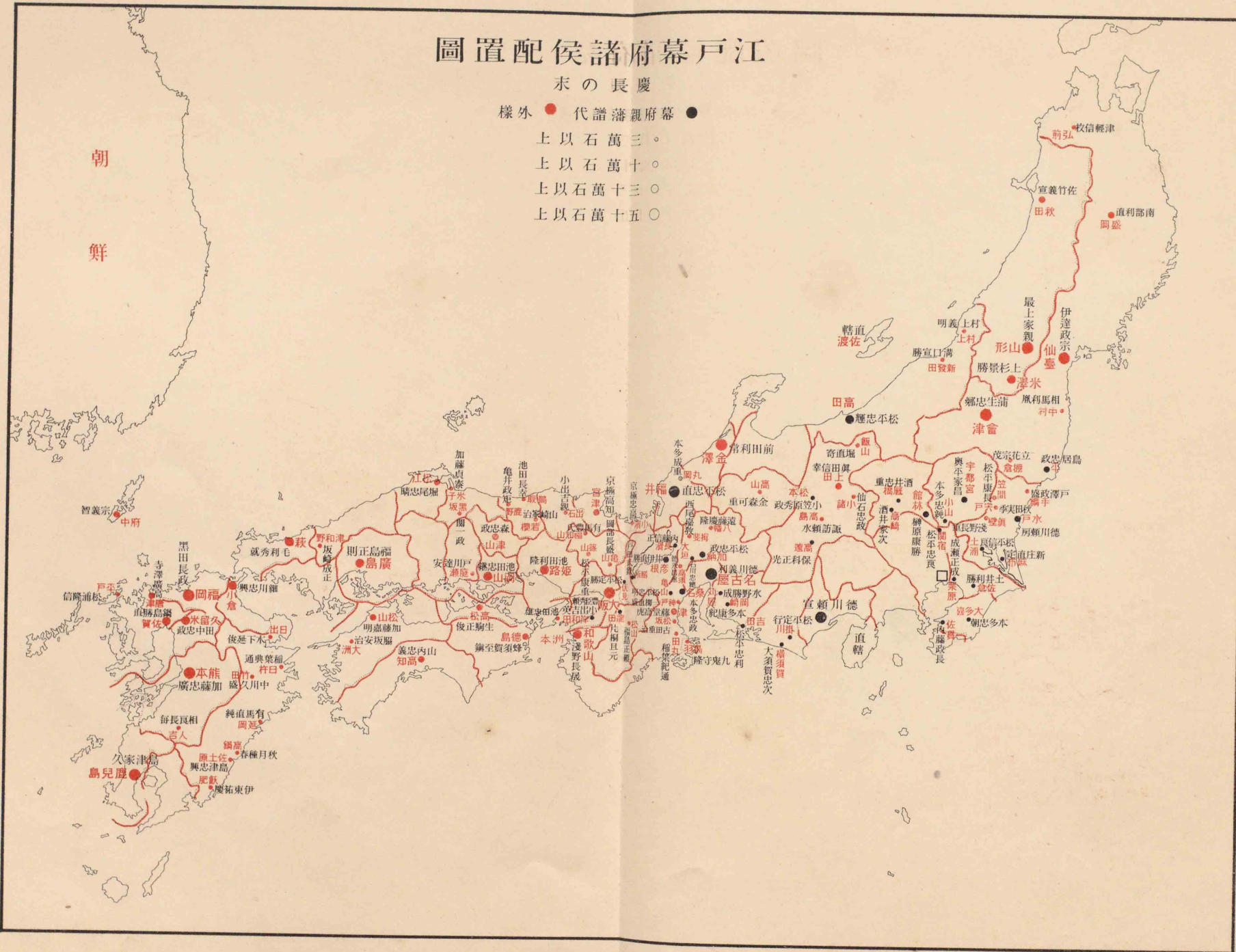
幕府親藩代 外様 ●

三萬石以上

十萬石以上

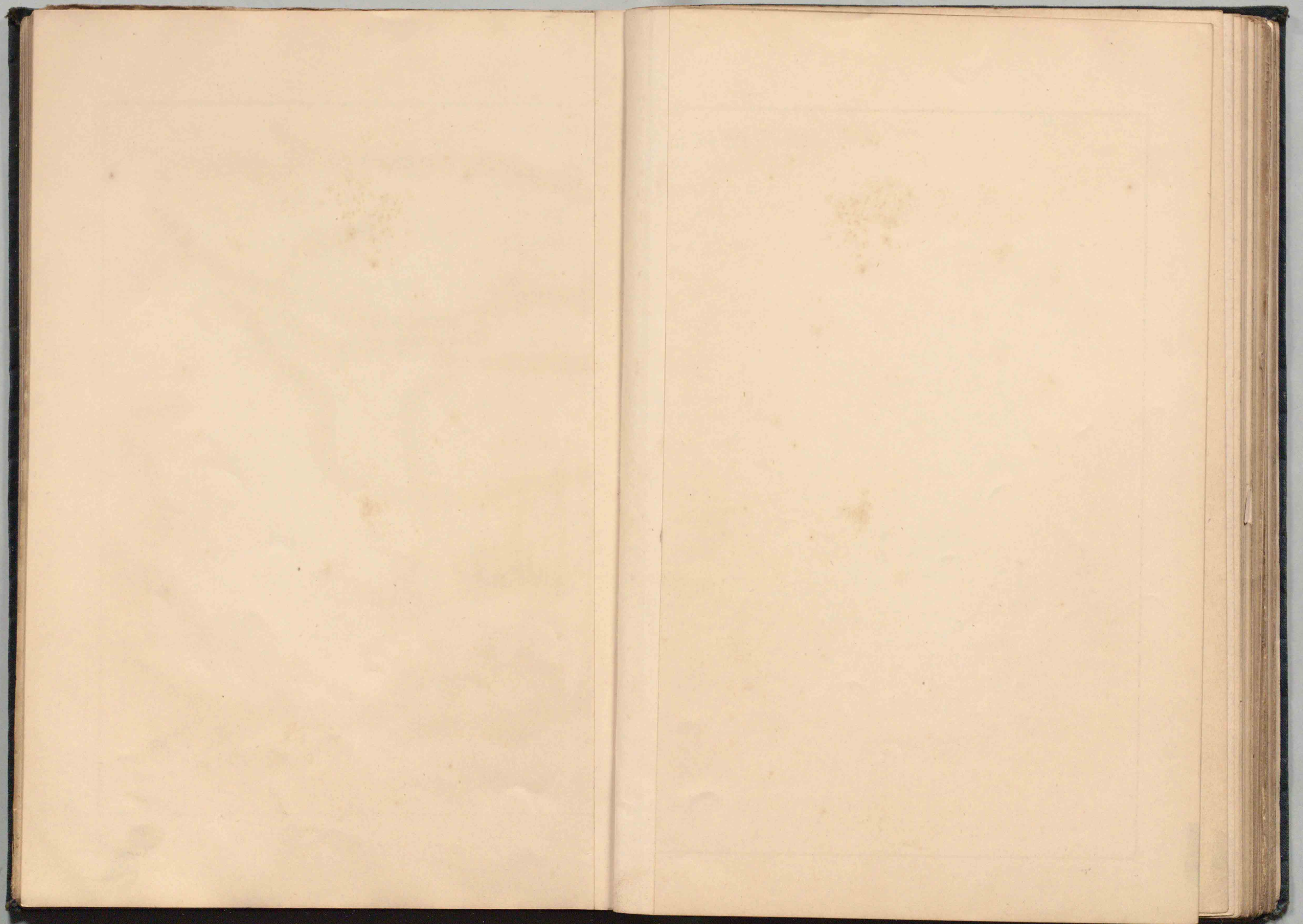
十三萬石以上

十五萬石以上



朝鮮

朝鮮



には奉行を置けり。その他の幕府直轄の地にも、郡代・代官などを置きて、支配せしめたり。

諸侯制御の法
諸大名の配置
武家諸法度
参勤交代の制

封建制度 家康は大いに諸侯の配置に心を用ひ、親藩門一及び譜代臣舊の大名を要地に置き、概して外様大名には廣大なる領地を與へて僻遠の地に移し、大小相交へ、親疎相制せしめたり。豊臣氏滅ぶるに及び、武家諸法度を發して、更に諸大名を檢束し、家光に至り、参勤交代の制を嚴にし、その妻子を江戸に置かしめき。かくて諸侯制御の法善く備はり、幕府の威權定まれり。

陽に朝廷を尊崇す

第三章 江戸幕府

幕府の朝廷に對する處置

幕府は、家康以來、世々朝廷

あやらのげのてにあ
ししげと道世そら水天
ししげと道世そら水天
ししげと道世そら水天

公家諸法度
朝廷の監察

家康皇室の
外戚たらんと望む



後水尾天皇の像は本原は京都泉涌寺所藏
本圖は東京帝國大學藏版の模寫

を尊び、供御の地を獻じ、皇居を造營したることなど多かりき。されど、政務の實權を幕府に握り、公家諸法度を定めて、公家を抑制し、京都所司代の人選を慎み、密に朝廷の狀況を監察せしめたり。

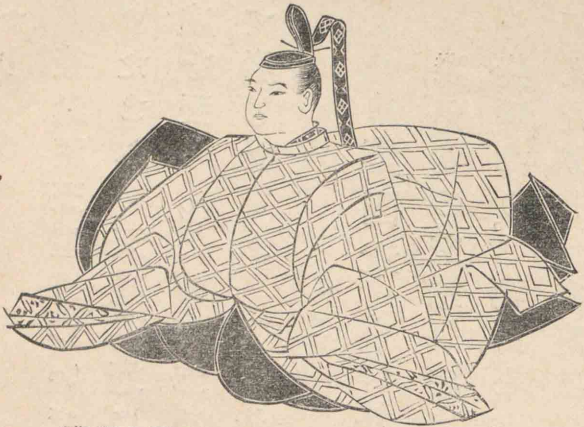
後水尾天皇 この時、後水尾天皇御位にましませしが、常に幕府の專權をよるこびたまはざりき。家康皇室の外戚とならんと欲し、藤堂高虎等をして、孫女を天皇の後宮に進めんことを奏請せしめぬ。天皇初は御許可なかりしが、家康の薨後

和子入内

後水尾天皇
の英明

天皇の御憤

明正天皇の
御即位



後光明天皇の像は本原は京都泉涌寺所藏
本圖は東京帝國大學藏版の模寫

遂に御許可あり。よりて元和六年、秀忠の女和子入内して女御に立てられぬ。これ即ち東福門院なり。

天皇英明にして、學を好み、皇威の振はざるを慨きたまへり。たまたま、幕府が僧澤庵等より、恩賜の紫衣を奪ひ、かつ、その抗議せしを罪して配流に處せり。天皇大いに憤らせたまひ、俄に位を東福門院の出なる皇女明正天皇に譲りたまひぬ。ここに於て稱徳天皇以後約八百六十年にして、また女帝立ちたま

後光明天皇
の英武
崩御

へり。
後光明天皇 ついで天皇は、位を皇弟後光明天皇に譲りたまふ。天皇英邁にして學を好ませたまひ、大いに皇威を張らんとす。御志ありけれど、いまだ果したまはずして崩じたまふ。人々皆これを惜み奉りき。

第四章 海外諸國との交通

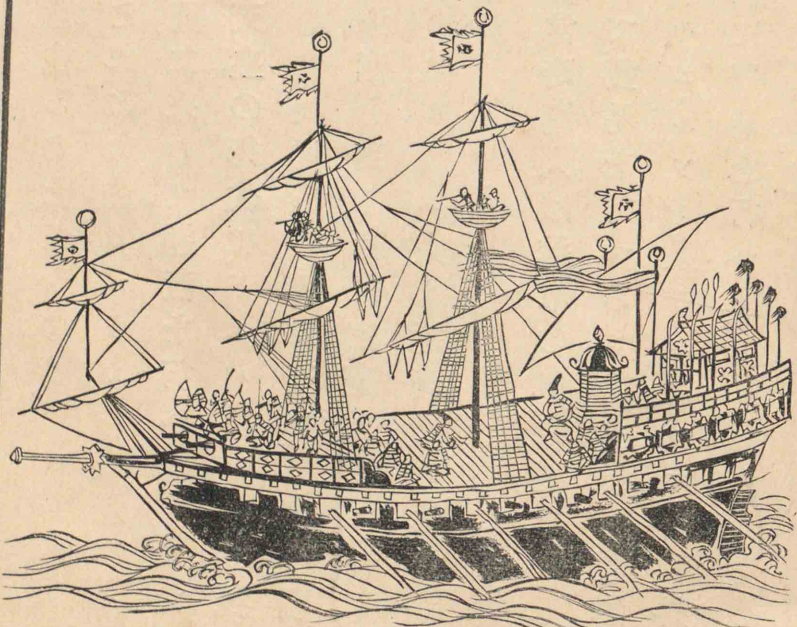
家康の通商
奨励
朝鮮との修好

隣國との交通 家康は貿易の利を察して、大いに通商を奨励せり。朝鮮との交通は、秀吉の朝鮮征伐以來、一時絶えたりしが、家康は對馬の宗氏をして、朝鮮との國交を復せんことを圖らしめしかば、慶長十年に至り、朝鮮の使者來朝し、交通再び開けたり。

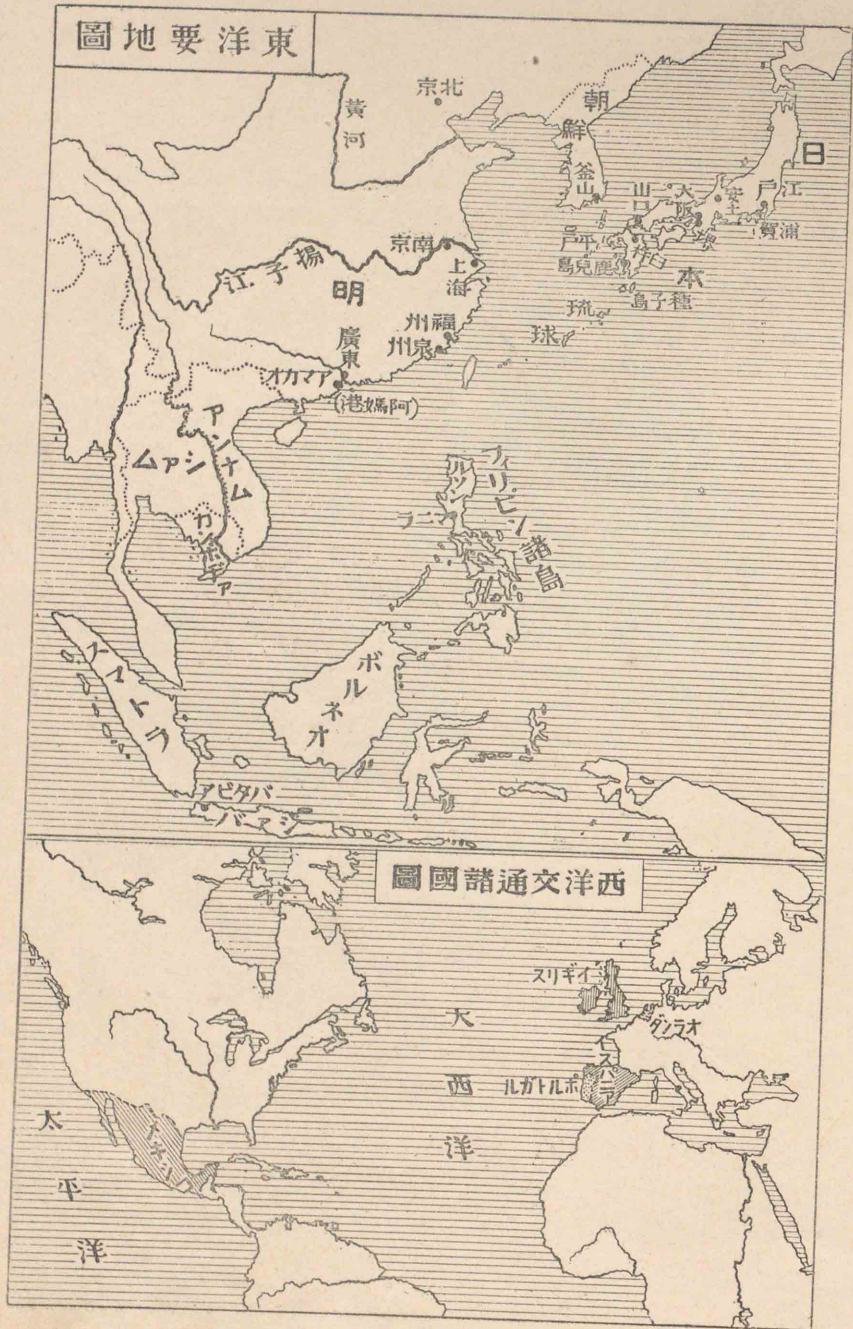
琉球の征伐

明との國交
不調

琉球は我が國の招を拒みて來聘せざりしかば、家康は、島津義久をして、これを伐たしめき。義久、琉球王を捕へ、家康の許を得て、永くその地を領することとなれり。家康は、また明にも舊好を修めんことを勧めしめ、應ぜざりしかば、國交遂に興らざり



(高模繪挿典辭大史國)艦軍の政長田山



| | | | | |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| 明との通商 | ポルトガル | イギリス人 | 邦人の海外 | 貿易の盛大 |
| の通商 | イスパニア | との貿易 | 渡航 | |
| (二二六九) | | | | |

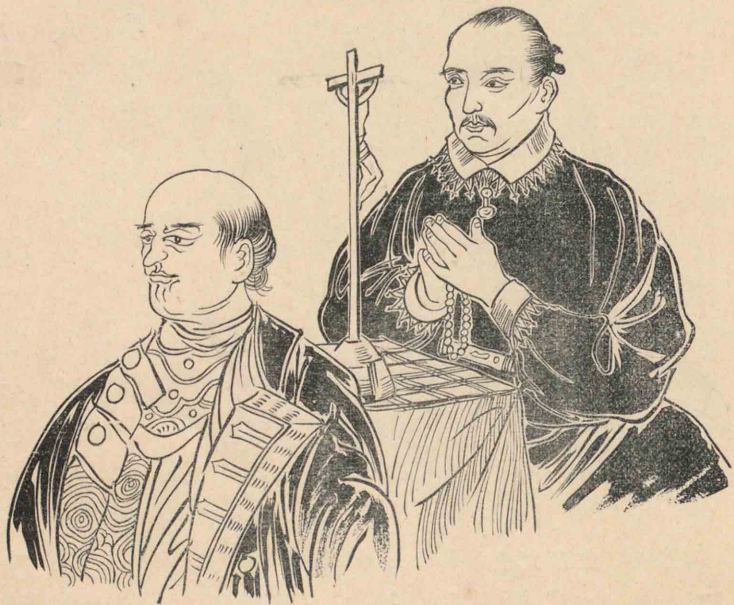
しかど、商船の往來は絶ゆることなかりき。

西洋諸國の交通 これより先、ポルトガル人及びイスパニア人は、既に我が國に來りて、通商を行へり。またオランダは我が正親町天皇の御代に、イスパニアより獨立したるが、その國は熱心に東洋の貿易に努め、家康の頃及び、我が國に來りて、通商を請ひければ、慶長十四年に、これを許せり。ほどなくイギリス人も通商を求めしかば、またその請を許したり。

邦人の海外通商 當時國人は進取の氣象盛なりしかば、海外各地に渡航して、貿易を行へるもの多く、明朝、朝鮮の外、安南、カンボヂヤ、シヤム、ルソン及びメキシコ等の外商とも廣く交通して、盛に貿易を行へり。

山田長政

支倉常長



(藏社神間淺岡靜像の政長田山 (藏基宗達伊爵伯)像の長常倉支
寫模の版藏學大國帝京東に圖本

國人の冒險立功

かく海外との交通盛
なれば、邦人の遙に歐
洲に渡航し、また冒險
を企つるもの少から
ざりき。支倉常長が、
その主伊達政宗の命
を受け、ローマに申し
て、宗教・風俗を視察せ
しこと、山田長政がシ
ヤムに赴き、日本街の
邦人を率ゐ、國王を助

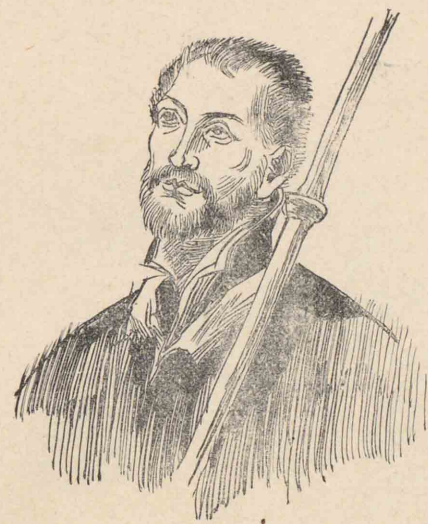
濱田彌兵衛

けて、内亂を鎮めたること、及び濱田彌兵衛が臺灣にて邦人を困めたるオランダ人を懲したること等は、皆有名なる事なり。

第五章 天主教の禁 島原の亂

天主教の傳來 これより

先後奈良天皇の天文十八年に、エスイタ派の宣教師サビエル、鹿兒島に來りて、始めて耶蘇教を傳へたり。我が西南の諸侯これに歸依して、その布教を許



サビエルの像(肖像の畫模寫)

るサビエル來(二一〇九)天主教の流布

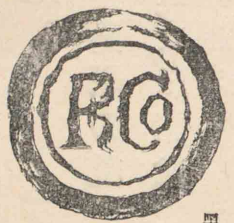
信長の處置 秀吉の教禁 家康の教禁 家光の教禁 海外渡航の禁止

すものありしかば、忽ち九州にひろまり、次ぎて、中國より近畿に流布し、遠く東北地方に及べり。世人これを切支丹宗または天主教と呼べり。

天主教の禁 信長は、佛教徒の暴横を惡みければ、これを抑へんため、天主教の布教を許しぬ。然るに秀吉は、その弊害を察し、令してこれを禁じぬ。家康は、通商を奨勵したれども、天主教の宣布は嚴にこれを禁じたり。され

ど海外との交通盛なるにつれて、天主教を奉ずるもの絶えざりしかば、家光に至り、益、その禁令を嚴密にし、邦人の海外渡航を禁じ

章印字マロ



大友宗麟(フランシスコの頭字)



細川忠興(タダチキ)



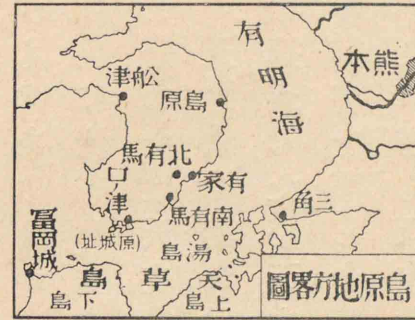
黒田如水(シメオンツヨスイ)

島原の亂起る
(二一九七)

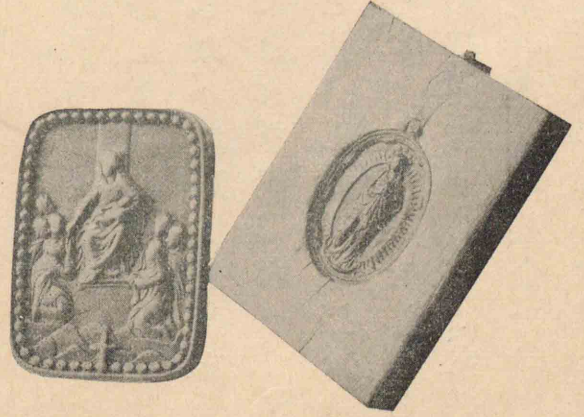
板倉重昌の
西下

また互市場を長崎の一港に限
れり。

島原の亂 されど天主教徒
は、なほ諸處に潛み、ことに九州
には多かりき。明正天皇の寛



永十四年、教
徒浪士相謀
りて、肥後の
天草島に兵
を挙げ、島原
半島なる原の城趾を修めて、これに據
り、勢甚ださかんなり。幕府、板倉重昌



繪踏
(るよに物現の藏所館物博室帝京東)

松平信綱の
西下

天主教の嚴
禁

鎖國

をして、これを討たしめし、更に智謀に富める老中松平信
綱を遣はし、翌年漸くこれを平げたり。これを島原の亂
といふ。

天主教の嚴禁及び鎖國 これより、幕府は益々天主教の
禁を嚴にし、國人をして必ず佛教の一派に歸せしめ、宗門
改の制を定め、疑はしきものは嚴に踏繪を踏ましめて、こ
れをただせり。また支那・朝鮮・オランダの外は、全く外船
の來航を拒絶し、造船の制限、邦人の海外渡航の禁を嚴に
せり。ここに於て、開國は變じて鎖國となり、世界の情勢
は、たやすくは知られずなりぬ。

家光薨す
(二三一一)

第六章 徳川綱吉
慶安の變 後光明天皇の慶安四年、家光薨じ、子家綱幼

| | | | |
|------|-----|-------|----------------------------------|
| 2310 | 後光明 | 慶安 4 | (2311)家光薨す |
| 2300 | 明正 | 寛永 16 | (2299)畿國 |
| | 明正 | 寛永 14 | (2297)島原の亂 |
| 2290 | 後水尾 | 寛永 5 | (2288)濱田彌兵衛オランダ人を懲す |
| | 後水尾 | 寛永元 | (2284)和子中宮となる |
| 2280 | 後水尾 | 元和 | (2275)大阪夏の陣 |
| | 後水尾 | 元長 19 | (2274)大阪冬の陣 |
| | 後水尾 | 慶長 18 | (2273)イギリス通商開始 支倉常長ローマに 使す |
| 2270 | 後陽成 | 慶長 14 | (2269)島津氏琉球を征す オランダ通商開始 |
| | 後陽成 | 慶長 8 | (2263)江戸幕府の創立 |
| 2260 | | | |

江戸時代初期年表

浪士の陰謀

家綱薨す
(二三四〇)

綱吉の性質

綱吉の善政

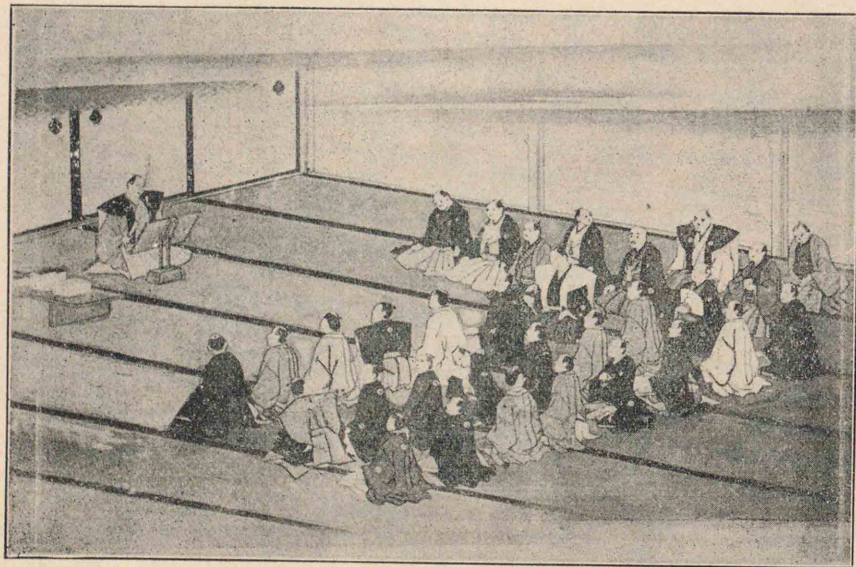
にして將軍となれり。浪士由井正雪等、喪に乗じて、亂を起さんとせしが、事露はれて誅せられぬ。

綱吉の初政 靈元天皇の御代に、將軍家綱薨じ、その弟、綱吉、職をつぎて五代の將軍となる。綱吉、賢明にして果決なり。まづ前代に專權なりし大老酒井忠清を退けて、弊政を改め、堀田正俊を任用して、その政治頗る見るべきものありき。綱吉また深く學を好み、聖堂を湯島に建て、學舎を設けて諸生に學ばしめ、林信篤を大學頭に任じ、以てその教授に當らしめたり。

この頃水戸侯徳川光圀も心を名教に用ひ、學者を聘し、史館を開きて、文教を興し、備前侯池田光政も、態澤蕃山に任じて善政を施き、會津侯保科正之も大いに學問を奨めた



(藏所寺臺高都京は本原)像の閉光川徳
寫模の版藏學大國帝京東は圖本



(版藏館物博育教京東)圖の釋講覺平昌

文教振起

綱吉の奢侈
弊政



(藏所政詮田池爵侯は本原像の政光田池
寫模の版藏學大國帝京東は圖本

り。その他の諸大名にも治
道に勉め、學問を奨励するも
の多かりしかば、天下能く治
まり、文教頗る隆興せり。
綱吉の弊政 然るに綱吉
は中年以後、漸く政に倦み、近
習柳澤吉保を重用して政を
ゆだね、常に奢侈遊宴に耽り
しかば、幕政頗る亂れぬ。綱
吉篤く佛法を信じて、佛寺を
建て、また常に子なきを憂へ、僧隆光の言を信じて、殺生禁
斷の令を布き、特に自ら成年の生れなるを以て、多くの犬

財政の困難

士風の頹廢

を愛養し、犬を害するものは、嚴罰に處したり。世に稱して、犬公方といへり。

この頃、諸種の天災も頻りに起り、奢侈、弊政と相俟ち、幕府の財政益、窮乏せしかば、金銀の貨幣を改鑄して、品質を下し、以て一時の急を救ひぬ。これがために、物價騰貴し、人民の困難一方ならざりき。

この頃は泰平うちつづきしかば、安逸に慣れ、勇武質素の



(藏大容平松爵子は本原)像の之正科保
寫模の版藏學大國帝京東は圖本

元祿風

赤穂義士の
打入

氣風漸く廢れぬ。かつ上には豪華を好める將軍出で、旗本等は米價騰貴のために暴富を致しければ、士民上下共に奢侈遊惰に流れ、物事に華美を競ひき。世にこれを元祿風といへり。

赤穂義士 かく士風の衰へたる時に當り、赤穂の城主淺野長矩ナガノナガタケの遺臣大石良雄等四十七人、非常なる辛苦に耐へ、吉良義央ヨシキヨウを討ちて亡君の仇を報ぜり。時に東山天皇の元祿十五年十二月なり。世人その舉を讚し、稱して赤穂の義士といへり。

第七章 徳川吉宗

家宣の弊政改善 寶永六年綱吉薨するや、兄綱重の子

綱吉薨す
(二三六九)



(藏所館物博室帝京東)巻圖俗風筆春長川宮

家宣將軍
新井君美の
登用
弊政改善
閑院宮
白石の著述
七代家繼



(寫模の藏所館物博室帝京東)像の美君井新

家宣これにつぎて六代の將軍となり、新井君美を登用して、前代の弊政を改めたり。君美は白石と號し、幼より苦學して、博く諸般の學に通じ、識見甚だ高し。その家宣に

用ひらるるや、財政を整理し、朝鮮使節待遇の禮を改め、後、外國貿易の額を定めたり。また中御門天皇の御弟直仁親王を立てて閑院宮となし奉りたるも、白石の建議に基けるなり。晩年白石は著述につとめ、重要な著書頗る多し。家宣在職僅に四年にして薨じ、子家繼、幼年を以て嗣ぎしが、又、早く薨じたり。よりて、紀伊

八代吉宗

吉宗の勤儉

吉宗の尙武

財政の整理

殖産興業

砂糖の製造

の徳川頼宣の孫吉宗迎へられて第八代の將軍となりぬ。

吉宗の治績 吉宗英邁に

して、世風日に華奢柔情に流るるを憂へ、勤儉を以て天下を率ゐ、また大いに武藝をすすめ、親しく、田獵に出でなどして、勇健の氣風を養ひければ、士風、また興れり。

吉宗貨幣を改鑄して品質を精良にし、最も力を財政の整理に用ひ、また産業の發達を計り、甘蔗を栽培して砂糖を



徳川吉宗の像(原本は公爵徳川家達所藏) 本圖は東京帝國大學藏版の模寫

甘藷の移植
諸藩の國產
興起

法律の整頓

公事方定書

大岡忠相

學問の奨勵

實學の尊重

庶民教育

江戸幕府中
興の英主

製せしめ、甘藷を薩摩より諸國に移植して、凶年に備へしむるなどせり。諸藩も、また、その意を承け、競ひて國産を興しければ、産業益、發達して、國富の増進著しかりき。

吉宗、また、心を刑法に留め、これを成文にせんとて、人々と議して、公事方定書を制定せり。當時、江戸の町奉行に大岡越前守忠相あり。その裁判公平機敏を極め、名奉行の譽高かりき。

吉宗大に實用の學を重んじ、自ら天文・曆數などを修め、また顧問の儒者室直清に命じ、平易なる修身書を書かしめてこれを庶民に授け、大いに教育の普及をはかれり。

吉宗の人物 吉宗は江戸幕府中興の英主にして、その母巨勢氏、また賢明の聞えあり。吉宗英邁にして、文武の

享保の治

材を兼ね備へ、身を以て下を率ゐ、人材をあげて政に任じ、在職三十年の間、治民の善政施さざるはなく、前代の弊政悉く改まりて、士風全く一新せり。享保の治といふは即ちこれなり。

第八章 江戸時代の佛教及び文物 一

崇傳天海の事業

佛教 初、家康、僧崇傳を信任し、その議を用ひて、諸種の法度を定め、大寺本山には各寺院法度を下して、これに従はしめき。僧天海また、家康、秀忠、家光の崇敬をうけ、上野に寛永寺を開き、家光は後水尾天皇の皇子守澄法親王を法嗣に申し下せり。島原の亂後、家光は國人をして悉く佛教徒たらしめ、宗門改の制を厲行して、これを諸宗僧侶

宗門改の制の厲行

綱吉の崇佛

の手に委ねき。綱吉また篤く佛法を信じ、護國寺等を経て、僧侶をも優遇したり。されば僧侶は富有に赴くと共に次第にその行業

僧侶の放肆

黄檗宗の傳來

家康の文教復興



元隱和尚の像は、和圖に由来し、先家綱吉の世に僧隆珂元明より歸化して、黄檗宗を傳へたり。これを宇治の萬福寺の開祖とす。

漢學の復興 初、家康は武を以て天下を定めしも、これを治むるには文教を最も先とすと思ひ、藤原定家の後な

惺窩と羅山

書物の出版
諸大名の文
教振起

網吉以前の
學者
中江藤樹

野中兼山



藤原惺窩の像(武藏林昇所藏) 羅山の像(武藏林昇所藏) 大東帝國大學藏版の模寫

は藩政に與りて功多く、その女婉子は、學に深く、醫術に通

網吉頃の學
者

木下順庵と
その門人

伊藤仁齋
荻生徂徠

漢學の隆興 將

じ、書にも巧なりき。軍網吉の頃に至り、學問の獎勵益盛なりしかば、名儒多く出でたり。京都に木下順庵あり。博學の名高く、新井君美室直清その門に出でたり。又、京都の伊藤仁齋は學徳秀で、江戸の荻生徂

中江藤樹の像(大東帝國大學藏版の模寫)



荻生徂徠の像
(天槻文彦所藏の模寫)

伊藤仁齋の像
(貝原益軒の模寫)

伊藤仁齋の像(大東帝國大學藏版の模寫)

貝原益軒

家齊頃の漢
學
林述齋
柴野栗山



林述齋の像(武藏林昇所藏) 柴野栗山の像(東京帝國大學藏版) (寫模) 東京帝國大學博物館所藏の模寫

けぬ。かくて江戸幕府時代は、通じて漢學盛なりき。

彼は博識にして、共に門人に英材多かりき。筑前の人貝原益軒は、學識・徳行を以て著はれ、假名交り文にて多くの書を著し、廣く世を益したり。その妻初子も淑徳文才ありて夫の著述を助けたり。

寛政の頃に及び林述齋は松平定信に用ひられて大いに學政を振張し、柴野、栗山等は昌平黌の教授に任ぜられてこれを助

僧契沖

北村季吟

俳諧
戯曲



僧契沖の像(東京帝國大學博物館所藏の模寫)

第九章 江戸時代の佛教及び文物 二

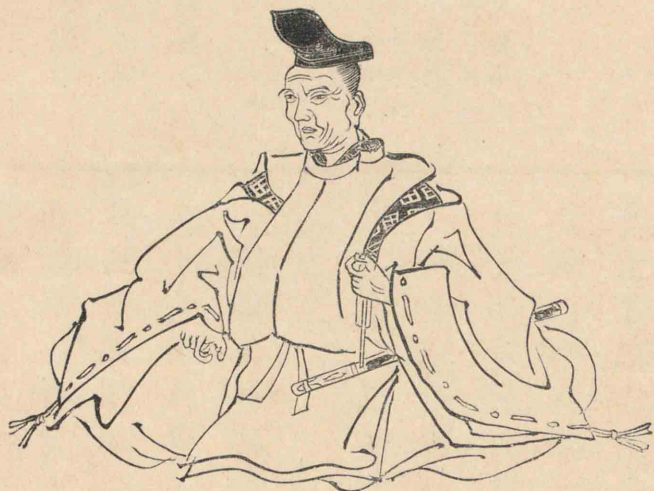
國學の興起 綱吉將軍の頃は、漢學盛なりしが、國學も

また起れり。大阪の僧契沖は、古語を研究して、はじめて國學を起し、近江の人北村季吟は、和歌・和文に秀で、幕府の歌學方にあげられぬ。これより國學の大家相つぎて出でし有様は後章に述ぶべし。元祿頃には、俳諧に松尾芭蕉あり、戯曲に近松門左衛門ありて、平民文學の基を開き、小

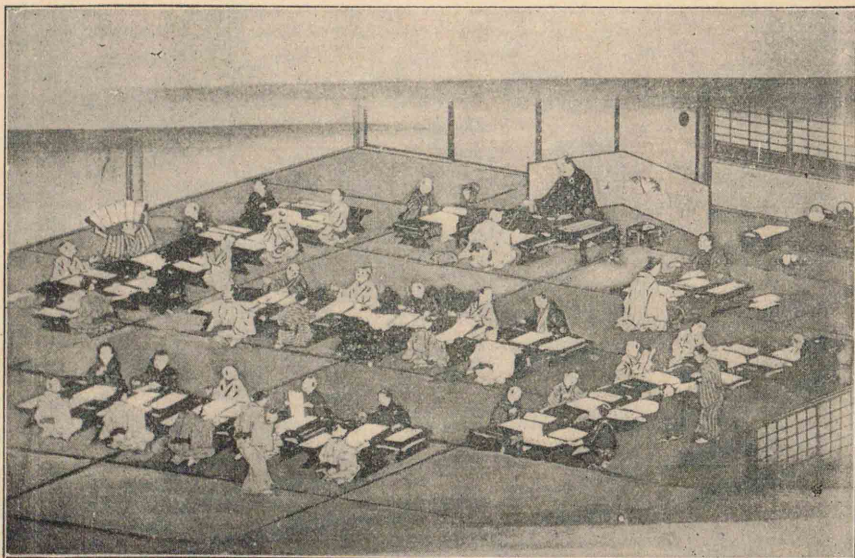
| | | | | |
|----|-------|-------|----|----------|
| 小説 | 士族の教育 | 庶民の教育 | 心學 | 女子教訓書の著述 |
|----|-------|-------|----|----------|

説も次第に盛に行はれ、家齊將軍の頃には、山東京傳瀧澤馬琴等の有名なる小説家出でたり。教育の普及 江戸幕府創設以來、太平打つづき、幕府及び諸大名は、學校を建て、學者を聘し、力めて文教に意を注ぎしかば、學問は進歩し、教育の方法次第に備はれり。また學者も、私塾を開きて、子弟を教へ、寺子屋、手習師匠等は到る處にありて、庶民の初等教育を施し、學問は全般に普及したり。また享保の頃、京都の石田梅巖は、平易に道德談を説きぬ。これより心學起り、下層社會の徳行をすすむるに力ありき。

女子の教育 文教の興起につれて、學者も漸く女子の教育に注意し、女子教訓の書を著はすもの少なからざり



(藏所 郎太米山松京東は本原)像の門衛左門松近
寫模の版藏學大國帝京東は圖本



(版藏館物博育教京東)圖の屋子寺

上流社會の
女子教育の
中流以下の
女子教育

繪畫
元祿前
元祿後

き。儒者中村惕齋チキサイは姫鑑ヒメカミを、貝原益軒ヘイケンは女大學及び家道訓を著はし、大高坂芝山シヤンの妻いさ子は、松山侯の夫人の命を承けて、唐錦カニシキ十三巻をつくれり。

女子の學校教育は、男子の如く盛ならざりしが、上流社會の女子は、家庭にて學藝を習得し、中流以下の士族及び平民の女子は、寺子屋・手習師匠に通學して、讀書・習字等を學びき。

美術工藝の進歩 文化大いにすすみて、華美の風盛なりしかば、美術工藝は頗る發達したり。繪畫には、狩野探幽、江戸時代の初に出て、狩野派を中興せしが、元祿に至り、菱川師宣シノブノ・宮川長春等は、浮世繪に長じ、英一蝶ヘイイチテウ及び蒔繪の名人尾形光琳ミナモトは、各一新機軸を出せり。家重の頃、池野

大雅南宗畫に秀で、家治家齊の時に、圓山應舉出でて寫生に妙を得、つぎて松村吳春、谷文晁等各一派を創め、浮世繪の名手も相つぎて出でたり。

江戸時代の繪畫には前代よりの狩野土佐兩家の外に裝飾畫浮世繪南宗畫圓山派の四大流派起れり。英一蝶は邦俗を畫き滑稽趣味を交へて狩野派の面目を一新し、谷文晁は南北折衷を唱へて一派を創め、吳春は圓山派より出でて四條派の祖となれり。浮世繪は岩佐又兵衛はじめてこれを起し、つぎて師宣、長春の名手出でたり。將軍家齊の頃に喜多川歌麿、歌川豊國等ありて、またこの技に長じ、精巧なる、錦繪の版行を見るに至れり。

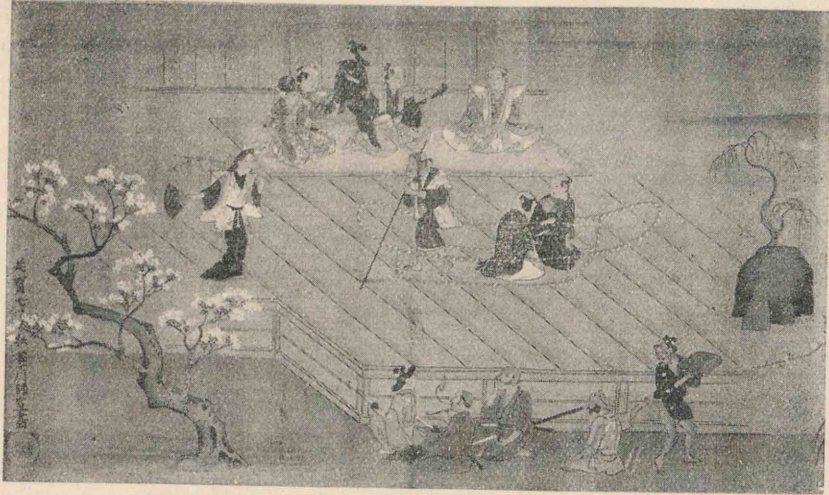
また蒔繪・陶器等の製法は、益進みて精美を極め、織物も次第に精巧に赴けり。先に西洋より天鵞絨の織法を、支那より縮緬の織法を傳へしが、後、透綾・友禪等も創められぬ。

蒔繪
陶器
織物



(藏所同利田前爵伯)圖睡四筆幽狩野

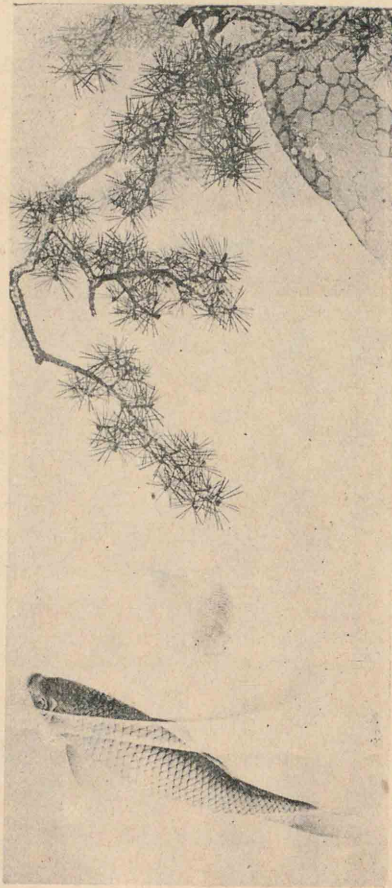
(藏所一隆鬼九爵男)圖の川田角劇演筆宣師川菱



(藏所氏七新府別京東) (畫風屏)圖の浪波筆琳光形尾

一三六十一三七中挿畫

圓山應舉筆鯉魚の圖(伊勢小津與右衛門所藏)



池野大雅筆楓林停車の圖
(藏所郎次丹田吉京東)

第十章

寛政の治 諸藩の治
西洋學術の傳來

| | | | |
|------|-----|-------------|------------|
| 2410 | 櫻町 | 延享元(2404) | 青木敦書蘭學を學ぶ |
| 2390 | 中御門 | 享保 5(2380) | 洋書舶載の禁を弛む |
| | 中御門 | 享保元(2376) | 吉宗將軍となる |
| 2370 | 東山 | 寶永 6(2369) | 家宣新井白石を登用す |
| | 東山 | 元祿 15(2362) | 赤穂の義士復讐す |
| 2350 | 東山 | 元祿 3(2350) | 綱吉聖堂を湯島に建つ |
| 2330 | 後西院 | 明暦 3(2317) | 徳川光圀史館を開く |
| 2310 | 後光明 | 慶安 4(2311) | 由井正雪の亂 |

江戸時代中期年表

九代家重

十代家治

(二四二〇)

田沼父子の
専權

災變饑饉

十一代家齊

田沼父子の専權 將軍吉宗は、櫻町天皇の御代に、職を子家重に譲りぬ。家重は多病にして、政を近臣に委ね、田沼意次大いに信任せられ、専恣甚だしかりき。桃園天皇の御時、家重の子家治將軍となるや、意次益々寵任せられて、遂に老中に進み、その子意知は若年寄に任ぜられ、父子並び立ちて、政權を恣にし、賄賂を貪り、租税を重くし、幕政大いに亂れぬ。加ふるに、天災地變頻りに起り、所謂天明の大饑饉さへ、これにつきければ、上下の疲弊甚だしく、吉宗中興の業漸く衰へぬ。既にして、意知は事によりて殿中に刺され、ほどなく、意次も退けられたり。

定信の良政 將軍家治薨じて後、吉宗の曾孫にして、宗尹の孫なる家齊は家治につき、十一代の將軍となりぬ。

松平定信の
輔佐

定信の人物

勤儉の政
人才登庸



松平定信の像は原本は子爵松平定晴所藏
本圖は東京帝國大學藏版の模寫

この時家齊はなほ幼くして、天下多事なりしかば、白河の城主松平定信田安宗武の子舉げられて、老中となり、政を輔けぬ。定信は賢明にして、學識に富み、その封内を治めて、治績ありき。幕政を執るに及び、よく吉宗の遺法を守り、勤儉を以て下を率ゐ、賢能に任じて弊政を除き、全く士風を一變せり。

この時、英明なる光格天皇、閑院宮より入りて、位をつ

とくつ
のきり
きたる
たみ
うた
れし
心の
さす
むす
る大
言の
後櫻
皇天

皇居の造營
學政の振張

勸業武備風
俗匡正

細川重賢

上杉治憲

きて、おはしければ、時の人喜びて、聖天子西にありて、賢相
東に出づと稱せり。

天明八年の大火により、皇居炎上しければ、定信、古制を案
じてこれを造營し、また昌平黌の學制を更張し、醫學館な
どを設けて、教育を奨励せり。その他諸國の農桑を勧め、
武備を修め、風俗を矯正するなど、治績甚だ多く、幕政再び
振へり。所謂寛政の治これなり。

諸藩の治績 この前後には、諸藩にも賢君輩出して、治
績を以て聞こゆるもの頗る多し。熊本の細川重賢は勤
儉の政を布き、教育をすすめ、産業を興し、刑法を寛にせり。
米澤の上杉治憲は恭儉にして、學を好み、國産を興し、備荒
儲蓄をなさしめたり。されば天明の饑饉にも兩藩の領

其の他の諸
藩の治績

享保の洋書
寛禁
(二三八〇)
西洋學術講
習の始め



上杉治憲の像は東京皇國大學蔵の杉上伯爵の憲所蔵の模寫

内には、餓死の民を見ざり
き。その他、安藝の淺野重
辰、紀伊の徳川治貞等良主
多く出で、教育、産業に心を
注ぎ、治績の見るべきもの
頗る多かりき。

西洋學術の傳來 これ
より先、將軍吉宗は、西洋學
術の優れたるに感じて、享
保五年、洋書輸入の禁を寛
にし、青木敦書を長崎に遣はして、蘭書を學ばしめぬ。こ
れ實に我が國に於て蘭學講究の初めとす。豊前の醫師

前野良澤の蘭學

杉田玄白の蘭學

大槻玄澤の蘭學

前野良澤の像



大槻玄澤の像



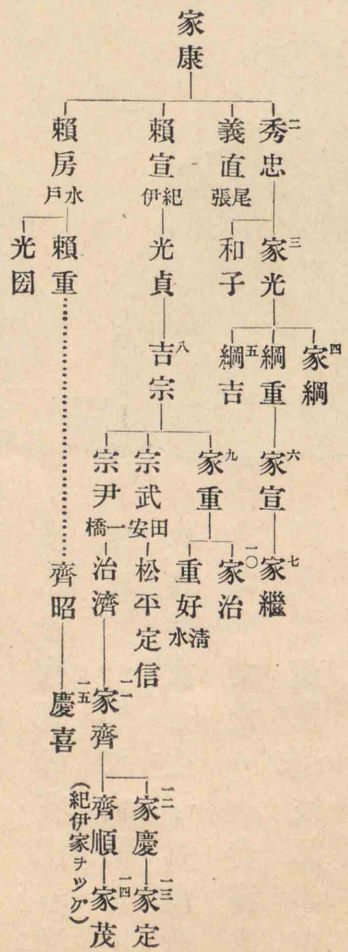
杉田玄白の像

（寫模の版藏學大國帝京東は圖本）藏所彦文槻大は本原

前野良澤は、敦書につきて蘭語を學び、更に長崎に遊びてこれを習得せり。若狹の醫杉田玄白は、オランダ醫學の精妙に驚き、良澤と謀りて、蘭書人身内景圖説の翻譯に志し、非常の刻苦を重ね、およそ四年の後、功成りて、解體新書を作りぬ。寛政の頃、大槻玄澤出でて深く蘭學を修め、蘭學者を養成し、また蘭學階梯を著して、蘭書の學修を容易

ならしめたり。これより、各種の科學も次第に開け、海外の事情に通ずる者漸く多くなれり。

徳川氏系圖



朝權の不振と幕府の隆盛

第十一章 國史古典の研究 尊王論

國史古典の研究 政權一たび武門に歸してより、世はその政治に慣れて、天皇の尊きことを忘るる者あるに至

國史古典の
研究と尊王
論

荷田春滿

賀茂真淵



本居宣長の像
東京帝國大學藏版の模寫



賀茂真淵の像
賀茂真淵全集挿畫

一四四

りしが、國史古典の研究
起るに及び國體の尊嚴
は次第に輝きて、漸く人
心を覺醒するに至れり。
初、僧契沖の國學を再興
するや、京都の荷田春滿
これにつぎて古語を究
め、その女蒼生子また歌
文に秀でたり。春滿の
門人、賀茂真淵は師の志
を繼ぎて、深く古典を究
め、國體を明かにするを

本居宣長

以て己が任とせり。

本居宣長その門より出で、益師説を

平田篤胤と
塙保己一



平田篤胤の像
東京帝國大學藏版の模寫

發揚し、遂に國學を大成して敬
神尊王の大義を明かにせり。
宣長著書甚だ多きが中に、古事
記傳最も有名なり。宣長の門
人平田篤胤、また先師の遺志を
承けて、専ら神道を唱へ、以て敬
神愛國の志氣を鼓舞せり。盲
人塙保己一、また國學に精通し、
定信の執政中、幕府に請ひて、和
學講談所を立て、また群書類從
を編纂し、大いに國學の講究を

徳川光圀

助けたり。かくて、我が國體の尊嚴なることも次第に知れわたり、皇室尊奉の氣風益々盛なるに至れり。

尊王論

これより先、水戸の徳川光圀、厚く朝廷を尊び、廣く學者を聘して、大日本史を編し、または湊川に楠公の碑を建てなどして、大いに名分を正し、尊王の大義を明かにせり。

高山正之筆

皇統綿綿寶祚長久の事
と嬉しくしてもの存すの階
すゝと知るべ

竹内式部

竹内式部は、京都にて公卿の爲に書を講じ、常に皇室の式

つぎて、桃園天皇の寶曆年中に至り、

山縣大貳

明和の變
(二四二七)

寛政の尊王家
高山彦九郎
蒲生君平

微を慨し、尊王の大義を唱へしが、幕府捕へてこれを逐へり。また式部及びその友人藤井右門と志を同じうせし甲州の人山縣大貳は江戸に在りて、武門の專横を論ぜしが、幕府捕へて、大貳、右門を死刑に處し、式部を流せり。時に後櫻町天皇の明和四年なり。



山縣大貳の像(東京皇國大學蔵版) 山縣大貳の像(東京皇國大學蔵版)

りを同志に結べり。

君平また歴朝山陵の荒廢を歎き、山

然れども、國學の勃興と共に、尊王の思想は益々起り、寛政の頃、上野に高山彦九郎、下野に蒲生君平等の志士出でぬ。彦九郎は皇室の衰頽を憤り、常に四方を遊歴して尊王の大義を説き、交

賴山陽

陵志を著しぬ。後また、安藝の賴山陽ライサンヤウは日本外史を著し、巧妙なる文筆を振ひて、尊王の義を發揮せり。天下の志士争うてこれを讀み、勤王の精神を鼓舞したること、頗る大なりき。

第十一章 露國人の來航 海防論

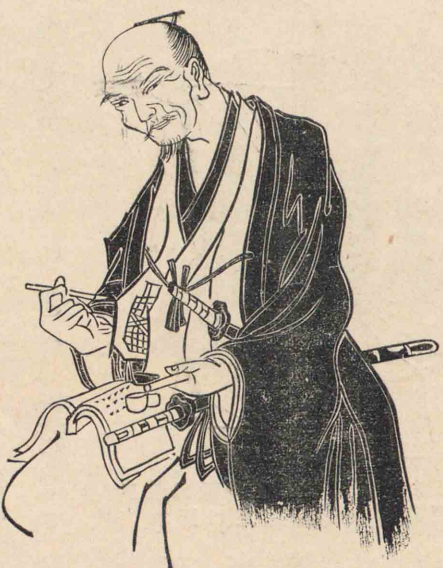
蝦夷地の開拓

海外形勢の變化
露人の來航と海防論 家光の鎖港以來世界の形勢大いに變じ、家治將軍の頃、北アメリカには、アメリカ合衆國獨立し、英國は印度を略して東亞に迫り、露國は悉くシベリアを併せ、進みて我が北邊に出没せり。安永七年露人遂に東蝦夷に來り、始めて通商を求めしも許さざりき。

露人の來航
(二四三八)

林子平の海防論

これより露人の蝦夷侵略を憂ふるもの漸く起れり。高山彦九郎・蒲生君平と同時に仙臺に林子平あり。夙に



林子平の肖像 東京帝國大學大藏所藏
本圖は東原京帝本國大學大藏所藏
彦文版の模寫

内外の形勢を察し、海國兵談などの書を著して、海防の急務を痛論せり。然るに幕府は妄言を以て世人を惑はすものとなし、寛政四年命じて子平をその藩に禁錮し、版木を焼き棄てたり。

露人の來航と蝦夷地の經略 然るに露人は益、我が北邊を侵掠し、子平禁錮の年には、我が漂流民を送りて根室

露人の來航
(二四五二)

近藤守重の蝦夷巡檢

幕府の東蝦夷地經略

露人の來航 (二四六四)

東西蝦夷地の經營

に來り、通商を請へり。幕府諭して長崎に赴かしめぬ。これより幕府も海防に注意し、また近藤守重をして蝦夷地を巡檢せしめたり。守重擇捉島に渡りて、我が國標を建てたり。つぎて幕府は函館奉行を置き、松前氏の東蝦夷を收めて幕領となせり。



伊能忠敬の像(原本は下總伊能源六所藏) 本圖は東京帝國大學藏版の模寫

文化元年露國の使節長崎に來りて、また通商互市を請へり。幕府これを拒絶せしかば露人憤りて、蝦夷樺太を犯せり。幕府乃ち西蝦夷をもその直轄に改め、函館奉行を廢し松前奉行を置きて東西

間宮林藏の探檢

伊能忠敬の測地事業

英人の來航

外船打拂令 (二四八五)

水戸侯の海防攘夷論

渡邊華山高野長英の處罰

蝦夷を經營せり。また間宮林藏は、命を奉じて樺太島を巡視し、更に間宮海峽を探檢して、黑龍江の沿岸に至れり。これより先、幕府はまた伊能忠敬に命じ、蝦夷及びその他の地方を測量せしむ。忠敬自ら羅針を製し、十七年間、百折不撓の精神を以て沿海の形勢を測量し、遂に日本輿地實測圖を完成したり。

外船打拂令とその寛和 かく露人の我が北邊を侵すのみならず、文化五年には英船も長崎を侵掠して去りしかば、文政八年に至り、幕府は外船擊攘の令を下し、水戸侯徳川齊昭は藤田彪等を用ひて、熱心に海防攘夷の策を講じぬ。されば天保年中、蘭學者渡邊華山、高野長英は攘夷の無謀を論じて、嚴刑に處せられたり。



藤原東湖の像（東京菊池二所蔵の模寫）

一五二
ほどなく幕府は鑑みる事ありて、さきの撃攘令をゆるめ、外國の漂流船には薪・水・食料を給し、異心あるものは撃ち攘ふべしと定めたり。これ實に仁孝天皇の天保十三年のことなり。

第十三章 北米合衆國使節の來朝

幕府の衰運 定信退職の後四十餘年間、家齊政を親らし、富貴を極めたり。その間、概して天下太平にして、學

藝の發達著しかりき。されど家齊は晩年に及びて、漸く政に倦み、士民は太平になれて奢侈遊惰に流れ、財政も次第に困難を加へ、幕府衰亡の兆は、漸く現れたり。



江戸季世の風俗

天保の饑饉
大鹽平八郎
の亂

家慶將軍と
なる
水野忠邦の
改革と失敗

會、天保の大飢饉起りて、諸國の人民餓死するもの多かりき。時に大阪の與力大鹽平八郎、學を好みて才名ありしが、幕吏のこれを救助せざるを憤慨し、天保八年徒黨を集めて、亂を作し遂に敗れて自殺せり。これより天下漸く幕府の威令に服せざる傾を生じたり。この年、家齊職を子の家慶に譲れり。老中水野忠邦、才略ありて弊政を改新せんとの志あり、大いに勤儉尙武の風をすすめ、風俗の肅正を圖りしも、その改革急激に過ぎて人心を失ひ、遂にその職をやめられき。世にこれを天保の改革と稱す。かくて幕政の改新は遂に成らず、内には尊王の氣風益盛に、外には外國の刺激ありて、幕府滅亡の期漸く來らんとせり。

大平の
眠りす
を
さまり
上を
たつて
四は
たつ
で夜
も寝
れす
す

ペルリの來
朝
(二五三)

家定將軍立
つ
ペルリ歸國
後の幕府の
處置

米國使節の來朝 孝明天皇の嘉永六年六月、アメリカ合衆國の使節水師提督ペルリ、船艦四隻を率ゐて、浦賀に來り、國書を呈して通商互市を開かんことを求めぬ。幕



開國十五年史挿畫の像
開國十五年史挿畫の像

府は、事の重大なるを見て、その國書を受領し、明年確答すべきを約して去らしむ。この幕府多難の際に、將軍家慶薨じ、子家定嗣げり。幕府は米使の來意を朝廷に奏上し、かつ諸侯に開港の可否を問ひしに、攘夷の意見を建議する諸侯多かりき。時に露國の使節も、亦長崎に來りて樺太の境界を定め、貿易

露國使節への返答の施設

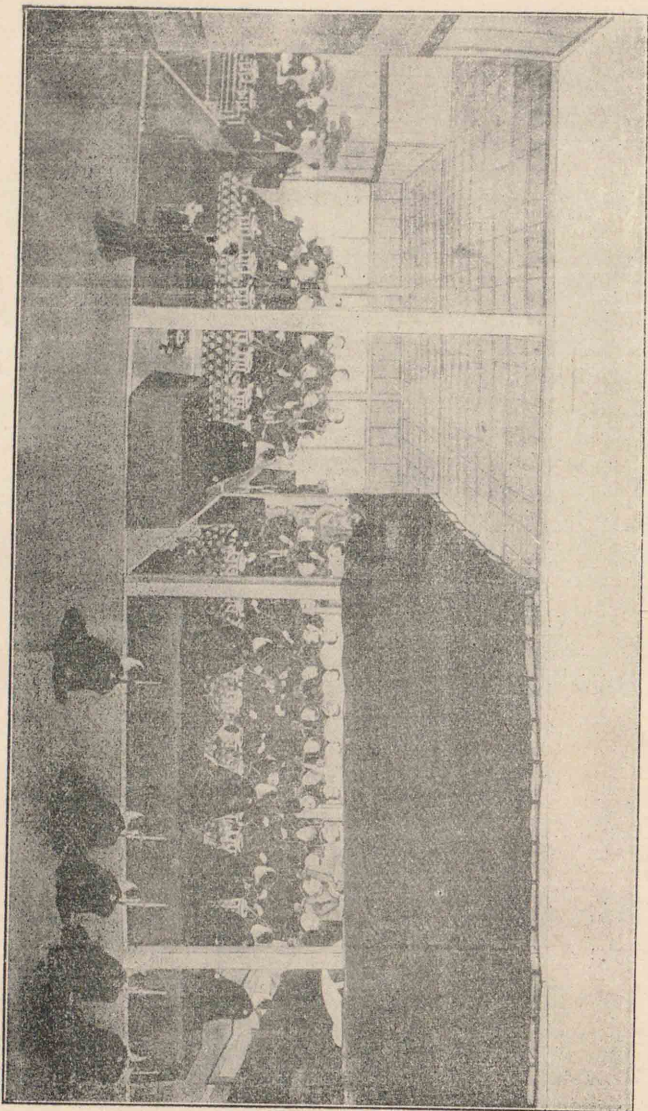
を開かんことを請ふ。幕府はこれが決答をも他日に期して歸らしめき。かくて幕府は俄に品川灣に砲臺を築き、軍艦大砲をオランダより購入し、頻りに防備の策を講じたり。

第十四章 開港攘夷の論 和親條約

ペルリの再来

神奈川條約
露英蘭との
和親條約

和親條約 安政元年正月、ペルリ前約により、再び軍艦を率ゐて、また浦賀に來り、去年の決答を促しぬ。時に和戰の國論未だ一定せざりしが、幕府は漂民の救助、薪水食料の供給及び下田・箱館二港に於ける碇泊等を許せり。これを神奈川條約といふ。つぎて、英・露・蘭の三國にも略同様のことを許したり。



(筆 文川高) (藏 男 純 崎 松 京 東) 圖の應 聖 督 提 ヲル ム
も 最 り な 景 光 の 應 聖 督 提 ヲル ム へ て に 濱 樺 月 三 年 元 政 右
り な 齋 林 頭 學 大 は 是 座 對 に ね こ ヲル ム へ は る 在 に

大まむか知もくれか
松(吉)和れにらりのなげく
陰(田)魂ぬややなとるかす

徳川齊昭の
攘夷論

吉田松陰



(像畫藏三車田吉)像の陰松田吉 (幅藏校學範師等高京東)像の山象間久佐

開港攘夷の論 この時
水戸の徳川齊昭すけあきを始めと
して、攘夷の意見を有する
諸侯多く、志士或は開港を
唱へ、或は攘夷を説き世論
囂然たり。長州の人吉田
寅次郎陰松國外の事情を知
らんと欲し、下田に赴き、米
艦に就きて外航を圖りし
が、事成らずして刑に處せ
られぬ。その母瀧子は、ま
た賢母の名あり。松陰の

あのみつ海に浪もくもく
うのうの御代に
かきをよむくもくもく
あのみつ海に浪もくもく

井伊直弼の
英断五年の
安政五年の
假條約調印

幕府の困難
井伊直弼大
老となる
(二五八)



井伊直弼の像(本原は東郷大蔵所蔵) 井伊直弼の像(本原は東郷大蔵所蔵)

幕府の困難
かば、正睦等その間に立ちて大に苦めり。

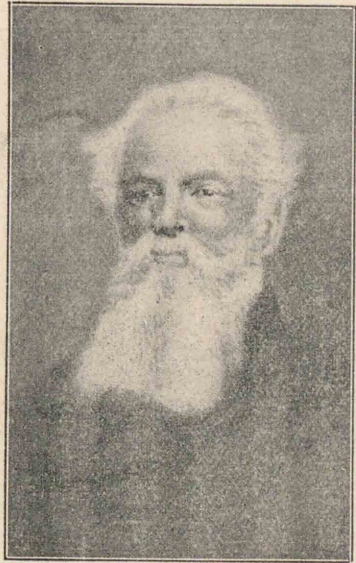
假條約の調印

安政五年、幕府は遂に彦根藩主井伊直

弼を大老に擧げてその局に當らしめたり。直弼豪毅にして果斷あり、英佛兩國が支那に勝ち、その餘威に乗じて、我が國に來り、通商條約の締結を迫らんと聞き、開港の已むべからざるを察し、遂に勅許を待たずして、米國と假條約を結び、下田・函館の外、神戸・新潟

佐久間象山
ハルリスの
來朝

師佐久間象山は博學にして識見あり、夙に開港の議を唱へしが、また松陰の事に坐して罪せられき。
通商條約の議定 安政三年、米國の總領事ハルリス、下田に來り、將軍に謁して國書を呈し、通商條約を結ばんことを請ふ。老中堀田正睦は、遂に開港の止むべからざるを悟り、ハルリスと通商條約



ハルリスの像(開國十五年史挿畫による)

を議定し、安政五年勅裁を請ひしが、志士多く京都に集りて攘夷を説き、天皇は深く國家の前途を慮りて許したまはざりしに、しかもハルリスの決答を促すこと急なりし

通商條約の
議定
條約勅許の
奏請

尊王攘夷論の盛大

將軍の繼嗣問題 一橋慶喜の名望

十四代家茂

長崎・横濱の開港を約し、自由貿易を許せり。つぎて蘭・露・英・佛の諸國とも前例によりて假條約を結べり。これより直弼の專斷を非難する聲、天下に高く、志士東西に奔走して、尊王攘夷を唱ふることに愈盛なりき。

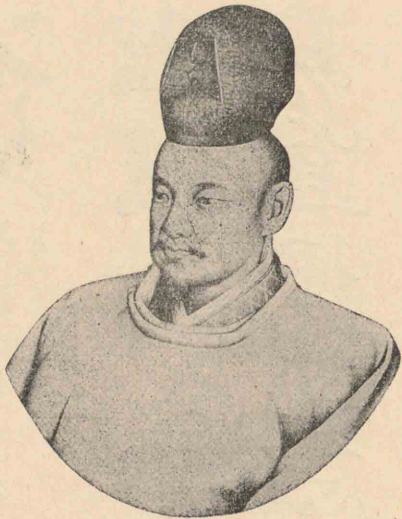
第十五章 安政の大獄 幕府の衰頹

安政の大獄 假條約締結の年、家定嗣子なくして薨ぜり。その薨去の前に、水戸齊昭の實子なる一橋慶喜は、年長じて賢明の聞えありければ、何れもこの人の立たんことを望みしに、直弼は衆議を排し、幼少なる家茂を紀伊より迎へて、家定の嗣とし、かつ自分に反対なりし、水戸尾張越前の藩主を罰しぬ。ここに於て世論愈沸騰せり。

神よ世々よ へつた君 道も臣の かもはめたの 國はこゝに 近衛忠愍

詔勅事件

公卿諸侯名士の處罰



徳川齊昭の像(原本は侯爵徳川順所蔵) 本圖は東京帝國大學蔵版による

志士等憤慨に堪へず、密に同志の公卿と圖るところあり

しかば外交内治に關する詔勅は幕府及び水戸藩に下れり。直弼大いに怒り、遂に近衛忠愍、三條實萬等の公卿を幽し、齊昭・慶喜及び土佐藩主等に蟄居或は退隱を命じ、官方公卿の家臣・藩士浪人・學者・僧侶等凡そ數十人を捕へて、悉く斬流禁錮せり。ここに於て、安島帶刀・梅田源次郎・橋本左内・吉田寅次郎・頼三樹三郎の諸名士多く倒れぬ。これを安政の大獄とい

櫻田の變

子また深く國事を憂へ、志士の間を斡旋し、勤王の行多かりしかば、後特旨を以て正五位を贈られぬ。

幕府の衰頹 この大獄のために、天下の人心ますます激昂し、萬延元年三月、水戸藩の浪士等、直弼を櫻田門外に要撃して、これを殺せり。幕府の威信これより大いに衰へて、尊攘論は天下を動しぬ。是に於て、幕府は上下一致して攘夷の功を奏せんことを誓ひ、皇妹親子内親王和宮の將軍家茂に降嫁あらんことを請ひ奉れり。朝廷已むを得ずして、これを容れ給ひ、文久元年、内親王降嫁し給へり。されど尊攘論者は愈、悦ばず、志士の暴行各地に起りぬ。安政二年、勅使東下して、將軍の上洛を促し、かつ幕政を改良すべきことを命じぬ。幕府、詔を奉じて、慶喜及び松平

公武合體論
志士の暴行

勅使東下

討幕論

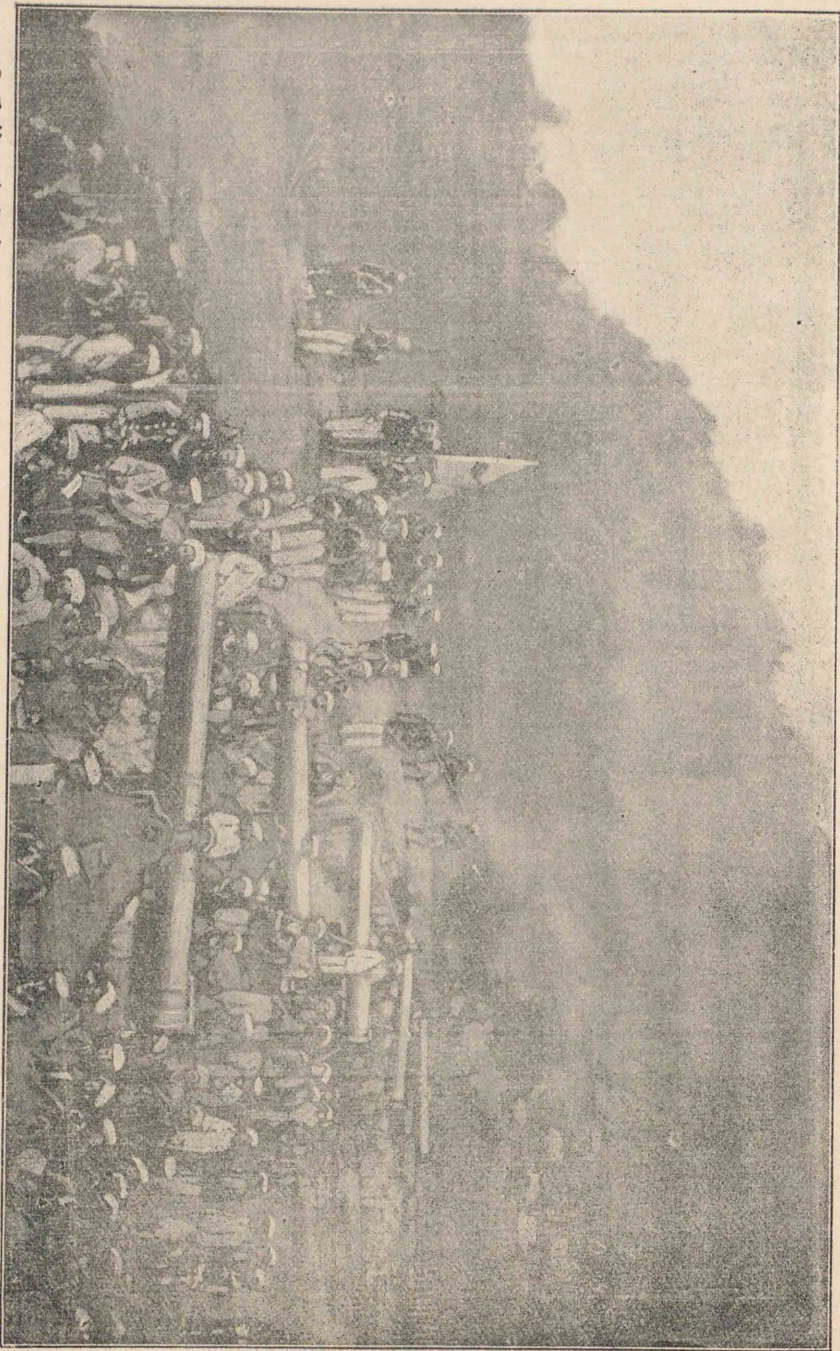
薩長土の威望

慶永を挙げ、頗る改新する所ありしも、終に衰勢を挽回する能はず、皇威は日に熾んとなり、志士は攘夷論に討幕の主義を加ふるに至れり。
この頃諸藩主の入京するもの少からざりしが、薩摩の島津久光、長門藩主毛利敬親、土佐藩主山内豊範は、いづれも闕下鎮護の詔を拜せり。これより薩長土の威名大いに著はれぬ。

第十六章 長州征伐

將軍の上洛
(二五二三)
攘夷論の中心

攘夷實行の勅 文久三年三月家茂入朝せしが、當時京都には攘夷論に傾き、長州藩は實にその中心たりき。天皇は、將軍に詔して攘夷を實行せしめたまふ。家茂事の行



一の兵外てし領占を近附のそ際して撃砲を闕下ひ假と藩州長は隊糧合聯の國四の團傳米英月八年元治元るよに畫挿史年十五國照繪油るせ寫描りよに版原るたし影撮を景光の時黨(黨器上井傳侯景光るせ陸上部

攘夷の期

下關砲戦

鹿兒島砲撃



江戸季世兵士の装束

に迫れる英艦と戦ひ、大いに悟る所ありき。

はれ難きを知りし
 も己むなく勅を奉
 じ、五月十日を以て
 攘夷の期と定めた
 り。期に至りて長
 藩は外船を下關に
 砲撃し、米・英・佛・蘭の
 軍艦と戦へり。ま
 た薩州も生麥にて
 英人を殺傷したる
 事によりて、鹿兒島

御親征の議

朝議一變

長州藩の勅勘

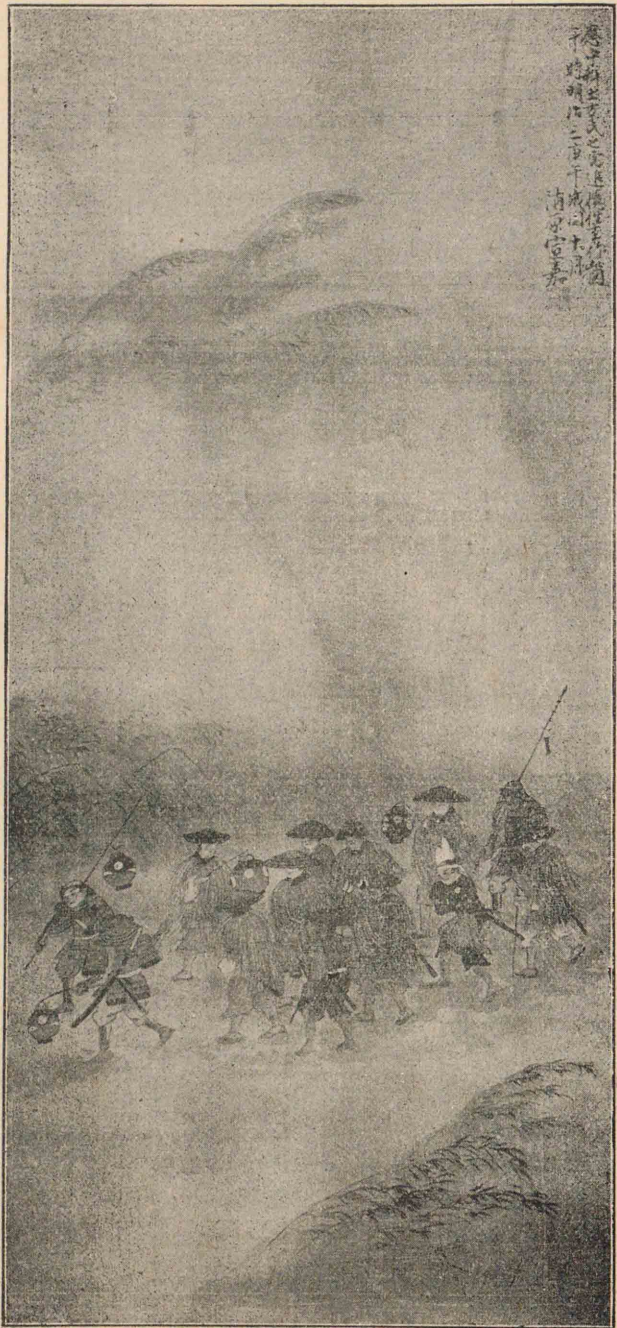
五條生野の變

朝議の一變 時に京都にては、攘夷の議益盛にして、天皇大和に行幸し、神武陵を拜し、外夷親征の詔を下したまはんと、朝議ありき。然るに會津・薩摩の藩士等、朝廷の温和黨と結びて圖る所ありしかば、朝議俄に變じて、行幸は中止となり、長州藩の禁衛を解き、また公卿三條實美等の參朝を停めぬ。長人乃ち實美以下の廷臣七人を奉じて國に走れり。かねて攘夷の先驅たらんとせる、藤本鐵石等大和の五條に起り、平野國臣等はつぎて生野に兵を

平野國臣和歌(京都吉井達藏所藏)

三月廿四日、長州藩の禁衛を解き、また公卿三條實美等の參朝を停めぬ。長人乃ち實美以下の廷臣七人を奉じて國に走れり。かねて攘夷の先驅たらんとせる、藤本鐵石等大和の五條に起り、平野國臣等はつぎて生野に兵を

澤宜嘉筆七人西竄圖(伯爵土方久元所藏)(維新志士遺芳帖による)



澤宜嘉筆七人西竄圖
 伯爵土方久元所藏
 維新志士遺芳帖による



像御皇天明孝
(繪油の藏所人逸羽福爵子)筆耶太正山小
(るよに畫挿史年十五國開)

元治の變
(二五二四)
長州征伐の
近因

長州征伐

毛利氏の恭
順

長藩の戦備

擧げたりしが、いづれも幕兵のために敗られたり。

長州征伐 翌元治元年、長州藩の老臣福原越後等、藩主の赦免及び廷臣七人の復職を請はんとて、兵を率ゐて入京せり。京都守護職會津侯松平容保カマモリは、桑名薩摩等の兵と共に防戦してこれを破る。この役、銃丸飛びて禁闕に達したり。

幕府乃ち奏して、長州征伐の令を下せり。尾張侯慶勝これが總督たり。されど毛利氏は恭順を表し、事に與りし老臣等を斬りて、罪を謝せしかば、開戦に至らずして慶勝

勤王の自害

以下凱旋せり。

長州再征伐 然るに長

藩士高杉晋作・山縣有朋等

高杉晋作筆

長州再征伐
(二五二五)

假條約勅許

薩長の聯合

はこれを憤り、恭順黨を撃破せり。幕府に於ても亦慶勝の處置を喜ばず、慶應元年再び征長の師を發し、將軍家茂自ら大阪に行きて、これを督せり。時に英、米、佛、蘭の諸國、兵艦を率ゐて大阪灣に入り、幕府をして切りに條約の勅許及び兵庫の開港を請はしめぬ。朝廷にても、形勢已むを得ざれば、遂に兵庫の開港を延期



徳川慶喜の像
開國十五年史挿畫に
よる

して、安政五年の假條約を許したまへり。さて、征長の軍起るや、薩長二藩の間には、聯合の密約新に成りて、薩藩は出兵を辭し、その他の諸

幕軍の困難

慶喜將軍と
なる

幕府威信の
失墜

孝明天皇の
崩御

英照皇太后

藩にも幕命を奉ぜざるものありき。されば、慶應二年六月征討の幕軍、長州境に迫りしも、精銳なる長兵のために數破られぬ。偶家茂病を以て大阪に薨じ、慶喜將軍職を嗣げり。天皇乃ち勅して、征長の兵を停めしめたまふ。これより、諸藩多くは將軍の命を奉ぜずして、幕府の威勢は、全く地におちたり。

第十七章 大政奉還

今上天皇踐祚 慶應二年十二月孝明天皇痘を患へて崩じたまふ。天皇賢明にして深く國事を憂へたまへり。皇后夙子また淑徳ありて力を内助につくしたまへり。英照皇太后と申し奉るはこれなり。慶應三年正月、今上

今上天皇の御踐祚

幕府の無力

討幕の運動

山内豊信の意見

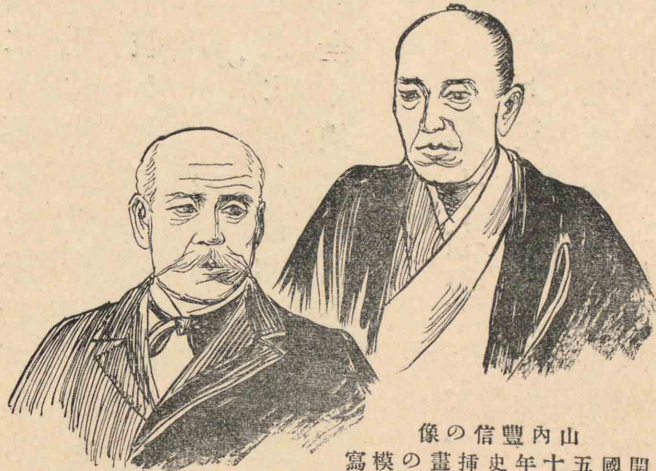
天皇御年十六歳にて位を嗣がせたまひ、ほどなく兵庫の

開港を許したまへり。

幕府の危機 この時に當

り、幕府の威權全く衰へ、既に内外の政務を處理する力なし。薩州の藩士西郷隆盛、大久保利通等は長州の木戸孝允等と結び、更に岩倉具視以下の公卿と通じて討幕の議を凝すに至れり。

土佐の前藩主山内豊信内外の形勢を察し、事の未だ破裂



山内豊信の像
開國十五年史挿畫の模寫

後藤象二郎の像(眞模寫)

後藤象二郎の上京

二條城會議

政權奉還奏上文の一部

小松帶刀等の賛成

せざるに先だち、幕府をして大政を返上せしめ、靜に王政復古の大業を建て、天下心を合せて萬國に對せざるべからざるを思ひ、その臣後藤象二郎等を上京せしめて、將軍慶喜に、大政奉還の事を説かしめぬ。

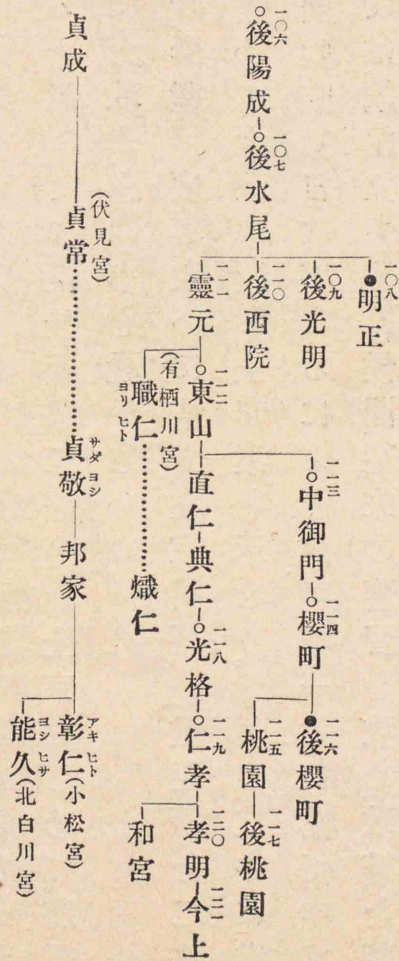
大政奉還 慶喜大いに悟り、在京諸藩の重臣等を二條城に集めて、大政奉還の上奏案を示せり。その文中に「當今外國の交際日に盛なるにより、愈、朝權一途に出で申さず候ては、綱紀立ち難く候間、從來の舊習を改め、政權を朝廷に奉歸し、廣く天下の公議を盡し、聖斷を仰ぎ、同心協力、共に皇國を保護仕候へば、必ず海外萬國と並立すべく候との文句ありき。後藤象二郎及び薩藩士小松帶刀等大いにその英斷を賛しければ、慶喜愈、その意を決し、直ちに

慶喜の大政返上の奏上
(三五二七)

これを上表したり。これ實に慶應三年十月にして、薩長二藩が討幕の密勅を請ひ受けたると同日のことなり。家康が將軍となりしより、十五代、二六五年にして、江戸幕府は亡び、政權始めて皇室に復せり。

宮家は多くあれども、史に關係多き御方ののみを載せた

皇室御系圖



王政復古の大令

總裁・議定・參與の新設

第十八章 鳥羽・伏見の戦

王政復古 徳川慶喜大政を奉還するや、朝廷にては、廷臣及び諸侯を會して、國政の方針を議したまひ、先づ三條

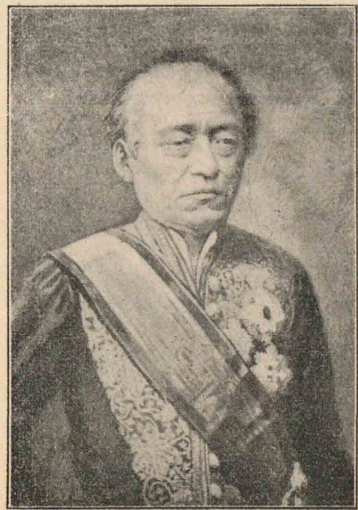


三條實美の肖像 (開國十五年史挿畫による)

實美以下及び毛利慶親等の罪を赦して、その官位を復し、つぎて王政復古の大令を發したまひ、攝政・關白・征夷大將軍等の官職を廢して、新に總裁・議定・參與の三職を置き、萬機を親裁せさせたまふ。總裁には有栖川宮熾仁親王、議定には仁和寺宮嘉彰親王以下、皇族公卿及び藝・尾・薩・土等の諸藩主、竝に三條實美・岩倉

岩倉具視の
賛畫

具視等の廷臣、また參與には、西郷隆盛、大久保利通及び後藤象二郎等の諸藩士これに任せられぬ。



岩倉具視の像(公爵岩倉具定藏) 開國十五年史挿畫による

神武天皇創業の御聖旨に基き、進取正大の政を施さんと欲して國事を賛畫せり。されば今や公武別なく、才能を登用し、大小の政令皆朝廷より

出で、王政復古の大業始めて成れり。

幕臣の不満

鳥羽伏見の戦 時に慶喜は、なほ二條城に在りしが、この改革に與らざりしのみならず、辭官納土の内旨をさへ

人材の登用
王政維新

慶喜の退京

受けしかば、譜第の將士等、これを喜ばず、慶喜もまた疑惑する所あり。よりて、慶喜は事變の生ぜんことを慮りて、一時大阪城に退居せり。

江戸の薩邸
燒撃

會、江戸の浪士等、薩州の藩邸にかくれ、市中を横行して、暴悪を極めしかば、幕兵、その邸を襲ひて、これを燒く。その

慶喜入京の
企圖

報大阪に達するに及び、慶喜遂に意を決し、明治元年正月、討薩の表を上り、會津・桑名等の兵を先鋒として、將に入京

鳥羽伏見の
戦

せんとす。薩長の兵は、朝命を奉じて、これを鳥羽伏見に逆へ撃ち、嘉彰親王は征討大將軍に任せられ、錦旗を擁して軍を督したまふ。幕兵遂に敗れ、慶喜等は大阪より海

戦後の状況

路江戸に逃れぬ。朝廷乃ち慶喜征討の詔を發し、慶喜及び會津・桑名二藩主以下の官位を削る。諸藩風を望みて

歸順し、關西の諸侯は全く朝命に服するに至れり。

第十九章 明治戊辰の役

征討軍東下 明治元年二月、朝廷、熾仁親王を東征大總

征東軍の進
發
慶喜の恭順



(藏精勝雷伯像の芳安勝
るよに畫挿史年十五國開)

督となし、西郷隆盛等を參謀とし、諸藩の兵を率ゐて江戸に向はしむ。慶喜大いに前非を悔い、上野寛永寺に屏居して恭順の意を表し、その臣督令して、江戸攻撃を止め、狀を朝廷に奏せり。四月、勅使

勝安房等をして、西郷隆盛に就きて罪を謝せしむ。大總

江戸城を收
む

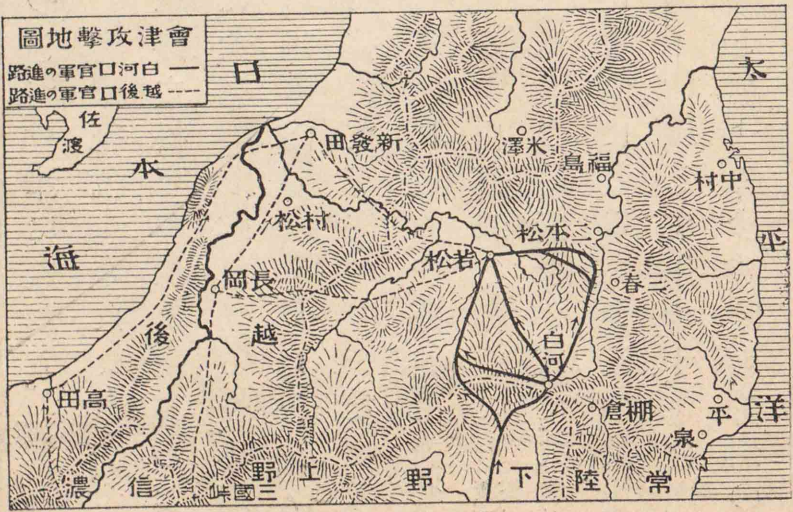
江戸城に入り、城池、軍艦及び兵器を收め、慶喜を水戸に幽し、田安家達を静岡に封じて、宗家を嗣がしめたまふ。

幕臣の擧兵 然るに幕臣

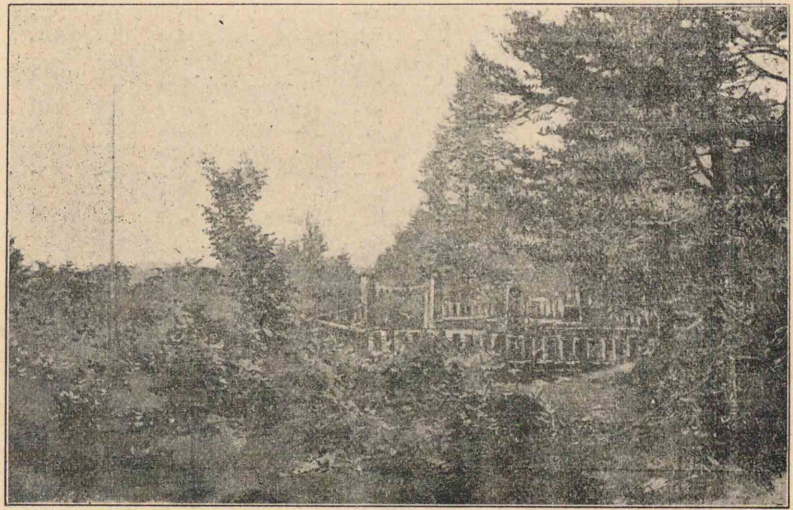
彰義隊

大鳥圭介

等の中には、慶喜の恭順を喜ばざるもの少なからず。江戸にては、幕府の舊臣等、彰義隊と號し、輪王寺宮を擁して上野に據り、大鳥圭介等は常總地方に轉戦せしが、何れも官軍に討ち破られ、殘徒は相



會津の兵備



會津攻撃

白虎隊の墓

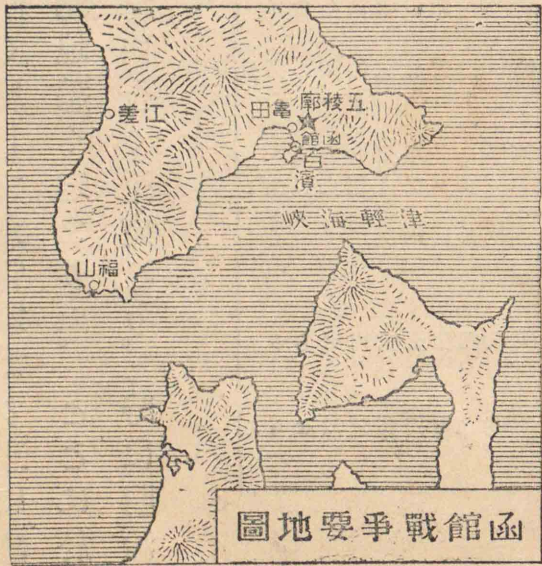
つぎて會津に走れり。
會津征伐 これより先、會津藩主松平容保は、慶喜と共に大阪より逃れ歸るや、奥羽越後の諸藩と連合し、若松城に據りて死守の計をなせり。官軍既に關東を平定し、越後口及び白河口の兩道より進み、沿道の諸藩を平げて、次第に會津に迫る。會津の城兵能く防戦して屈せず。白虎隊と稱する少年隊も、勇烈の

奥羽の平定

事跡を残せり。九月に至り、力全く盡きて、容保遂に出でて降り。東北の諸藩も亦皆相前後して歸順せしかば、十月に至り、奥羽全く平ぎぬ。よりて、朝廷はその地を分ちて七國となせり。

榎本武揚

北地の鎮定 これより先幕府の海軍副總裁たりし榎本武揚は、軍艦八隻を率ゐ、東北に脱走して、松島灣にありしが、若松城陥るに及び、大鳥圭介等を収めて、函館に走り、五稜廓に據る。官軍進みてこれを攻



函館戦争要地圖

近世の概括

年代 近世は百二代後陽成天皇の慶長八年(二二六三)より、第百二十一代今上天皇の明治元年(二五二八)まで、凡そ二百六十五年間に亙れる、全くの江戸幕政時代とす。

變遷 後陽成天皇の御代に、徳川家康は、江戸幕府を創立し、巧妙なる政略を以て諸侯を統制し、天下太平の基を開き、謹厚なる秀忠及び豪邁なる家光は、能く父祖の遺業を大成して、幕府の制度を整へ、鞏固なる中央政府を作りぬ。江戸幕府の初め、國民の雄大進取の氣象は、戦國時代より引きつづきて、大いに振ひ、幕府は國富を増さんと欲して貿易を奨励せしかば、諸外國との交通盛に起りしが、

北地の鎮定
海内平定

め、激戦數回の後、武揚等力漸く屈し、また官軍より懇に諭されしかば、遂に出で降り、北地悉く定まりぬ。ここに於て維新の戦亂終りを告げ、海内全く平定せり。時に明治二年五月なりき。

| | | |
|-------|----------------|----------------------|
| 2550- | 今上 明治元 (2528) | 鳥羽伏見の戦 |
| | 今上 慶應三 (2527) | 慶喜大政を奉還す |
| 2520- | 孝明 萬延元 (2520) | 櫻田の變 |
| | 孝明 嘉永六 (2513) | 米艦浦賀に来る |
| | 仁孝 天保八 (2497) | 大鹽平八郎の亂 |
| 2490- | | |
| | 仁孝 文政八 (2485) | 外船の撃攘を令す |
| | 光格 文化五 (3468) | 間宮林藏樺太を探検す |
| 2460- | | |
| | 光格 寛政四 (2452) | 林子平罰せらる ロシア人蝦夷に来る |
| | 光格 天明四 (2444) | 天明饑饉 |
| 2430- | | |
| | 後 櫻 明和四 (2427) | 山縣大貳罰せらる |
| | 桃 園 寶曆八 (2418) | 竹内式部追放せらる |
| 2400- | | |

江戸時代後期年表

天主教禁止のため、家光が鎖國主義を執りしより、海外膨脹の勢は、これがために抑制せられ、民心は専ら國內に向ふに至れり。幕府の創立より、この時までを江戸時代の前期創業時代とす。

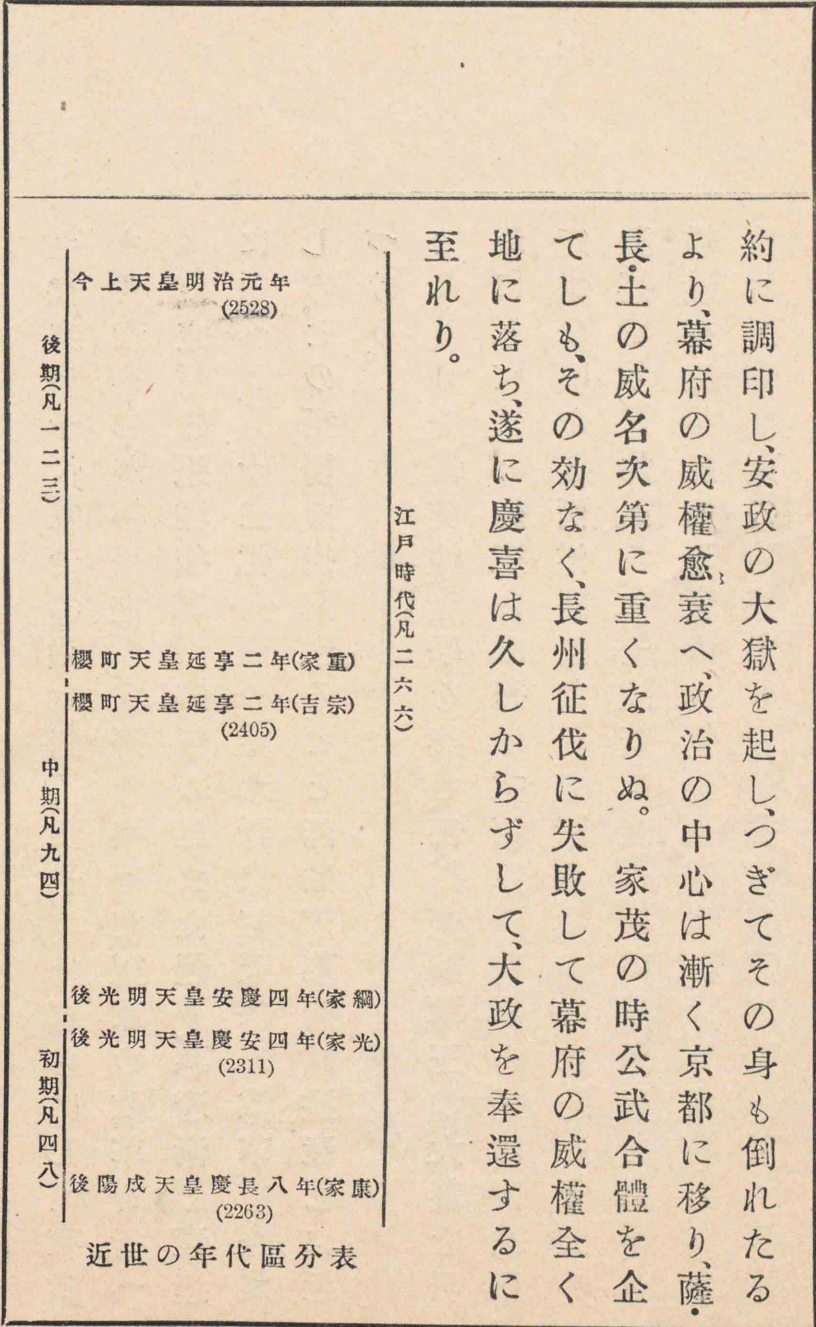
後光明天皇の御代に、家綱立ちてより、天下漸く太平に向ひ、綱吉つぎて文藝を奨励し、一時元祿時代の盛運を見るに至りしが、その後弊政多く、天下の人心華奢優柔に赴き、幕府の威勢稍減じたり。家宣將軍となるに及び、新井白石を任用し、前代の弊政を改めぬ。家綱を経て、八代將軍吉宗立ち、英邁の資を以て、勤儉尙武を奨め、實學産業を起し、能く幕政を振興して、中興の大業を擧げたり。家綱以後、この時までを江戸時代の中期隆盛時代とす。

九代家重、十代家治の時は、田沼父子、權を専らにして、幕政また衰へしが、松平定信、家齊を輔けて、寛政の改革を行へり。定信の退職後、奢侈遊惰の風また起り、幕府漸く衰運に向へり。十二代家慶の時、水野忠邦、天保の改革を企てしも、この頽勢を挽回すること能はず、幕府は益衰亡に近づけり。

これより先、僧契沖、國學を興し、徳川光圀、尊王の大義を明かにしてより、勤王の思想は次第に國民の心裡に發達し、定信の頃より、西洋諸國の勢力漸く我が國に迫りて、人心動搖せり。加ふるに、土道既に衰へ、財政は困難を加へ、米艦渡來以後、幕府積衰の内情全く露はれぬ。家慶、家定の世は開港攘夷の論盛なりしが、井伊直弼果斷を以て假條

約に調印し、安政の大獄を起し、つぎてその身も倒れたるより、幕府の威權愈々衰へ、政治の中心は漸く京都に移り、薩長土の威名次第に重くなりぬ。家茂の時公武合體を企てしも、その効なく、長州征伐に失敗して幕府の威權全く地に落ち、遂に慶喜は久しからずして、大政を奉還するに至れり。

江戸時代(凡二六六)



後期(凡一二三)

中期(凡九四)

初期(凡四八)

文物・佛教 初め家康・綱吉等大いに學問を獎勵せしより、文教復興の運に向ひ、漢學及び國學の大家相つぎて出でたり。吉宗の頃より實學盛に起り、西洋の學術も次第に傳來せり。また太平久しく打つづき、庶民も富有を増しければ、平民文學も、盛に行はれ、教育は公武上下を通じて普及したり。美術・工藝は、多年の太平と奢侈の世風につれて著しく發達し、豪華壯麗より次第に優美纖麗の氣風に移れり。佛教は家光の宗門改の制度の厲行以來大に勢を加へ、僧侶の富有に赴くと共に、その務を怠るに至れり。また明亡びて、その遺民我が國に歸化し、文藝宗教の進歩を助けたること少からざりき。

現代の一般

新政の大方
針確立
(明治元年)
官制の改定

版籍奉還
廢藩置縣
(四年)

外國との和
親
岩倉具視等
の海外派遣
(四年)

明治の新政 明治元年三月、天皇親しく神祇を祭り、五事を誓ひたまひてより我が新政の大方針は立ち、開國進取の國是は定まりぬ。つぎて太政官に七官を置きて庶政を分掌せしめ、翌年東京に奠都したまへり。この年また諸藩の版籍奉還をゆるし、四年には廢藩置縣を實行せられしかば、全國の政治はじめて一統し、郡縣の制全く成りぬ。

明治初世の外交及び拓殖 王政復古して、開國の主義定まるや、これを内外に布告したまひしが、明治四年に至りて、更に右大臣岩倉具視等を歐米各國に派遣せられ、海

征韓の議却
けらる
(六年)

臺灣征伐
(七年)

北海道の經營

千島樺太の
交換
(八年)

外の國勢を巡察せしめらる。これより西洋の文化次第に我が國に入り來れり。これより先、我が朝廷は、屢使節を朝鮮に遣はして修交を求めしに、彼はこれを拒み、無禮をさへ加へければ、我が國には征韓論盛に起りしが、岩倉大使等歸朝するに及び、内治の急務を唱へて、征韓の議を却けぬ。明治七年に至り、問罪の師を起して臺灣南部の蕃地を平定し、清國より償金を出さしめき。又、蝦夷は、明治二年に北海道と改稱し、つぎて札幌に開拓使を設けて、大いに移住開墾を奨め、拓殖の業年と共に進歩せり。樺太の境界は、江戸幕府以來の問題なりしが、明治八年樺太全島を露國に與へ、千島列島を我が國に收めて、全く局を結びぬ。

門閥制の廢止
 學制の整頓
 徵兵令の制定
 其の他の改新
 地方騷亂の原因
 西南の役
 國內の鎮靜

事物の改新 維新以後、我が國は廣く世界の知識を求め、百事改進を主としたれば、十數年の間に、百般の事物殆ど面目を一新せり。社會上には、門閥制の廢止によりて一大變化起り、大學校の開設、五年の學制頒布によりて教育は大いに發達し、六年の徵兵令によりて國民皆兵の實成りぬ。その他法律の整頓、交通機關の改善、儀式風習の改良等も行はれ、百物その觀を改むるに至れり。

地方の騷亂 かくの如く諸般の變革激しき時代なれば、往々意見の衝突起り、また征韓の議容れられざる不平の黨も少なからずして、各地に叛亂起りしが、前後皆討平せられたり。十年に至り、西郷隆盛は遂に私學校黨に擁せられて兵を擧げしが、敗れて自殺し、國內全く靜穩に歸

立憲政體の基礎

民選議院論
 政府の施設
 國會開設の大詔
 官制の改正
 自治制の施行
 憲法發布
 國會開設
 我が國と朝鮮及び清國との關係

しぬ。

立憲政體の確立 維新の初、廣く會議を興し、萬機公論に決すべきを宣したまひしが、征韓論のことより、政府を退きし人々は、盛に民選議院の設立を建議せり。政府もまた元老院を設け、府縣會を開きなどして、立憲政治の準備につとめ、十四年に至り、天皇は國會開設の大詔を發したまへり。つぎて官制も改正せられ、地方自治の制も布かれたり。二十二年に至り、天皇は帝國憲法を發布したまひ、翌年帝國議會を召集し、開院の式を擧げさせられしかば、立憲政體も全く確立するに至れり。

明治二十七八年戰役 明治八年、江華島事件起るや、我が國は翌年朝鮮と通商條約を結べり。然るに朝鮮には

東學黨の亂
(二十七年)

明治二十七年
八年戰役

附 遼東半島還

獨立事大の兩黨ありて常に相争ひ、變亂屢起りぬ。十七年に及び、事大黨は清國の駐在兵と合して、京城に於ける我が公使館を焼き、居留民を殺掠せしかば、我が國は韓廷をして罪を謝し、償金を出さしめ、翌年使を清國に遣はし、天津條約を結びて、將來朝鮮に出兵の必要ある場合には相通知すべきを約しぬ。二十七年に至り、朝鮮に東學黨の亂起るや、清國は屬邦の亂を鎮むと稱し、兵を出せり。よりて我が國も亦兵を朝鮮に送りしが、遂に彼我の國交破れぬ。然るに清國は連戰連敗して遂に和を請ひ、下關條約成りて、償金二億兩を出し、遼東半島、臺灣諸島、澎湖列島を割讓すること等を約せり。既にして、露獨佛三國の干涉ありしかば、我が政府は遼東半島を清國に還附せり。

臺灣の經營
内政の振張

條約改正

露國の極東
經營

露軍の滿洲
占領

國運の振張 この戰役後、我が國運は大いに振ひ、臺灣經營の效果次第に舉がり、軍備は擴張せられ、産業貿易は年を逐うて隆盛に向ひ、教育は益進歩し、交通機關は頗る發達し、貨幣制度も改正せられたり。これより先、安政五年に調印せられたる歐米諸國との通商條約は、我が國の體面を害し、不利なる點も少からず。よりて屢、その改正を圖りしも常に成立を見るに至らざりしが、二十七八年戰役中より次第に改正條約を結び、我が國は關稅權の一部を除く外、殆ど歐米諸國と對等の交際をなすに至れり。
明治三十七八年戰役 日清戰役後、露國は専ら力を極東の經營に盡し、朝鮮にもその威を振へり。明治三十三年、北清事變起るに及び、露國は頻りに兵を滿洲に出して、

日英同盟
(三十五年)

日露戦役の
近因

日露戦役

これを占領せり。よりて明治三十五年我が國は清韓保
全、東洋平和を目的として、英國と攻守同盟を結びしかば、
露國は急に清國に對して滿洲撤兵條約を結びぬ。然る
に露國は期に臨みて兵を退けず、却つて兵を北韓に入れ、
我が國の平和的協商の提議に對しても、全く交讓の誠意
なく、陰に軍備の充實を急ぎしかば、三十七年二月、遂に兩
國の平和破れたり。これより忠勇なる我が軍は、連戦敵
を破り、旅順港を陥れ、奉天に大勝を得、日本海、海戦には
敵艦隊を殲滅して、世界を驚嘆せしめたり。かくてプロ
リカ合衆國の大統領ローズベルトの周旋によりて、ポー
ツマスの講和條約成立し、韓國に於ける我が國の優越權
は承認せられ、露國は北緯五十度以南の樺太を我に割き、

また滿洲に於ても、我に讓る所少からざりき。

日露戦後の國勢

韓國我が保
護國となる
韓國の併合
(四十三年)

諸外國との
協約
日英同盟の
改新
條約改正

國勢の振興

韓國と協約を結びて、我が宗主權を確立し、その後韓人の
中には日韓合邦を請ふものありき。四十三年に至り、遂
に彼我が併合條約全く成り、朝鮮半島一千二百萬の人民
も、我が皇恩に浴するを得るに至れり。これより先、我が
國は佛、露などと協約を結びて、親交を重ねしが、また四十
四年には英國との同盟條約を改新し、條約改正も次第に
行はれ、遂に我が國は世界の列強と、平和に對等の交際を
なすに至りぬ。

今や我が國は、文藝、産業、交通等、百般の事物は駸駸として
進み、皇威愈、振ひて、世界強國の一に數へらるるに至れり。

我が女子の
覺悟

我が國の女子たるものも、深く古今の成敗に鑑み、世界の現況を察し、益奮勵して奉公の至誠を致し、以て皇恩に報ゆる所なかるべからず。

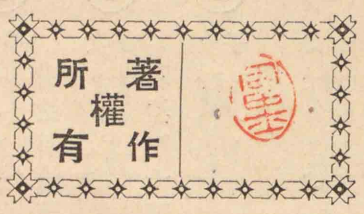
子女日本史教科書 下巻終

| | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|
| 大正三年 | 明治三十二年 | 明治三十二年 | 明治三十二年 | 明治三十二年 |
| 四月 | 五月 | 五月 | 五月 | 五月 |
| 十日 | 十日 | 十日 | 十日 | 十日 |
| 印刷 | 發行 | 訂正 | 訂正 | 訂正 |
| 發行 | 發行 | 發行 | 發行 | 發行 |

子女日本史教科書(下巻)

定價金六拾五錢

文部省檢定
高等女子學校歷史教科書
明治四十五年四月六日



| | | | |
|------|-----|-------|-------|
| 發售所 | 印刷所 | 發行者兼 | 著者 |
| 目黒書店 | 友文社 | 岩田僊太郎 | 富士徳治郎 |

目黒書店
東京市京橋區南傳馬町貳丁目五番地
振替貯金口座二八〇九番

友文社
東京市神田區三崎町三の一

岩田僊太郎
東京市下谷區櫻木町貳番地

富士徳治郎



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 教 諭
富 士 德 治 郎 著

◎ 子女 日本史教科書 第一等女學校 定價金四拾七錢冊

明治四拾五年四月六日 文部省檢定濟

◎ 子女 日本史教科書 第二等女學校 定價金六拾五錢冊

明治四十五年四月六日 文部省檢定濟

◎ 子女 東洋史教科書 第三等女學校 定價金四拾錢冊

明治四十五年三月二十二日 文部省檢定濟

◎ 子女 西洋史教科書 高等女學校 定價金六拾錢冊

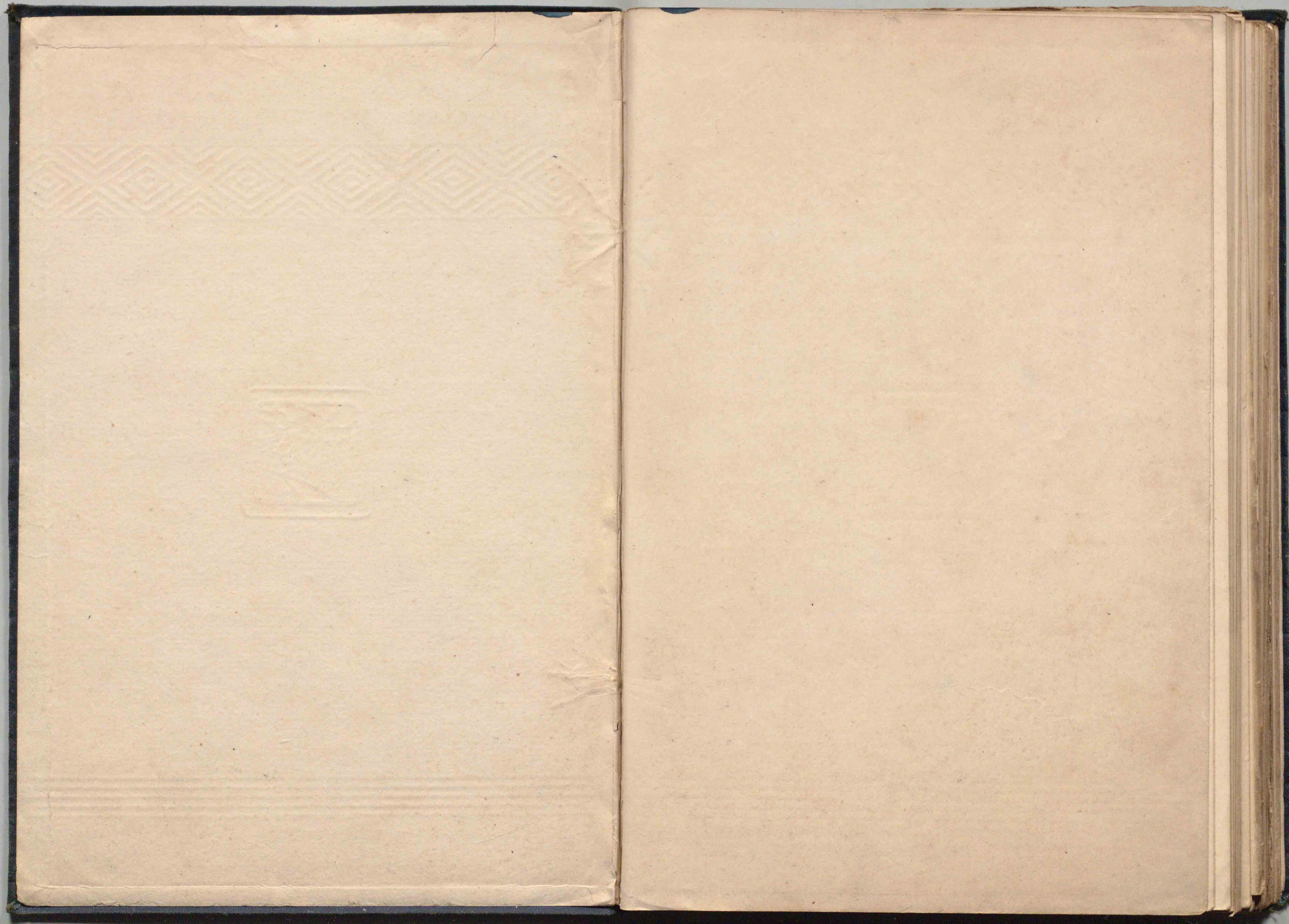
明治四十五年三月十四日 文部省檢定濟

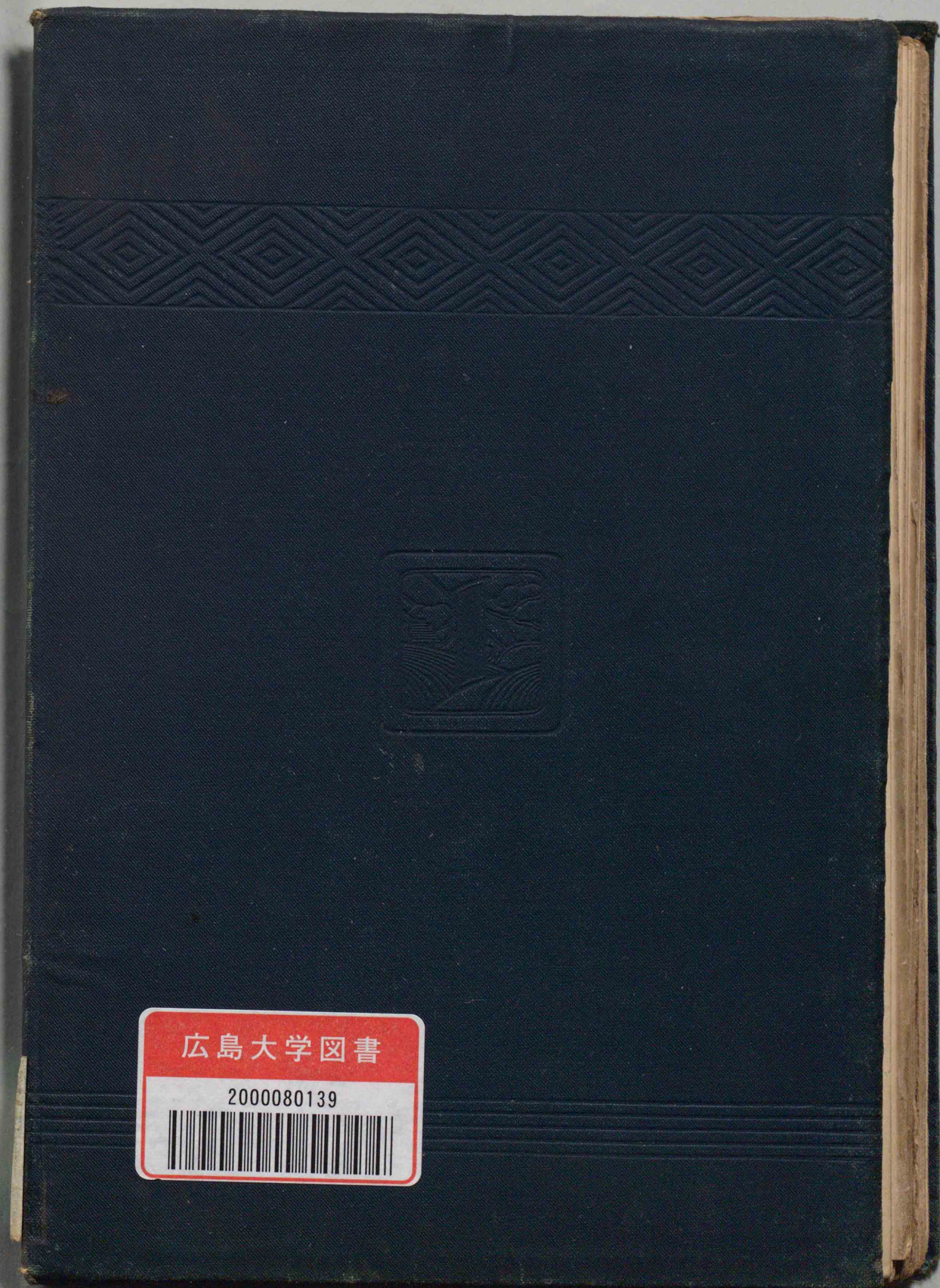
◎ 子女 西洋史教科書 高等女學校 定價金五拾五錢冊

大正二年二月十日 文部省檢定濟

◎ 子女 日本史教科書 高等女學校 定價金參拾七錢冊

大正元年十二月二十四日 文部省檢定濟





広島大学図書
2000080139

